

# 『明治の平和主義小説』 目次

序論	1
序論 <small>ニュース</small> 新聞はなぜ小説 <small>フィクション</small> を必要としたのか	
第一部 国家のための暴力は許されるか	15
第一章 福地桜痴『仙居の夢』論―表象された代表議会制	15
第二章 村井弦斎『匿名投書』論―自衛のための戦争は許されるか	29
第三章 遅塚麗水『電話機』論―テクノロジーへの警告	34
第二部 言葉による暴力は許されるか	47
第四章 村井弦斎『小説家』論―小説の面白さとは何か	47
第五章 村井弦斎『釣道楽』論―進化論の受容と不安	57
第六章 福地桜痴『女浪人』論―『主』を持たない者の革命	64
第三部 平和のための暴力は許されるか	73
第七章 木下尚江『火の柱』論―実効性ある反戦小説のために	73
第八章 木下尚江『良人の自白』論―非戦論における『公』と『私』	86
第九章 木下尚江『墓場』論―非暴力的抵抗の挫折	101
結論 <small>フィクション</small> 小説は新聞 <small>ニュース</small> を変えられるか	111

# 『明治の平和主義小説』 序論

ニユース  
フィクション  
—新聞はなぜ小説を必要としたのか—

一 「平和主義小説」とは何か―矢野龍溪『経国美談』を例として

「平和主義小説」とは、戦争をはじめとする暴力を廃絶するために書かれた小説であると本論は定義する。

戦争の廃絶を目的とする文芸の起源は古く、古代アテナイのアリストパネスの『平和』（紀元前四二一年）にまでさかのぼることができる。近代日本文学においては、以下に引用する矢野龍溪の『芥武名士 経国美談』（以下、『経国美談』と表記する 前編一八八三（明治一六）年 後篇（一八八四（明治一七）年）が、明確な目的意識を持った平和主義小説の最初の例である。

今日一国一邦の社会には已に法律の設ありて各人各族の間に暴力の争闘を絶ち得たるに独り邦国相互の間にては大は小を併せ強は弱を食み未だ暴力争闘の賤境を脱せざるは人類の大恥と云ふべし然れば一国社会に行はるゝの平和主義①を広めて之を邦国相互の交際に及ぼし希臘全土に於て永く暴力の争を絶たん

『経国美談』後篇 第十三回

だが、『経国美談』のこの場面（後篇第十三回〜第十四回）で描かれた平和会議が史実通りではないことは、すでに柳田泉によって、「安太隆の平和会議といているが、安太隆の会議といふのは年代が違ふ。これは史実はあつたのだが、二つを一つにして近世の外交史的知識を加へ、伯林会議なり維納會議なりの場面を参考にして、龍溪が捏ね上げたものである」（龍溪の小説『経国美談』そのほか）『柳田泉の文学遺産』第三巻 右文書院 二〇〇九 初出 『芸術殿』第一巻第五号 梓書房 一九三一（昭和六）年）と指摘されている通りである。

古代ギリシア史上における紀元前三八七年のアンタルキダスの和平とは、クセノポン『ギリシア史』（根本英世訳 京都大学学術出版会、一九九八）②にもあるように、ペルシア帝国の武力を背景としてスパルタ人アンタルキダスが締結したものであり、龍溪の作中でコリンツ人アンタルキダス（安太隆）が「平和主義」の理念に基づいて提唱した平和会議とは、人名以外に似たところはない。

しかし龍溪が、「伯林会議なり維納會議なりの場面を参考にしたという柳田論は承服しがたい。『経国美談』後篇と同年の『龍動通信』を見ても、伯林会議の拘束力は宗教の異同によるローメリアの事変を防げなかった趣旨の記事があり（十月二日発）、同会議に期待も幻想も抱いていなかったことがうかがえる。後年の『不必要』（一九〇七）では、「普魯

西のビスマークとか（伯林会議の主催者。略）あんな卑劣な策略でも皆な人が、えらいと言うて誉めるやうだが、若し他日列国の間に、大平和でも出来る時代が来ると仮定めたら、どうだネ、平和時代の人民は古を顧みて、彼等兩人はあんな意地悪い事をして、愚な事に骨を折つたもんだと、笑ひは仕ないか」と、さらに辛辣な評価を下している。

一九世紀の国際会議がモデルでないとすれば、龍溪が描いた平和会議とは何によるものか。作中では以下のようにコリンツの地政学的位置が平和主義を生んだように描かれているが、それは史実に反する。

コリンツ

哥倫は其の位置正に希臘の南部中部の間に在て（略）成るべく中立を守り南方の強国

スバルタ  
ス波多北方の強国阿善、齊武（略）の間に立て之に與みするを避け（略）平和を好むの

国柄なるに因る者か数前年より其の国人中に希臘全土の大平和を謀らんとする一社を現出せり（後篇第十三回）

管見の限りでは、紀元前三七一年前後のギリシア史の最も精密な分析である、中井義明「帝国の終焉―スパルタ帝国の解体の最終プロセス―（一）」『社会科学』二〇〇四年一月）によれば、コリンツス（コリンツ）は紀元前三七一年当時、レウクトラの戦いの直後でさえも、熱心かつ大胆（クセノポンの形容）なスパルタ側同盟の一員であった。内憂外患に

イパミノンダス

さらされたコリンツがエパメイノンダス（『経国美談』の主人公の一人威波能）率いるテ―バイ（齊武）と休戦条約を結ぶのは、五年後の紀元前三六六年のことである。

龍溪も参照したというクセノポンその他の資料③による限り、紀元前三七一年当時のコリンツは平和主義どころか中立国でさえなかったのである。従って、冒頭に引用した、同国の平和社中が説く平和論はすべて龍溪の創作ということになる。

『経国美談』執筆の時期にあつては、前編凡例に「著者が此書を編むや（略）正史事実を専ら記載するの本意なるか故に毫も正史の事実に悖らざるを勉めたり」とあるように、龍溪はまだ創作者としての自覚を持っていなかったように思われてきた。

以下にあげるのは、『経国美談』の創作としての価値を否定する論の典型である。

蓮實（重彦） 『経国美談』にしても、理想を追う者が最後に勝利するという構造だ

けで、あとは、「自由」とか「革命」とかをめぐる一種の啓蒙が隠し味として人を惹きつけている。そこには江戸的な洗練なんてまるでないし、文学的な想像力も皆無です。ということとは政治小説は結局素人芸の域を出なくって、実際に書いているのは、政治的なジャーナリストでしょう。だから、仮に過剰な何かがあっても多分に物語的で、散文的特質としての分析Ⅱ記述からは遠く、詩的な煽動性で人の心をとらえたにすぎない。

柄谷行人編 『近代日本の批評Ⅲ 明治・大正篇』 講談社文芸文庫 一九九八

果たして『経国美談』には「文学的な想像力は皆無」であろうか。先に引用した凡例のすぐ後には、龍溪はこうも書いているのである。「唯残忍に過くるか如き箇条は一二の事実を没したることなきあらず。（略）殺戮の事実を捕縛に止むるものも甚少からず」。

現に前編のクライマックスである第十八回「十二の婦人宴席に入る」の奸党襲撃場面では、「俱氏に抛れは是時奸党四名を殺す」と自ら注しているにも関わらず、本文では「志士が私憤を抑へ殺戮を慎み一人の性命をも絶たずして之を縛し得たるは古今稀有の挙動なり」と感せぬ者こそ無かりけれ」と、主人公たちの革命が殺戮によるものではないことを強調している。龍溪は革命は殺戮をとまうという歴史的事実を認めつつも、「一人の性命をも絶た」ない革命を理想としていたことは明らかである。

少年時に鳥羽伏見の戦いに参加し、立憲改進黨の幹部として自由民権運動の騒乱を体験してきた矢野龍溪は、現実政治が暴力と不可分であることを理解していた。だからこそ、彼は小説創作という手段によって、暴力を伴わない政治のモデルを提示しようとしたのである。本論はそこに、蓮実重彦が否定した、矢野龍溪の「文学的な想像力」を見る。

先に引用した「平和主義」の要点は、平和とは無為自然の状態ではないという指摘にあった。「法律の設」が個人レベルでの争闘を禁止したように（それが一国社会レベルでの「平和主義」である）、諸国家のより上位に戦争の禁止者を人為的に設立することにあつた。これはカントの「自然状態はむしろ戦争の状態である。（略）したがって平和状態は作り出されねばならない」（『永遠の平和のために』（一七九五）という人為平和説を連想させる。そして作中で具体的に提案されるのは、

各国より人口に応じて常務を執るの委員を選舉し列国間の紛議は総て此の委員会に於て之を処理し若し命を奉ぜざる者あれば列国の兵馬を合して之を懲罰せんと欲する（第十三回）

という国際平和委員会の創設である。

こうした発想も、龍溪が最初ではなく、カントの『永遠の平和のために』にすでに提案されている。

平和条約によってなるほどの時の戦争は終結するかも知れないが、戦争状態（いつも戦争の新しい口実を探し出せる状態）はそれで終わるのではない。（略）そういうわけで、平和連合とでも名づけられるような、特別な種類の連合がなければならぬことになるのである。この連合は次の点で平和条約と区別されるであろう。つまり、後者はただ一つの戦争を終わらせようとするが、前者はあらゆる戦争を終わらせようとする、ということである。（略）この連合は次第にすべての国家に及び、永遠の平和へとみちびくであろう。

土岐邦夫訳「永遠の平和のために」『世界の大思想 11 カント（下）』河出書房新社 一九六五

従来の説では、「日本におけるカント平和論受容史の劈頭を飾るのは、中江兆民『三酔人経綸問答』（1887（明治20）年）である」とされてきた（伊藤貴雄「カント平和論と近代徴兵制」『創価大学人文論集』二〇〇四年三月）。だが、この『経国美談』後篇（一八八四（明治一七）年）にはすでに「永久の平和」なる語と平和連合らしきアイディアが使われており、龍溪はなんらかの形でカントの平和論を知っていた可能性がある。あるいは

カントではなく、自由党系の先駆的反戦論者である植木枝盛うえきえもりの『無上政法論』（二八八〇）にある、「万国協議政府を設け宇内無上憲法を立つ可き」という論を経由したものとも考えられるが④、現時点ではそれを実証できる資料はなく、本論の目的からも逸脱するため、この問題にはこれ以上は立ち入らない。

ここでの根本的な問題は、カントや植木の提唱する国際平和機関に、龍溪が作中で疑問を投げかけているという点である。

アンタルキダス（安太隆または安氏）の「永久の平和」論に、主人公の一人であるイパミノンドス（威波能または威氏）⑤は、「希臘全土の大平和は希臘人民の望みなり」と認めつつも異議を唱える。武人である威氏にとって「永久の平和」なるものももし可能であるとすれば、それは

一 列国の勢力が全く均一な状態

二 ただ一国の覇権国家による安定状態

のいずれかでしかない。そして、斯・阿・斉の三大国が覇を争う現状にあつてはいずれも不可能であるというのが彼の結論である。

安氏は暫時黙然として深思するが如くなりしが暫くして威氏に向ひ

貴国の人心は斯波多、阿善二国をして覇権を分かつたしむるを肯ぜらるべきや

と問ひければ威氏は

事苟も弊邦の存亡に関せざる限りは弊邦の人民豈細故の為に危険を冒して此の大平和を破るを欲せんや唯其事にして苟も弊邦の存亡に関するあらば仮令ひ希臘全土を敵とするも亦た敢て一步を枉げざらんと欲す（第十四回）

安氏が危惧した、大平和よりも自国の存続を優先するというこの発言の通り、威氏は「斯波多の同盟二十四邦の人民を代表して」⑥と宣言した斯波多に対抗して、自らも「斉武及び慕知十二邦の人民を代表」すると宣言し、斯波多王の怒りを買う。威氏はあくまで斉武の国益を譲らないまま、平和会議の席を蹴るのである。そして、斉武は斯波多同盟軍と命運を賭けた隆具（レウクトラ）の戦いに突入する。

ここでの要点は、列国の非難も制裁も恐れない軍事大国（それは斯波多のみならず斉武にもあてはまる）が平和会議の名のもとに他国の権利を侵犯した場合、それを止める手段は軍事力以外にないという点である。

龍溪は安氏の平和主義を夢想ではなく、現実的な政治の営為として好意的に描いている。にもかかわらずその作中で平和会議を破綻させざるを得なかったのは、カント的な平和連合だけでは永久の平和は実現できない、結局は軍事力の均衡もしくは覇権に依存せざるをえないという、小説家であると同時に新聞人であり政治家⑦でもあった龍溪の悲観的な認識によるものと考えられる。『経国美談』は、「理想を追う者が最後に勝利する」物語などではないのである。

龍溪はその後『浮城物語』『新社会』『不必要』の諸作品で己の平和主義を深めていくが、その詳細は後述する。少なくとも、以上の『経国美談』についての分析によって、「平

和主義小説」なるジャンルの起源は描き出せたものと信じる。

## 二 平和優先主義と絶対平和主義の差異

松元雅和「正戦論の時代における平和主義の可能性」『創文』（二〇一〇年三月）は、戦争と平和についての思想の区分として、Martin Ceadelの五類型を紹介している。

### 1 軍事主義(Militarism)

戦争は人間の発展に必要でありプラスの善である。侵略戦争も含め、あらゆる戦争は正当化される。

### 2 十字軍(Crusading)

侵略戦争は、場合によっては秩序や正義を促進し、長期的に戦争を防止・廃止するための一助となる。

### 3 防衛主義(Defencism)

侵略戦争は常に不正であり、自衛戦争は常に正しい。

### 4 平和優先主義(Pacifism)

戦争は改革によって防止・廃止されうる。全ての侵略戦争は禁止され、一部の自衛戦争も禁止されるが、侵略を排除するための軍事的防衛の必要性は受け入れる。

### 5 絶対平和主義(Pacifism)

戦争に参加したり、戦争を支持したりすることは常に許されない。

太平洋戦争後の日本の言説空間にあつては、この「4」と「5」が「平和主義」の名のもとにひとくくりにされ、その差異が真剣に論じられることはほとんどなかった。自衛隊は日本国憲法に違反する存在なのか。もし憲法違反であるとして自衛隊を廃絶するならば、いかなる手段によって国民の安全を保障するのか。そうした問題に対して戦後の知識人はあまりに怠慢であつた。

本論の研究対象である明治の平和主義小説にあつても、「4」の平和優先主義と、「5」の絶対平和主義の区別は常に明確というわけではなかった。

たとえば前述した『経国美談』の平和会議にしても、「若し（平和会議の）命を奉ぜざる者あれば列国の兵馬を合して之を懲罰せんと欲する」という一項があり、「平和を維持するための武力行使」は正義とみなされていた。作中のスバルタはこの条項によって、同国主導の会議に背いた斉武に攻め込む名分を得たのである。一見穏当で現実的に見える平和優先主義（パシフィズム）が、十字軍にまで退行しかねない危険を内包するという一例である。

現に『経国美談』から十年後の日清戦争（一八九四（明治二七）～九五（明治二八））では、「東洋の平和」のためという名目が開戦の詔勅に盛り込まれているが、その論理の危険性を正面から突いた知識人はいなかった。わずかに青年期の木下尚江が、「正義の戦争」を鼓吹する基督教徒を「痛罵」したという回想が、『懺悔』（一九〇六（明治三九）年）に語

られるのみである。平和のための戦争という詭弁は、日露戦争や太平洋戦争の開戦詔勅でも繰り返される。

実作者たちは必ずしも自覚的ではなかったにせよ、本論での分析は、平和優先主義（パシフィズム）。平和のための暴力装置を認める主義」と、絶対平和主義（パシフィズム）。平和のための暴力装置を認めない主義）の差異を極力明確にする方針をとる。どちらが正しいかは別として、ふたつの「平和主義」の間には断絶が存在するのである。なお、論者自身は「5」の絶対平和主義者（パシフィスト）であり、文学の研究および実作を暴力の代替案として考えていることを明言しておく。

### 三 矢野龍溪における平和主義小説の発展とその到達点

『経国美談』では平和優先主義に留まった龍溪のその後について簡潔に述べておく。次に引用するのは一八九〇（明治二三）年の海洋冒險小説『報知異聞 浮城物語』（以下、『浮城物語』と表記する）についての、龍溪の創作理論である。

事実を其儘に記載すれば小説に非ず歴史なり、風教を主として娯楽を興へざれば小説に非ず道德書なり、世にあり得可き事柄を湊合して世に有ることなき物語を組立て、世人に娯楽を興ふるものは是れ小説の本色のみ。

矢野龍溪 「浮城物語立案の始末」『郵便報知新聞』一八九〇（明治二三）年六月二十八日

基本的には史実に依拠していた『経国美談』から一歩進み、「世に有ることなき物語」こそ小説の本色だという虚構論がここで表明される。

だが、『報知異聞 浮城物語』（一八九〇）にあつては、小国の独立のための戦争は称賛すべき英雄的行為として描かれている。植物学者の松本のように、「戦争の一度二度の勝敗は人類の歴史上に大関係あるものにあらず」（第五十五回 旅団長）という個人レベルでの平和主義者はいるものの、『経国美談』後篇のような「永久の大平和」の理想が語られることはない。

龍溪の作品に再び世界平和論が現れるのは、社会主義ユートピア小説『新社会』である。

平和を愛する多数人衆の意見は其国の和戦の決に大影響あること勿論なれば、彼等の大連約は期せずして平和の連約となるべきなり

今ま世界将来の大平和を生ずべき望みあるもの二あり、（原文改行なし）

其一は、万国平和協会（略）単に戦争は人間の惨事なりとの理屈のみにて之を説くも、実際は適切に平和を得べきの手掛りありとも見えず、（原文改行なし）

又た其の二は列国勢力平均の権衡（略）何れの国家人民にも誇心なきものなし、故に時としては其の発情の趣く所、曲直を争ふに当ては、直に戦端を開かずとも言ひ難し、是れ亦た世界大平和の保障とは依頼し難し（略）

労力の限度、万国連約の一事のみ実際に於て適実堅固なる世界大平和の連鎖と称すべ

し

『新社会』 第十一回 新社会の未来、世界平和の保障」(一九〇二(明治三五)年)

かつて『経国美談』作中の威氏が提示した二項のうち覇権国家論が捨てられ、代わって安氏の理想に近い「万国平和協会」が第一に挙げられている。が、それはもはや肯定的には扱われていない。

そして注目すべきなのは、従来の二項に代わる第三の新案として、万国の「多数人衆」「劳力者」の「大連約」による「世界大平和の連鎖」が提案されていることである。

諸国家の軍事力の均衡や制裁に頼る平和主義では、制裁も均衡も不可能な大国の暴走を止めることが、原理的に不可能であった。『経国美談』の平和主義が常に諸国家を主体としており、それゆえに大国間の「誇心」の対立によって平和会議が瓦解せざるを得なかった経緯を考えれば、「劳力者」を主体とするこの平和論は画期的な飛躍といえる。

だが、この「新社会」は軍事力による自衛を完全に否定してはいない。「我国(引用者注 新社会)教育費の莫大なるは一国の歳出中にて第一に位し、陸海軍費の二倍に上れり」(第八回 新社会に於ける法律、教育)と、旧来の国家よりは低率であっても多額の陸海軍費を必要とする国家として描かれているのである。シーデルの分類によれば平和優先主義(パシフィズム)ではあっても絶対平和主義(パシフィズム)ではない。

ゆえに、龍溪の平和主義が最高水準に達した『新社会』でさえも、絶対平和主義者の批判をまぬがれることはできなかった。少年期に『経国美談』を愛読し、長じては龍溪よりも徹底した非戦論者となった木下尚江は、松野翠名義の「龍溪氏の『新社会』」(『毎日新聞』一九〇二(明治三五)年七月九〜一〇日)という書評で、龍溪の描く新社会が「帝国」であることと、完全に軍備を撤廃をしていない点で不満を表明している。

龍溪の最後の小説『不必要』(二九〇七(明治四〇)年)は、「僕の言ふ平和とは根本中心の平和である」と見て貰はねばならぬ、国内に向つては社会組織の改善だ、国際間に於ては世界大平和の主張だ、此れが僕の願望で、此れが僕の楽みだ」と高らかに宣言する理想主義者を描いた作品ではあるが、平和のための手段をどうするかという点では『新社会』よりも後退し、むしろ『経国美談』の段階に逆行している。

僕は直に一国の兵備を弛める論者では無い、(略)人道正義を重ずる邦国に、充分の武力が有て、野心を有する国を強圧するの實力が備てこそ、始て世界の平和は得られる、(略)要は唯其の中心に人類の平和を巴持するに在るのだ、其の手段に至ては、兵備に頼らねばならぬ事も有る、そこが所謂『戦を以て戦を止めば、戦ふと雖も可なり』だ、『不必要』 (三十四)「平和」

生涯にわたって平和主義を追究した龍溪であったが、その理想は「平和優先主義(Pacifism)」にすぎず、「絶対平和主義(Pacifism)」に至る事はなかった。

だが、龍溪が創始した、世にあり得べき事柄からなる、世にある事なき物語という方法による、平和主義小説というジャンル自体は、ライバルであった福地桜痴、部下であった村井弦斎・遅塚麗水、愛読者であった木下尚江に受け継がれていくのである。



#### 四 ニュース フィクション 新聞はなぜ小説を必要としたのか

本論の分析の対象は、文壇文学者ではなく桜痴ら新聞記者によって書かれた、一八九〇～一九〇八年（明治二三～四一年）の、従来の文学史が扱ってこなかった小説群である。これらの平和主義小説が職業的小説家ではなく、新聞人であった龍溪・桜痴・弦斎・麗水・尚江らによって書かれたことの意義は何か。

それは蓮實重彦の評するような、「政治的なジャーナリストの煽動」の一言で片付けてよいものだろうか。彼が古代ギリシア史についてまったく無知であり、それゆえに『経国美談』の虚構性を読みとれなかったことを配慮しても、断じて「煽動」という言は承服しがたい。

もう一つ、『経国美談』への典型的な批判を引く。小川武敏『経国美談』の構造―想実論の前段階として―『文芸研究』（明治大学文学部紀要 一九七九）は、「国際間の紛争を調停する平和組織の必要は、竜溪年来の宿望だった（略）歴史の制約や時代的条件の許す範囲で人物を造型し、人間が事実どう在ったかということとともに、いかに在り得たかというみでの歴史的可能性を、少なくとも前編における主人公たちの〈挙動〉を通じて描いたことは、歴史文学として評価してよい」と『経国美談』前編を評価しつつも、挙動のみならず事件をも創作した後篇を非文学的と酷評している。

だが、後編において、作者の政治理想を歴史的真實をかりて表白するために、存在しない事件そのものを造型したとき『経国美談』のもつ性格は変貌する。

（略）列国大平和会議のような事件そのものの改變にともない、前編でみられた人物造型の熱意は著しく減衰することになる。もし文学究極の目標が人間を描くという一点に収斂するものとすれば、後編において『経国美談』はすでに文学ではありえまい。

（略）思うに文学にとって、こういった倫理や思想は、文学を戯作の地位から救い出し厳肅なものにするものであったとともに、その深みと広がり妨げるものでもあったらしい。

小川武敏 『経国美談』の構造―想実論の前段階として―

「深みと広がり」のある、「人間を描く」文学とは、おそらく写実主義や自然主義リアリズムのことを指しているであろう。こうした批判は何も目新しいものではなく、同時代にも不知庵主人（内田魯庵）による龍溪批判（いわゆる浮城物語論争）に同種の論を見ることができ。

余は考ふ、小説は人間の運命を示すものなり、（略）最も進歩したる小説は現代の人情を写すものにして、此以外に小説なしと云ふも可なり。（略）現代の所謂英雄譚或は寓意小説等はフィクション（仮作物語）の範囲内に属すべしと雖も決してノーベルと云ふを得ざるなり。（略）余は断じて曰ふ、「浮城物語」は文学上半銭を値するものにあらずと。

（略）余は実に鷗外氏の言の如く此一作を以て筆を絶たれん事を龍溪居士に求む。

不知庵主人『浮城物語』を読む『国民新聞』一八九〇（明治二三）年五月八日、十六日、二十三日

鷗外や不知庵主人の言の如く、矢野龍溪が『浮城物語』で筆を絶っていたならば、『新社会』の画期的な平和論もなく、本論が扱う平和主義小説の大半は書かれなかったであろう。

「最も進歩したる小説は現代の人情を写すもの」という不知庵主人の写実主義的小説観に対して、「浮城物語立案の始末」（一八九〇）の時点での龍溪は相手を納得させる反論を示すことができなかった。私見によれば、次に引用する「不必要」中の、「時善」（現代という時代に規定された善）と「純善」（時代を超越した普遍的な善）の区別の論こそ、不知庵主人らへの反論たり得ていると考える。

まだ世の中がブザマで強食弱肉、互に列国が隙を窺ふと云ふ時代に在ちア、侵入して来る敵人を、巧みに多く殺すのは善事であるのだ、致方がない（略）

千百年の後ち、列国の間に戦ひが無くなると云ふ時代から見たら、どうだネ、昔は人を殺すのが賞美されたさうだ、不思議な事だと評される時代も来るであらう、

『不必要』（三十二）「時善」

自分がたまたま生まれたにすぎない時代を「最も進歩したる」「現代」と呼んで絶対視する価値観からは、時代を変える文学は生まれない。自分が生まれた時代よりも倫理的な時代（たとえば「戦ひが無くなると云ふ時代」）を可能世界（あり得べき事柄）として想定し、

そこから「現代」を相対化し改善の道を探る営みこそ、龍溪にとつての一連の世に有ることなき物語であつた。

龍溪の『新社会』にあきたらず、日露戦争期に非戦小説を書いた木下尚江も、これに似た認識を語っている。「現代」を報道する新聞というメディアに限界を感じ、「現代」という時代の流れを変えるために小説を書くという自己認識である。

小説といふものを書かざるべからざるやうな時機が到来した。それは日露戦争が動機を持つて来た。といふのは、その頃私は毎日新聞に編輯長をして居た。処で戦争が開始まると、私は非戦論者、社長は主戦論者といふ極端な主張の相違が同紙面に表はれるといふやうな破目になつた。（略）

書かねばならぬ要求からして――一面は自家の主張を発表する為め、一面は遊んで許りも居られぬ為め――書いたのです。

木下尚江「自己生存の要求」『文章世界』一九〇八年一月一五日

新聞記者という社会的地位ゆえに、彼らは一般人や専業小説家よりも最新の戦争や暴力に関するニュースを入手でき、その情報および読者からの反響を連載中の小説に一日単位で即座に反映させることができた。村井弦斎の『小説家』、木下尚江の『火の柱』『良人の自白』などは、新聞連載小説のそうした特長を平和主義小説に生かした好例であり、その

詳細は本論の第二部・第三部で後述する。特に『火の柱』は、先の引用のごとく日露戦争開戦の直前に戦争を阻止するために書かれた、いわば新聞を変えるための小説であつたことだけはここで述べておきたい。

だが、新聞連載による平和主義小説というジャンルのこうした特異性がこれまで論じられることはなかった。一般的な文学史では、龍溪・桜痴は政治小説、麗水・弦斎は通俗小説、尚江は社会主義小説に分類され、いずれも「純文学」としての価値は低いかのように扱われてきた（前掲小川論はその典型である）。

こうした批判は果たして正当であるか。近代日本文学を代表するといわれる夏目漱石や森鷗外が同時代に書いた「従軍行」や「うた日記」が本論の扱う平和主義小説群に比してより高い文学であるか。少なくとも漱石や鷗外のほうが倫理的であるとは決して言えないであろう。

どうしても腕力でなくつちや駄目だ。成程世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰りは腕力だ。

夏目漱石 『坊っちゃん』 一九〇六（明治三九）年 引用は新潮文庫（平成元年）による

正義漢と自認する主人公にこうした言を吐かせる小説を、近代日本文学は正典としてきたのである。漱石には「血を流さない革命」について語った『二百十日』（一九〇六）のような作品もあるが、その平和についての思考の成果は、本論が扱う平和主義小説家たちに比してはるかに貧弱である。

平和主義小説を読み直すということは、あまりにも倫理を軽視してきた近代日本文学の欠陥を問ひ直す試みでもある。

## 五 本論の概要

以上をもつて、近代日本における平和主義小説の起源と、その文学研究としての意義についての論述を終える。最後に論文全体の概要を述べて、この序論をしめくりたい。

本論の第一部「国家のための暴力は許されるか」（第一章〜第三章）では、大日本帝国憲法発布の翌年であり、第一回帝国議会が開催された一八九〇（明治二三）年に書かれた三作品を扱う。

「民権から国権へ」の時代とされる一八九〇年にも、国家の名による暴力（選挙干渉・利益線論・国家による電話網の管理）に抵抗する新聞小説家たちは存在した。一般には政府寄りの新聞人として知られる『東京日日新聞』の福地桜痴と、立憲改進黨系の矢野龍溪率いる『郵便報知新聞』の村井弦斎・遅塚麗水である。

第一章「福地桜痴『仙居の夢』論―表象された代表議会制」が扱うのは、第一回衆議院選挙における暴力と腐敗を、仙人世界の争いに仮託して描いた政治小説である。反戦という主題はこの時点ではまだ明確でないが、時の総理大臣山県有朋をモデルとする「閻雲伯」の政治権力に対して、演劇という非暴力的なパフォーマンスを対抗手段として提示している点に、同作品の平和主義小説としての意義がある。

第二章「村井弦斎『匿名投書』論―自衛のための戦争は許されるか」が扱うのは、日本の対外政策が専守防衛論から山県有朋の利益線論（日本本土防衛のための朝鮮侵略論）に移行しつつあった情勢を背景に、露清連合軍による日本への侵略戦争を描いた架空戦記小説である。新兵器による日本の勝利という筋ではあるが、その兵器によって静岡県が壊滅するという結末と、敵味方の別なく人命を救おうとして挫折する従軍看護婦の人物造型は、この小説が決して戦争を美化してはいないことを示している。そこには、「自衛戦争とは国土や国民を守るための戦争ではなく、政府を守るための戦争にすぎない」という弦斎の戦争観が見られる。

第三章「遅塚麗水『電話機』論―テクノロジーへの警告」（二〇〇六年六月『日本文学』掲載）が扱うのは、国家による電話サービスが開始される直前の時期に、電話という新しいメディアが引き起こす数々の社会問題を予見した近未来小説である。

顔を見られずに言葉を伝えられる機械の普及は、社会に数々の騒動と犯罪とテロを誘発し、ついに暴徒と化した民衆が中央電話局を襲撃するに至る。国家による電話の管理が盗聴や密告を伴い、反政府分子への過剰な弾圧がさらなる反動をもたらす様も、この小説は描いている。だが、それらの騒動は退屈した交換手の空想に過ぎなかったことが結末で明かされ、彼女が自身を笑い飛ばす場面で小説は終わる。平和を保証するものは科学技術ではなく、技術に携わる者の個人的な倫理であるというのが一篇の主題である。

第二部「言葉による暴力は許されるか」（第四章〈第六章〉）は、戦争をはじめとする暴力に対抗する手段としての「言葉」を問題化した、日清戦争前後期の三作品を扱う。

第四章「村井弦斎『小説家』論―小説の面白さとは何か」が扱うのは、「面白さ」を追求し続ける小説家と、「面白いといふ事」を知らずに育った女性読者とのすれ違いを描いたメタフィクションである。「腕力」や「金力」を武器とする二人の恋敵に対して、小説家は小説の面白さが読者に及ぼす力によって、紆余曲折の末に女性読者と結ばれる。小説は悲惨な現実を描くだけではなく、悲惨な現実を変えるモデルを提示すべきだという弦斎の小説観がここに表明される。

第五章「村井弦斎『釣道楽』論―進化論の受容と不安」が扱うのは、日露戦争開戦の理論的基盤の一つとなった、社会進化論に正面から挑んだ釣小説である。「人間は感情ではなく、道理に従うこと」によって他の動物と区別される」というのが全編を貫く主題であり、実家（生物学的両親）からの愛情と、養家（社会的両親）への義理の間で葛藤する主人公が、最後に養家に戻るという決断によってその主題は実現される。「道理」なるものの内実は明確にされておらず、それゆえに人間至上主義に陥る危うさはあるものの、当事流行した加藤弘之や丘浅次郎の戦争を賛美する社会ダーウィニズムに対する異議として評価できる。

第六章「福地桜痴『女浪人』論―『主』を持たない者の革命」が扱うのは、幕末の新選組に婚約者を殺された女性の、非暴力的手段による革命を描いた反実仮想歴史小説である。幕府にも朝廷にも薩長にも属さない彼女は、愛する者を失った痛みを説くことによって暗殺や内戦を阻止し、平和のうちに日本の近代化をなしとげようとする。大政奉還の理想を裏切り、戊辰戦争を引き起こした明治天皇睦仁による討幕の密勅を、「この上ない不義」と責める場面は、天皇の戦争責任を問うた最初の文学作品として評価しうる。だが、ヒロインが暴力的他者を説得する論拠を「国家の御為に置いている点にこの作品の弱さがあり、福地桜痴が日露戦争期に非戦論者たり得なかった原因をうかがわせる。

第三部「平和のための暴力は許されるか」は、日露戦争期の最も先鋭的な平和主義小説家であった、木下尚江の三作品を扱う。これまで扱った作家たちが平和優先主義（平和のための暴力を認める主義）にとどまったのに比して、尚江はついに絶対平和主義（平和のための暴力をも認めない主義）に至った。それは東洋の平和のためと称する日露戦争への徹底的な批判を可能にするとともに、戦後に直接行動主義に転じた幸徳秋水らと決別する原因ともなった。

第七章「木下尚江『火の柱』論―実効性ある反戦小説のために」（二〇〇四年『名古屋近代文学』掲載）が扱うのは、主戦論者を「内包された読者」とする反戦小説である。日露戦争開戦直前の時期、幸徳秋水や堺利彦が主戦論に転じた『万朝報』を退社する中、尚江は主戦論の『毎日新聞』に留まり、その読者に向けて戦争阻止を訴える小説を書いた。戦争は連載なかばに起きはしたが、主戦論者を罵倒するのではなく、主戦論者さえも感動させようとする尚江の姿勢は、反戦小説のあるべき姿の一つとして評価できる。

第八章「木下尚江『良人の自白』論―非戦論における『公』と『私』が扱うのは、「公」の論理にも、「私」の情念にも偏しない、普遍性ある非戦論を提唱した反戦小説である。開戦直前にあわただしく書かれた『火の柱』と比べて、戦中から戦後にかけて書かれたこの作品では『公』を装う『私』の群れが主戦論に走る構造と、その対抗策としての主戦論者の「私」を問い直すという方法が、より分析的に書かれている。与謝野晶子とも内村鑑三とも幸徳秋水とも違う、木下尚江の絶対平和主義理論の完成形がここに見られる。

第九章「木下尚江『墓場』論―非暴力的抵抗の挫折」が扱うのは、日露戦争講和の日に起きた日比谷焼打ち事件の目撃談と、暴力革命に傾斜していく幸徳秋水との別れを描いた一人称小説である。

仮に民衆が暴力を、政府が平和を望む時、民主平和主義者はどちらを支持すべきか。

暴力を望む者たちを止めなければならない、というのが尚江の結論であり、新聞小説『墓場』はその呼びかけとして書かれた。だが直接行動派が耳を傾けることはなく、互に暴力を武器とする政府と社会主義者は大逆事件という最悪の結末を迎える。尚江は秋水を追悼する演説「基督抹殺論を読む」を最後に言論活動を停止し、明治の平和主義小説の系譜はここに終わりを告げる。『墓場』は絶対平和主義者であることの困難を示す作品である。

結論では、これらの分析を通して、「小説は新聞を変えられたか」という問いに答える。

同時代社会への影響もさることながら、倫理・思想としての明治の平和主義小説の到達点を明らかにし、二一世紀における平和主義、というよりも平和そのものの糧とすることが、この博士論文の目的である。

#### 付記 矢野龍溪『経国美談』関連略年表

紀元前三九四 セーベ 希臘国齊武で一群の童子（巴比陀（巴氏）・威波能（威氏）・瑪留（瑪氏））らが史談に感激する（『経国美談』前編第一回）

紀元前三八二 レオンチアデス 八月一二日 令温知ら奸党（親斯波多派）の政変。巴氏・瑪氏の阿

善への亡命(第三回)。威氏逮捕(第四回)。

紀元前三七九 巴氏、令温知を討ち、民政回復を宣言(第十八回〜二十回 前編完)。

斯波多、斉武から兵を退く『経国美談』後篇第一回)。

紀元前三七一 一月二〇日 大平和会議。斉武(威氏)、斯波多と交渉決裂(第十四回)。

三月二一日 隆具の大戦。<sup>レウクトラ</sup> 斉武、斯波多に大勝(第十五回)。

紀元前三六六 斉武、希臘全土の覇権を握る(第二十五回 後篇完)。

(以上は『経国美談』作中の記述に、以下は『全集』の年譜による)

一八五〇(嘉永三) 矢野文雄(龍溪)、佐伯藩(大分県佐伯市)に生まれる。

一八八三(明治一六) 『経国美談』前編出版。

一八八四(明治一七) 『経国美談』後篇出版。

一八九〇(明治二三) 『報知異聞 浮城物語』出版。

一九〇二(明治三五) 『新社会』出版。

一九〇七(明治四〇) 『不必要』出版。

一九三一(昭和六) 矢野龍溪死去。

注

① 管見の限りでは、これは日本語文献における「平和主義」の最初の用例である。

なお、矢野龍溪の著作の引用は原則として 筑摩書房『明治文学全集 15 矢野龍溪集』(一九七〇) 以下『全集』と表記する) によったが、『経国美談』後篇のみは筑摩『全集』に未収録であり、岩波文庫(一九六九)も絶版と入手困難のため、国会図書館所蔵の初版本(一八八四)によった(春陽堂『明治大正文学全集第一巻』(一九三〇)も参照したが有意な異同は発見できず)。なお、『経国美談』における地の文のカタカナはひらがなに改め、適宜濁点を補い、原文の傍点とルビは適宜省略した。傍線はすべて引用者による。

② 『経国美談』後篇凡例にも、後篇執筆時には新たにセノホン(クセノポン)、プリュターチ(プルタルコス)二氏の遺書に便宜を得た旨が記されている。

③ 『経国美談』前編の引用書目には八種の希臘史が挙げられているが、論者が国会図書館で所蔵を確認できたのは具朗杜(Grote)、須密(Smith)のみであった。両者とも、紀元前三七一年のコリント人アンタルキダスの主権による平和会議のことは書かれていない。

④ 植木枝盛については、「横山又吉(黄木山樵)翁談話要旨」(家永三郎『植木枝盛選集』岩波文庫一九七四(昭和四九)年)に「(西南役のころ)植木は『郵便報知新聞』のもの、矢野、藤田、箕浦等と交際しておった」とあり、植木が龍溪に影響を与えた可能性は充分に考えられる。

⑤ 史書によれば歴史上のエパミノンダスは平和主義に対してさらに辛辣であった。ネポス『英雄伝』(国文社 一九九五)によれば、エパミノンダスは「戦争よりも平和を優先する」メネクリデスに「民意を戦争から逸らすとは、言葉による欺きであり、実際には平和の名のもとに、隷属状態をもたらそうとしている。平和は戦争によって得られるのである、平和を長期間享受したいと望む者は、戦時に備えて訓練を積む必要がある」と反論

している（山下太郎・上村健二訳）。シーデルの五分法では「1」に近い「2」に分類されるであろう。なお、『経国美談』の引用書目一覧にネポスはなく、この挿話を参照した形跡はない。

⑥ この宣言は平和会議で締結された条約第二条「希臘列国は其の大小強弱に論なく総て独立国の権利を有すべし」に違反している。が、それを指摘した者は威氏のみであった。

⑦ この序論では政治家としての龍溪の発言に一々引用する余裕はなかったが、おおむね軍事力の均衡ないしは抑圧による世界平和という、『経国美談』中の平和主義を超えるものではない。

## 第一部 国家のための暴力は許されるか

### 第一章 福地桜痴『仙居の夢』論―表象された代表議会制

#### 一 浮遊する視座による反政治小説

空中より此の下界を見下したるに馬車に鞭うちて馳るものあり綱曳の人力車で飛び廻るものあり此処にては演説会を開きて諸君よ／＼と声をからすものあり彼処にては懇親会を開き酒肴を振舞て何分宜しくと頼むものあり蓬頭短袖の豪傑が数十群をなして諸所に威張るものあり鯉節の切手菓子きりぎりすの折を持廻りて音信を家々に通ずるものあり（略）案内の男に向ひコハそも如何なる地にて何事ぞやと尋ぬるに。是ぞ即当仙居区にて仙居の所なりとは答へたり。

福地桜痴『滑稽妄説 仙居の夢』（以下、『仙居の夢』と略す） 「発端」 『東京日日新聞』 一八九〇年七月一日掲載

日本初の衆議院総選挙①の投票日（一八九〇（明治二三）年七月一日）と時を同じくして、福地桜痴②は東京日日新聞③紙上に小説『仙居の夢』の連載を開始した。仙人世界を統治する耆員を選抜する「仙居」という設定のもと、飛行能力を持つ謎の案内人と、彼にこの世界に誘われた「余」の空中からの視点を通して、現実の衆議院総選挙をアレゴリカルに描いた作品である。

抑も仙居と云へば桃花流水に映じ鶴が舞ふたり亀が遊たりして頗る物静なる境なるべきに此の雑踏は俗界にも劣つたる浅間しき体たらく仙郷には有るまじき事ならずやと詰つたるに。案内の男はから／＼と打笑ひ（略）世の中が開け行くに従て仙郷も昔とは事変り西洋風が流行り出し耆院を開き其の耆院に出る人を仙居の最中なれば丁度翁が住はるゝ選挙区で帝国議会に出る議員を選挙すると同一一般なりとは知り玉へと語つたり。

『仙居の夢』 「発端」 『東京日日新聞』 一八九〇年七月一日



この仙居区を三分する勢力、すなわち敗心塔（立憲改進黨）の金権腐敗、至勇塔（自由

党）の暴力体質、極粹本尊（国粹保存）の時代錯誤をコミカルに描くこの作品は、いわば小説の形を借りた選挙干渉のようにも思われる。確かに、桜痴にはかつて民党（自由・改進黨）に対抗すべく、自ら政府党たる立憲帝政党④を組織した過去がある。また政府側の新聞人として、改進黨系の毎日新聞・郵便報知新聞などを相手に、主権論争⑤・民主主義論争⑥を闘った経歴もある。

だが、桜痴の意図が実際の選挙運動への干渉、具体的には民党への妨害工作にあったと仮定した場合、二つの疑問が生じる。まず第一に、有権者の投票行動に影響を与えるのが目的であれば、もう少し早く連載を開始していたはずではないかという点である。七月一日掲載分の「発端」は単なる舞台設定と登場人物の紹介にとどまっており、仮に新聞小説に投票行動を左右する力があるとしても、これだけを読んだ読者が改進黨や自由党への投票を中止するとは考えられない。両党への批判的な描写が展開されるのは、投票日が終わった七月二日以降なのである。

衆議院議員選挙の競争は彌よ昨日を以て其局を結びぬ、説得、勧誘の上品なる手段親戚の因、債主の権を以て迫り若くは賄賂、脅迫等の卑劣手段等をも行はしめたる一大競争は彌に昨日を以て其局を結び今は早や其結果如何を待つ時機に移りぬ（略）決して遺恨を将来に抱き益す不和を重ねる事勿れ（略）其弊害を予想せば選挙者は宜しく吾曹が忠告に従ふて可なり

福地桜痴（無署名） 「七月一日までの争意は一日以後に忘却すべし」 『東京日日新聞』 一八九〇年七月二日

第二の反証は、日報社が東京の大手新聞各紙⑦の七月一日号に載せた広告文である。

七月一日より毎号連載

○滑稽妄説 仙居の夢

日報社の困睡翁が昼寝の間に一大奇夢を感じ覚めての後に記憶したる俚を書綴りたる滑稽妄説なり正夢の如くにもあり逆夢の如くにもあり取留なき痴夢なるや読者諸君掲載の上にて判じ玉へ

東京京橋区尾張町一丁目 東京日日新聞 日報社  
『郵便報知新聞』 一八九〇年七月一日 広告欄掲載

改進黨や保守党を支持する新聞の読者に、桜痴は改進黨や保守党を批判する小説を提示し、それが正夢か逆夢かは「読者諸君掲載の上にて判じ玉へ」と呼びかけている。ここに見られるのはプロパガンダではなく、むしろ選挙を終えた人々への内省の求めである。

一八八八（明治二一）年日報社（東京日日新聞）社長の座を退いたこの時期の桜痴は、政治よりデビュー作「もしや草紙」をはじめとする文学と演劇改良に関心を移していた。

福地氏の日報社長の任を解かれてより（氏自ら大院君と呼へり）忽ち世人に向つて暫時の間（或は曰く廿三年迄とか）政治世界（Political world）より詞賦世界（Poetical World）に移住する旨披露せられてより、間も無く「もしや草紙」なる者、日々新聞の第一頁に日日顕れ来れり、是迄官令公文等の如き者を以て埋め、沙漠同様なる該新聞の第一頁も、忽ち之がために花を咲せたり

時事「もしや草紙」『国民之友』三〇号 一八八八（明治二一）年九月二一日

明治一〇年代は知らず、二〇年代の桜痴は、党派の争いを離れ、ポエティカルワールドの側からポリティカルワールドを相対化する視座を獲得しようとしていた<sup>⑧</sup>。『仙居の夢』と並行して東京日日新聞に掲載された、桜痴筆と思われる<sup>⑨</sup>一連の論説は、この総選挙を党派を超えたマクロな視点で捉えている。

凡そ党派の勝敗盛衰は時の数にして或は改進黨勝を制して政權を掌握することもあるべし、又たは大同派に帰し或は保守党に帰することもあらん、苟くも其党派にして國家を破潰するの主義目的を抱かざる限り、（略）吾曹は如何なる党派に政權を託するも決して意とせざるなり、（略）如何なる党派にても其議員たるもの能く当世の事務を弁へ字内の大勢を解するもの多からんには急激の変革を以て政弊を改良すべからざるを知るべく破潰以て社会を改良すべからざるを悟るべく又た退守の策も今日の時勢に適すべからざることを悟らん

福地桜痴（無署名）「天下の安危此時に定る」『東京日日新聞』一八九〇年七月四日

漸進主義を標榜する桜痴の敵は改進黨<sup>⑩</sup>でも大同派<sup>⑪</sup>でも保守党<sup>⑫</sup>でもなく、急進主義・テロリズム・反動主義などの「國家を破潰するの主義」であつた。『仙居の夢』に描かれる三つの塔は、實在の政党への誹謗中傷と読むよりも、むしろ選挙というシステムに内在する原理的欠陥の表象として読まれるべきであろう。

元来今回の選挙たる其の内面に立入て觀察する時には或は脅迫手段を用ひしものもあるべく或は選挙に勢力ある者輩に金錢物品を贈りしものもあるべく甚だしきは投票を現金に買取りたるもあるべく吾曹が日々の紙上に登載せる仙居の夢と題せる小説は其実滑稽妄説に非ずして選挙の真相を写し出せるものたらざるにも非ざるが如くなり

福地桜痴（無署名）「選挙後の注意」『東京日日新聞』一八九〇年七月一六日

ゆえに本論は、『仙居の夢』を政界暴露小説や、實在の「議員への冷罵」（柳田泉「福地桜痴の政治小説」『政治小説研究 下巻』春秋社 一九二九）などではなく、自由民権運動家たちが神聖視してきた議會制民主主義そのものへの根本的な批判の書として読

みなおすことを目的とする。

## 二 仮想空間上の仙居―抗争する悪徳たち

まず敗心塔の候補者頼田山四郎とんだやましろうが登場する。塔の黒幕で次期総理とも噂される阿濃園伯あのその⑬によつてこの仙居区に送り込まれた頼田は、地盤ではなく資金力を頼む戦術をとる。その仙居参謀をつとめる南高蛇内なんだかあぶないは、外国米の輸入促進、民間資本への融資、紙幣増刷による景気対策⑭を見返りに、実業家の大株一六おおかぶいちじゅうくに出資を依頼する。

大「其通り／＼其時にや余も外国米の買入方で今度こそしつかり占しめることが出来やうが夫も阿濃園伯それどのが大臣にならなくては行はれないネ」

南「サア夫だから阿濃園伯の勢力を附るが肝心要め、夫には敗心塔の耆員を一人でも多く出すが専一、だから頼田氏を仙居させて何でも耆員にせねば成りませんぜ(略)おほねっさめないのぞみなしのすけ、いまではおそかんべい大根津鯨内、望梨之助、今出羽遅勘平これ等は運動費も十分に無し人望も少ないから左ほど恐るゝに足らずとした所で、エゝ尊公あなた、恐ろしいのは雲往御鷹くもゆきみたかに甘居仁太あまいじんたの両敵で御座りますぜ、彼等は此区内に多少の人望がある上に金のある連中が尻押に附て居るゆゑ(略)今一奮発いまひとなすつて頼田の為にイヤ敗心塔の為に運動費まじの増拝借を

御承知下さらんでは明日の軍も差支さくします次第」

『仙居の夢』 「第一回 頼田の運動費」 一八九〇年七月二日

こうして「実に頼母たのもしき参謀」南高は大株から六百円の追加融資を取りつけ、うち百円ばかりを己の懐におさめる算段をする。現実の改進黨がどうであつたにせよ、作中の敗心塔の頼田候補が表象しているのは、仙居に付随する「金権」である。

次に南高が強敵とみなした甘居仁太が登場する。「金がもの言ふ仙人世界」(「第三回 誕辰の饗応」)の最高権力者である闇雲伯やみくもを叔父に、大株の商売仇塩辛長者しほからを後援者にもつ彼は、誕生日と称して「当区にて多少その名を知られたる紳士紳商」をその豪邸に招いて饗宴を開く。

お茶が出る。お菓子が出る。お世辞が済でソロ／＼浮世話が初まる。(略)心に一物

を抱きたる軍師の表部大学は（略）兎角に話を当区の仙居の事に引入れたれば一座も未だ酔は廻らず自ら候補の月旦評に移つたり。表部の目くばせに夫と悟つて塩辛は甘居に向ひ、どふですな御主人公、いつそ君が自ら候補者にお成で仙居にお逢なすつちや如何ですと一座に聞ゆる様に態と大声にて云へば。（略）一座の面々は……左様とも／＼甘居様に限ります……勿論御同意仕ります……第一番に甘居仁太様……是非ともお思ひ立ち成さいまして……きつとお請合申ますと御馳走の利目は酒と共に善く即座の同意。甘居は占たりと小鼻を蠢かし（略）表部は廊下にて甘居に向ひ、御主人安心シ玉へ果シテ僕ガ策ノ如クニ行ハレタリ

『仙居の夢』 「第三回 誕辰の饗応」 一八九〇年七月四日

甘居自身は無党派無主義で、政治に理想も情熱も持たない素封家の道楽息子であり、仙居に出たのも周囲に煽られたからに過ぎないのだが、作中で最も敏腕な仙居参謀と、闇雲伯に連なる上流社交界へのコネクションという武器を持つ。今日でいうところの二世議員の如きものであり、「門閥」を表象する候補者である。

次に至勇塔の望梨之助が登場する。南高が評した通りに、仙居民からの人望も運動費も乏しく、塔本部から支給された二十七円五十銭だけで戦わざるを得ない彼は、頼田や甘居のような金権腐敗とは無縁である。

望も怒の色を顕はし、然り／＼甘居の無主義党は原来熱に趨り勢に赴く俗物共ゆゑ金銀を以て投票を買集るも敢て驚くに足らぬが憎むべきはかの頼田が所業じやて表面では政治主義だの施政の意見だのを尤もらしく吹立て新聞に演説に述べて置きながら今日に於て専ら我党の事を譏謗し、ヤレ至勇派は粗暴の振舞を為すものなり台党派は腕力に由て脅迫する者なりなど、密に悪口を吐散し（略）運動費の計略は殆絶たる今日に於て逆も尋常の手段では目的に達しられまいに由て断然たる非常手段を用ひ様

かと思ふ  
『仙居の夢』 「第四回 望候補の本営」 一八九〇年七月五日

そして彼は配下の壮士二十七八人を募り、敗心塔の演説会への襲撃を命じる<sup>⑤</sup>。至勇塔の望候補が表象しているのは、金権や門閥とならぶ仙居の弊害、「暴力」である。

最後に敗心塔が恐れるもう一人の強敵、極粋本尊の雲往御鷹が登場する。甘居家ほどの権勢はないが奈良時代から続く旧家の婿にあたる雲往は、増長寺の高慢上人、古伊神社の

玉垣明石、漢学者の向志鯉四郎といった、文明開化に反対する宗教家や復古主義者たちから支持を受けている。

畏くも我国には千早振神代より神ながらの道と云ふがある中つ世に仏法儒道の伝はつて三ツ足の鼎の如くには成つれど末の流れは一つにて神代の様を変ぬが即ち神の御国とて有難き事ではないか、夫を何ぞやいかに西洋の風が流行ればとて下ぎまの青人草あをひとくさが神の祭ことに口を容るゝとは怪しからぬ事である

『仙居の夢』 「第五回 極粹本尊」 一八九〇年七月六日

代表議會制を根本的に否定する彼らは、「尊皇奉仏」「神州の元氣」「愛国精神」を鼓吹すべく、それぞれの信徒・氏子・弟子を動員する。雲往自身は「よからう」を繰り返す傀儡的存在に過ぎないにせよ、彼は「宗教」を表象する存在であるといえる。

設定上は他に十四名の泡沫候補がいるものの、その一人大根津鯨内は心労のため円エン

古田左に倒れ、今出羽遅勘平は頼田に二百円で買収されて立候補を棄権する（第十回 候

補辞退）などして脱落し、候補者は金権の頼田山四郎（敗心）、門閥の甘居仁太（無所属）

暴力の望梨之助（至勇）、宗教の雲往御鷹（極粹）の四名に絞られていく。

望は「腕力は仙居の大患なり」等を演題とする頼田の演説会に壮士を送り込むが、数に勝る敗心塔側の護衛の雇壮士に撃退され、妨害に失敗する（第七回 政談の騒動）。一方、演説すべき政策をもたない甘居は、「敗心至勇の両党を争はせて漁夫の利を占る」という表部の計略を容れ、仙居戦からの脱落を装って周囲を油断させつつ、遊郭の女将を利用した水面下の工作に専念する（第九回 秘密の計略）。読経や祝詞の力だけでおぼつかないと思つた雲往は、一瓢につき上米一俵を出す策をとり、この仙居区における「一瓢の価値」の暴騰に拍車をかける（第十一回 大競争）。資金が続かなくなった頼田派は望派に対抗すべく雇壮士による戸別訪問に転じ、甘居派の参謀表部は雲往らの仙居辞退はがきを捏造して仙居民に配達し、「主人公明日からJAmari.M.P.ですぜ」と囁く（第十二回 仙居の前夜）。

以上見てきたように、この作品にはクリーンな候補者は存在しない。民党の二人以上に、国粋主義者の雲往や政府側に属する甘居もまた、手の汚れた政治家として描いているのである。

かつて民党に対抗すべく立憲帝政党を組織し、御用記者と攻撃された桜痴だが、彼の理想は（少なくとも主観的には）政府への迎合ではなかった。実現困難な民党の急進主義よりも、政権担当能力を持つ側（薩長藩閥）の現実主義と民党の理想主義とが均衡しつつ競合する漸進主義に、桜痴は近代化への可能性を見出していたのである。

吾曹は敢て内閣の専横を望むものに非ず又た内閣の微弱なることをも望まず、須らく鞏固ならんことを希望するなり然れども其鞏固ならんこととは勲閥に頼らず武力に依らず、将た警察権に頼らず専ら議院の信用に頼りて飽までも鞏固ならんことを希望するなり

たとえば本作中でも、敗心塔が主張していた外国米輸入政策が米価の暴落を招き、かえって貧農を苦しめる事態が描かれている（「第二十二回 内患切迫」）ように、桜痴は常に民権派の理想主義を危惧し、バランスのとれた現実主義を主張していた。最新の桜痴研究である山口功二「讒謗律と情報政策の議論―福地桜痴をめぐる―」も、暗殺を美化しがちな民権派や国粹派に対して、桜痴があくまで言論で対抗する立場をとったことを評価している。

福地桜痴のセキュリティ論は、（略）どのようなテロルであれ、それを敢然と否定する態度が必要なのだと論じる。憂国といい、義挙といい、こうした称揚の世論が「隠微」の間に包蔵され、それが時に顕在化するのである。

こうした福地のいう「腕力社会」の論理が、昭和の時代に入っても現出したことは、論を待たない。（略）桜痴は、御用記者と呼ばれたが、彼の漸進的民選議会論は、急進論の直接行動論よりもより現実的な側面をもったということができるだろう。

山口功二 「讒謗律と情報政策の議論―福地桜痴をめぐる―」  
『同志社メディア・コミュニケーション研究』第四号 二〇〇七・三

江戸幕府の滅亡と新政府樹立という、無政府状態と専制状態の両極を体験した桜痴にとって、その二つの状態は均しく忌むべきものであった。政治とは最善ではなく次善を追求する営みであり、無理に最善を求めれば最悪に至る、というのが桜痴の政治感覚である。政治人としての桜痴自身は暴力に厳しく、金権に甘い偏向があったにせよ、少なくとも新聞小説家としての桜痴は、金権・門閥・暴力・宗教という四つの勢力の表象を、多元的描写によって平等に描き、誰に感情移入するかは読者に委ねている。いわば小説の形を借りた仮想選挙であり、それを描くことによって桜痴は、代表議会制とは自由民権派が夢見たような甘いものではなく、諸々の悪の中から最小の悪を選ぶような営みに過ぎないことを語ろうとしたのではないだろうか。そして、その認識は必ずしも代表議会制を全否定するものではないように思われるのである。

### 三 劇場化する政治―仙居を浄化する者

桜痴の意図が単なる選挙干渉とするならば、民党側の大勝が確定した七月上旬の時点で、この作品を書き続ける理由はなくなっていたはずである。にも関わらず、現実の選挙終了後も作中の仙居は続き、明治二三年の現実にはありえなかった展開を描いている。

この後半（仙居終了後）に入って、西藤武蔵之助と<sup>さいとうむさしのすけ</sup>という私設オンブズマン的な人物が登場する。彼は政治の不正を糾す壮士を自認しているが、望梨之助ら至勇塔のような、暴力と脅迫を手段とする壮士ではない。現内閣（闇雲伯）に反対する在野政治家の乾鰯伯と<sup>すゐめ</sup>誼を通じてはいるが、彼から報酬を受けているわけでもない。では、彼は何を表象している

のか。

西「……只今申上げたる通の有様であるに由て僕輩は是を傍観する事は出来ません天下の為には断然これを論じて公議の裁判に訴える決心でござる（略）奇簇院へ仙出の輩は申すに及ばず衆耆院へ登仙の儕輩に至るまで一々に其人物を篤と問合せ正統公平の人は飽まで保護し佞姦邪智の輩へは辞職を勧告し聴ずとあらば我等が意見に従へと切羽詰の談判を遂うずるにて候」

『仙居の夢』 第十七回 勧告状 一八九〇年七月二〇日

乾<sup>するめ</sup>鰯伯に勧告状を朗読するよう求められた西藤が、「何と勧告状の草稿を読めよとや」と芝居がかつた口調で応じると、悪徳政治家への「勧告状」はいつのまにか歌舞伎「勧進帳」のパロディに化けてしまい、大政治家である乾<sup>するめ</sup>鰯伯もいつのまにかそれに乗せられてしまう。物語を模倣したい、伝説の英雄を演じてみたいという幼稚だが人間の根源的な欲求に訴えかけ、現実的であるべき政治家を演劇空間に引きずり込む「パフォーマンス」が、西藤武蔵之助によって表象される概念である。

西「心得申して候（元より勧告状のあらばこそ帯の中より下宿屋の書出し一巻とり出し勧告状と名づけつゝ高らかにこそ読上けれ）夫つら／＼<sup>おもんみ</sup>惟れば門閥利権の鼻の先は利欲の雲に隠れ民権自由の長き論敵すべき人もなし茲に馬鹿ものゝ味方おはします（略）西藤坊武蔵非常の憤懣に涙を流し腰押の仲間を勧めて此の登仙を辞退せん事を紳士に勧告す（略）」

乾「勧告状聴聞の上は疑あるべからず去ながら事の序に問ひ申さん世に有志の姿様々あり中にも壮士はいかめしき姿にて政治論議はいぶかしけれ是には謂あるやいかに」

西「その由来いと易し夫れ壮士の法といつば権利自由の両部を旨とし紳士豪商を踏荒し世に害をなす佞人奸物を退治して現世貧民を肩を持ち或は難業苦行の功を積み天下泰平の冀望を持す故に内には文明開化の徳を修め表には野蠻の相を顕はし惡徒外道を威伏せり」（略）

乾「西洋人は小さき杖を携ふるに壮士が櫂のステッキに五体を固むる謂はいかに」

西「事も愚かやステッキは西洋英吉利の豪傑コロンウエルの持給ひし靈杖（略）」

乾「頭<sup>かしら</sup>に頂くシャツポは如何に」

西「是ぞ愚智の看板にして十二銭の古物を買て之を戴く」（略）

乾「扱<sup>さて</sup>また両つの泥下駄は」

西「上下の両院を跨ぐ心なり」

乾「出<sup>い</sup>で入る息は」

西「アメンの二字」

『仙居の夢』 第十七回 勧告状 一八九〇年七月二〇日

檜のステッキは（暴力ではなく）自由主義のシンボルであり、十二銭のシャップは（紳士豪商ではなく）仙居権を持たない貧民の代表者の証であり、泥下駄は（衆耆院だけではなく）奇簇院<sup>きぞくいん</sup>の威光にも屈しない精神を表し、アメンの二字は（神儒仏のいずれでもなく）キリスト教徒であることを告白している。

富檜の問答のパロディとはいえ、彼はこの問答で暴力にも金権にも門閥にも伝統宗教にも与しない政治的立場を表明しているのである。金権や暴力の信奉者しか登場しない『仙居の夢』世界にあつては異色の人物といえる。

一方、ついに仙居の当日が訪れる。午前中の中間結果では頓田が優勢であつたが、午後になると状況は一変する。「何でも障らぬ神に崇りなしサ店先で壮士にでも大声で議論をされて御覧じろ実に商売の妨げだからね……五円や三円のお札にや代られねエから」（第十四回「唐瓢の開函」と、頓田らに買収された仙居民が棄権を始めたのである。浮動瓢減少の結果、登仙は政策と無関係に最も強固な地盤を有する者の手に落ちる。

三百四十五点 登仙者 甘居 仁太（無所属）

三百〇六点 次点者 頓田山四郎（敗心）

二百二十二点 同 望 梨之助（至勇）

二百十八点 同 雲往 御鷹（極粋）

八十三点 同 大根津鯨内（国拳）

仙居唐瓢ノ内棄権シタルモノ

七十九瓢

合計千百五十三瓢

『仙居の夢』 第十四回 唐瓢の開函 一八九〇年七月一七日

落仙した候補たちは合同慰労会を開いて慰めあううちに、奇妙な友情を生じはじめる。ここで興味深いのは、桜痴はその現象を心理主義的に説明することを拒絶している点である。

この同病相憐むの情は頓田、望、雲往、大根津その外は失敗候補者には開函の結果見たる時から相互に起こつたる感情（……自然に出るの感情……結果が原因と成たる感情と流行の小説家ならば十も二十も……感情……感情と感情の行列とする所なり）



『仙居の夢』 第十九回 同病相憐 一八九〇年七月二三日

近代心理小説のような手法では、政治のダイナミズムは描けないという意志の表明なのであろう。落仙者たちは反甘居連合を結成し西藤をも誘おうとするが、「僕は面折して直論はするが<sup>いやしく</sup>苟も他人の秘密を<sup>あば</sup>許く様な事は否だ、夫は探偵者流の所為で豪傑の為さる所なり」(第二十一回 探鑿の苦心)と、西藤は独自の手段によって甘居仁太の不正をつきとめ、登仙を辞退させようとする。「個人的の自由」を旗印とする西藤の勧告に、甘居の仙居参謀表部大学はこう言い放つ。

表「大多数の仙居者が銘々個人的の自由を以て甘居仁太君を仙居いたし、甘居仁太君も亦自分が個人的の自由を以て其仙居を承諾す、所謂自由に依て撰び自由に依て応ずる者なれば他人より此の自由を妨ぐる事は相成ますまい」

西「成ほどソウ承はればソウの思はるゝが、是れ国家の為でござれば」

表「夫故に僕が前以て承はつて釘を指て個人的の自由を指すかとお尋申したでは御座らぬか、国家の為とあらば人民の大切なる自由貴重なる自由を蹂躪して顧みずと云ふが貴君の自由主義でござるか、サア／＼何とで御座る」

西「サア夫れは」

甘「サア」

西「サア」

双方「サア／＼／＼／＼」(略)

西「自由の論は目的で無い、甘居君、貴君が不正の所為を以て唐瓢<sup>たうへう</sup>を買取た<sup>けし</sup>が怪からぬに由て左様なる佞姦邪智の耆員を神聖なる耆院に列せしむる事は相成り申さぬ、じやに依て辞退あれとお勧め申すが拙者の自由で御座る」

甘「然らば其お勧を聞かぬが拙者の自由で御座る」

表「御尤々々勧むると勧めざるは西藤君の自由、聴くと聴かざるは甘居君の自由、自由者と尊ばれたるルーソー、ミル、リーベル、スペンセルの自由は即ち其通りの意味で御座る」

『仙居の夢』 第二十回 辞仙の勧告 一八九〇年七月二四日

議論で敗れた西藤は決闘を申し込もうとするが、甘居の「護衛兵」たちに阻まれ、追い出される。

甘居仁太はもはや立候補時の「甘い仁」ではなく、金力に加えて理論と暴力の武装をも兼ね備えた政治家に変貌していたのである。

現実の政治闘争で敗れた西藤が選んだのは、甘居を含めた候補者全員が選挙期間中に行つた行為すべてを新聞紙上に暴露するという手段であつた。無論この行為が、本作品そのもののアナロジーであることは言うまでもない。

非現実的な人間にしかできない政治的営為というものも存在する。現実主義者たちが現

実に耐えられずに逃避してきた場所に、あらかじめ網を張って待ち伏せするという手段である。そしてスキヤンダルを逃れるべく箱根の温泉宿に逃避した甘居と表部は西藤武蔵之助が仕掛けた罠にかかり、「護衛兵」を連れてきていない場で復讐に燃える落仙候補たちと対面するはめになる。表部らは西藤に泣きつき、一同は西藤の提案により、曾我兄弟の仇討ちを模した即興劇「箱根曾我仙居睦 対面の場」を演じて反省と和解の証とする。敗心塔の頓田山四郎が曾我十郎（兄）、至勇塔の望梨之助が五郎（弟）、西藤が小林朝比奈（曾我兄弟の協力者）、甘居仁太が工藤祐経（兄弟の父の仇）という役回りである⑩。

原典「吉例寿曾我」では名刀友切丸を手に対面を果たした曾我兄弟に、宿敵祐経は鎌倉殿から命じられた富士の御狩の総奉行の役目を果たし終えるまでは、私事の決闘は許されないと弁明する。それを卑怯となじる兄弟に、祐経は富士裾野の狩場の切手（通行許可証）を渡して後日の決着を約す、という筋になっている。一方本作品では、

（甘）是ぞ正しく友切丸

（頓）再び手に入る上からは

（望）祐経辞職の書面を出せ

（甘）今は叶はぬ時節をまで

（望）時節を待とは比興な祐経

（甘）イヽヤ比興にあらず、霜月一日開院の惣出仕儀式畢らぬ其内は、私の辞職叶はぬ／＼。と云ふに五郎は口惜き思入れ、小林も思入れあつて

（西）コレ時節を待と祐経どのゝ事を分たるアの詞、モウ一番おつ堪えろ

（頓）スリヤ開院の惣出仕、儀式畢らぬ其内は

（望）宝の山に入りながら、手を空しくて帰るのか

（兩人）チエヽ口惜しい

（甘）イヽヤ手を空しくは帰すまい、今日対面の其印し些少ながら我が寸志、と服紗包を投げて遣る、兄弟は取上て

（頓）コリヤ是れ銀行の

（望）二枚の切手

（甘）コリヤ夫で恨を晴せよ二人

（望）云ふにや及ぶ

（西）まづ夫れ迄は

（甘）祐成時致

（頓）工藤左衛門

（望）祐経どの

(甘) 湯殿で逢はう

(皆々) さらば

『仙居の夢』 第二十五回 箱根の狂言 一八九〇年七月三〇日

「狩場の切手」は「銀行」の小切手に、復讐の物語は収賄の物語に置き換えられる。おそらくこの後には湯殿で、互いの背中を流しながら過去のわだかまりを水に流す一場が演じられるのであろう。この展開に限り、ここでは収賄によっておさめられた闘争は、畢竟和解の物語へと転換する。即ち友愛の物語へと可能性が開かれていくのである。この一件によつて彼らの仙居違反が新聞紙上に暴露されることは免れたものの、西藤は甘居から耆員辞職の言質をとることに成功したのである。

#### 四 『仙居の夢』の終わりに

「選挙とは仙人を選ぶ行為ではない」というのが、この作品の主題である。つまり、金権や暴力が支配する政界を厭つて目を背けるのではなく、そうした政治を改善するために代表議会制というゲームのルールに習熟し、使いこなすべきだという主張である。

君が見たまひし仙居の争ひ修羅の巷の如くなるは必ずしも当仙居区のみならず、凡そ此国にては何れの都府いづれの津々浦々とても同じ事にてあるぞ、(略)欧米などの天狗国にても同様にてもや有らん、(略)あの蛙が平気で居る面を見玉へ、解りましたか登仙して英雄豪傑に成うと云ふにはアレ位の胆力が無くては望は達しられぬものだ、と悟道の極意。なる程と思ふ所に、彼の大蛙がヒヨコと飛び出したにビックリして思はず立つた拍子に、惜いかな仙居の夢は忽然として覺にける。

『仙居の夢』 第二十六回 快達道人 (最終回) 一八九〇年七月三一日

『仙居の夢』の候補者たちの名前は、当時の政治思想諸派に対して桜痴がとつた立場の表明である。「頓田山四郎」が金権腐敗への「疑惑」を、「甘居仁太」が門閥への「侮蔑」を、「望梨之助」が暴力への「絶望」を、「雲往御鷹」が宗教界と国粹主義への「不信」をそれぞれ表象しているように、最終回で唐突に「余」の前に泥沼から飛び出して、「余」の仙居の夢を覚ます「蛙」は、「転換」すなわち政治の構造を「変える」ことへの桜痴の希望が託されている地口である。

畢竟国家の平和を保ち第一期の議会をして静穩に経過せしむると否とは内閣が議院に対する感情と議院が内閣に対する感情との如何にあるのみ吾輩は平和を望むが故

に敢て予め一言を為すのみ

福地桜痴（無署名）「敵視せんか<sup>ま</sup>將た友愛視せんか」『東京日日新聞』 一八九

〇年七月二三日

無論、この時評は桜痴の「平和」、標題に倣うならば「友愛」への可能性が託されたものである。この桜痴の思想を鑑みて、本作の検討をまとめるならば、次のようになるう。金権・門閥・暴力・宗教などに支配された「敵対の政治」から、「劇場型友愛政治」への「転換」、それが桜痴の『仙居の夢』に仮託された夢想である。

※東京日日新聞（一八九〇年七月一日～三一日掲載）を底本とし、旧字体は新字体に改め、会話文には改行を補うなど、表記は適宜私に改めた。傍点は原文により、傍線は引用者による。

注

① 直接国税一五円以上の成人男子四五万人（総人口四千万人の一%弱）を対象とする制限選挙であり、二二四の一人区と四三の二人区から三百名の議員が選出された（原田敬一『帝国議会の誕生』文英堂 二〇〇七）。なお、本作品の仙居区は一人区として設定されている。

② 本名、福地源一郎（一八四一～一九〇六）。長崎の医者の子として生まれ、蘭学に飽きたらず江戸で英語を学んで幕府に仕え、維新後は岩倉使節団の通訳として欧米を歴訪、帰国後は東京日日新聞の社長となる。一八八八（明治二一）年以降は退社して文学・演劇改良運動に転身、一九〇四年（明治三七）には政界に復帰して衆議院議員となるも、病のため目立った活動はできず、その二年後に死去。

③ 桜痴は一八七六（明治九）年に同紙社長に就任し、同紙を政府の機関紙とすべく画策するが、山県有朋の建議により一八八三（明治一六）年に官報が発刊されると部数は激減した。『東日七十年史』（一九四二）によれば、「伊東（引用者注、巳代治）家に現存する刷高表によると、（略）廿三年は一月一日において一二、二一〇を発行し、その当時の最高を記録してゐるにも拘らず、その後漸次減紙して同年六月末は八、五八〇、十二月末日は七、八〇〇」とあり、七月に掲載された『仙居の夢』は少なくとも経営改善にはあまり役立たなかったことが窺える。

④ 立憲帝政党は一八八二（明治一五）年に桜痴・丸山作楽・水野寅次郎らが結成した政府側政党。政府側の超然主義への方針転換により、その翌年に解党。

⑤ 主権論争（一八八二）、すなわち日本国の主権は天皇に存するか、それ以外（国家・議会など）に存するかをめぐる論争。田畑忍「福地桜痴と主権論争」『同志社法学』一九四九年六月）を参照。

⑥ 民主主義論争（一八八六）、民主主義は日本の国情になじむか否かをめぐる論争。当時の桜痴は「毎日新聞朝野新聞の両記者が報知に左袒して俱に議院制を主張（略）するを見て彼三者は輿に是れ同臭一味の議院制党なり民主制党なるを知り彼輩が團結せる改進黨と称する政社及び同感の輩は皆この欲望を懷抱するものと推察したるに由り吾曹は（略）民主主義は日本に於ては輿論の許さざる所たり国情の容れざる所たりを示したり」（「読者に一言す」東京日日新聞 一八八六年五月二二日）と、代表議会制への警戒感を露にしている。なおこの論争についての先行研究は存在せず、仮の命名であることをお断りしておく。

⑦ 管見の限りでは、改進黨系の新聞では郵便報知新聞・朝野新聞・毎日新聞・改進黨新聞、

保守系の新聞では日本・国民新聞、中立系では東京朝日新聞・時事新報・やまと新聞がそれぞれ同一の広告を掲載している。なお、自由党系の新聞（自由新聞・東雲新聞など）についてはこの時期に休刊中のものや現存しないものが多く、確認できなかったことをお断りしておく。

⑧ 一八八九年一〇月二五日の大阪毎日新聞には、桜痴が被差別部落民や吉原遊廓から総選挙出馬を要請されたという注目すべき記事がある（原文未見、毎日コミュニケーションズ『明治ニュース事典』より引用）

⑨ 引用した論説はすべて無署名だが、桜痴独特の一人称「吾曹」が使われていることと、『仙居の夢』の主張と明らかに重なることから、桜痴筆と判断して引用した。

⑩ 一八八一（明治一四）年に結成された、立憲君主制・穩健主義をとる政党。商工業者、地方の資産家、知識人層を支持基盤とした。自由党とは長年の対立関係にあり、この選挙後の立憲自由党再編期にも合併案が出たものの実現しなかった。

⑪ 一八八〇（明治一三）年に結成された急進主義的政党。地方ブルジョア、地主的富農、中農層を支持基盤とする。一八九〇年には自由党、大同倶楽部、愛国公党の三派に分かれていたが、総選挙前の五月に庚寅倶楽部として合同、選挙後の八月には立憲自由党として再統合した。『仙居の夢』ではこれら諸派を一括して「至勇塔」「台堂派」と呼んでいるようである。

⑫ 当時の保守勢力は、井上馨派の官僚による穩健な自治党、在野の過激な国民派・保守中正派などに分裂していた（メイソン『日本の第一回総選挙』 法律文化社 一九七三）。『仙居の夢』の極粋派は後二者のデフォルメと思われる。

⑬ 作中では第一等の政治家についてまず闇雲伯、ついでその反对者として阿濃園伯、干柿伯、乾鰯伯の四人があげられている（第十五回）。それぞれ山県有朋総理大臣、改進黨の創始者大隈重信、自由党の創始者板垣退助、当時は半隠退中であつた伊藤博文に対応するものと思われる。

⑭ この政策は、明らかに当時の現実世界での山県内閣（松方正義大蔵大臣）のデフレ政策へのアンチテーゼである。

⑮ 神奈川県横浜市の改進黨系当選者島田三郎（後に衆議院議長・毎日新聞社長となる）が、三人の壮士に候補辞退を迫られ、さらには決闘を申し込まれた事件（東京日日新聞 七月二日号など）をモデルにしたものと思われる。

⑯ かつて桜痴の部下として東京日日新聞で働き、この総選挙で当選を果たした政治家の末松謙澄は、「二十三年の総選挙」『国家学会雑誌』第四卷第四五号 一八九〇年十一月五日）の中で、「西洋にては大概選挙を争ふ者の中に声望卓越の政治家ありて「マニフエスト」即ち選挙檄文を發し各処に演説をも為し将来の政略を吐露して人心を喚起し独り自己の選挙区のみならず広く全国の人心を収斂せんことを務むるの習なるが本邦にては未だ如此の事なし」（原文のカタカナはひらがなに改めた）と、政策論不在の選挙の現状を歎いている。

⑰ 東京日日新聞はこの年の二月一日に紙面改革を行い、「従来の清朝五号の活字を明朝五号活字、即ち現在の活字様式に改革した」（前記『東日七十年史』のだが、この配役表だけは木版風の江戸文字で書かれている。桜痴の美意識と、彼の東京日日新聞への影響力の健在を窺うことができる）。

## 第二章 村井弦斎「匿名投書」論―自衛のための戦争は許されるか

### 一 「匿名投書」の問題提起―予言ではなく警告として―

露清の連合艦隊は不意に清水港を攻撃して之を奪ひ、直ちに兵を進めて静岡を奪ふ、(略)「九州と四国を手に入れたからには必ず京阪地方へ攻め掛ると思ひの外、全力を尽して不意に駿州を攻撃したは東西の連絡を断つ謀と見えます」

村井弦斎 「匿名投書」 第一六回 『郵便報知新聞』 一八九〇(明治二三)年七月二十七日

村井弦斎の初の新聞連載小説「匿名投書」は、日清・日露戦争を予言した小説として読まれることが多かった。伊藤整『日本文壇史』Ⅶ 硯友社の時代終る(講談社 一九六四)では、高安亀次郎「世界列国の行末」や井口元一郎「日本花」と並べて本作品を「日露戦争予想記」と位置づけている。

一方、村井弦斎研究の第一人者である黒岩比佐子『食道楽の人 村井弦斎』(岩波書店二〇〇四)は、「予言」ではなく、「ロシアが日本を攻撃する可能性を示して警告を発した」と表現している。

「ロシア軍は九州、四国を占領し、静岡県に上陸して東京に迫るが、ある科学者の創案で箱根の山①を爆破させて日本が勝つ」(前掲『日本文壇史』)という本作品の筋は、実際の日清・日露戦争とは大きくかけ離れており②、これを予言といえるかどうかは疑問である。

予言としての成否を問うよりもむしろ、当時民間の論壇のみならず軍部にも存在した専守防衛論に対する警告として読むほうが、より生産的なのではないかと思われる。

本論の見る所では、この小説は露清連合軍との本土決戦という虚構により、自衛のために国土を破壊する科学者と、敵味方を問わず人命を救おうとする従軍看護婦との葛藤を通して、二重の意味での「自衛のための戦争は許されない」という警告を発している。本論は、一八八〇年代日本の専守防衛論、一八九〇年の山県有朋総理の利益線論(自衛のための侵略論)といった時代背景を視野にいれつつ、専守防衛論を超える平和論の可能性を探ることを目的とする。

### 二 時代背景―専守防衛論から利益線論へ―

一八九〇年までの日本の論壇にあつては、福沢諭吉・徳富蘇峰・中江兆民といった知識人たちは、立場の違いはあってもおおむね専守防衛論をとっており、侵略戦争に否定的であった。

福沢諭吉の『通俗国権論』(一八七八)は、「余輩の主義とする所は、戦を主張して戦を好まず、戦を好まずして戦を忘れざるのみ」として、侵略論と平和論の双方を退けた(第七章 外戦止むを得ざる事)。おおむね専守防衛論に近いといえる。

徳富蘇峰の『将来之日本』(一八八六)も、スペンサーの「軍事社会から産業社会へ」という歴史観を日本にあてはめ、「我邦ヲシテ平和主義ヲ採リ以テ商業国タラシメ平民国タ

ラシムル」という理想を描き出した。樂觀的すぎる未来予測に基づく以上、現実には裏切られた時に彼は転向せざるを得なかったのだが、それは日清戦争体験後のことである。

中江兆民の『三酔人経綸問答』（一八八七）には、非武装無抵抗主義を説く洋学紳士と、アジアのある国（＝清国）への侵略を説く豪傑君の二人が登場する。が、二人の論は南海先生によって止揚され、「已むことを得ざるに及びては防禦の戰略を守」という専守防衛論に収斂する。この論は前の二客によって「児童走卒も之を知れるのみ」と笑われている。

兆民自身の持論がどれであつたにせよ、専守防衛論が最も平凡で堅実な論であるという点では三酔人の見解は一致している。しかし兆民も、「難儀なる国是」〔立憲自由新聞〕一八九一年四月八日では、「如何なる事勢に迫らるゝも戦はざる」との国是を定むるに於ては、随分難儀なる国是と謂はざるを得ず」として絶対平和論を否定し、「朝鮮問題」での積極策を主張するに至る。

以上は一八八〇年代の在野の知識人の専守防衛論であつたが、政府側の政策もまた、以下の記事によれば「防衛主義」であつた。

我国の海軍は最早充分なることは既に論せり今此に軍備に関して考究すべきは我国は今後攻略主義を取らん耶防衛主義を取らん耶此問題に就ては何人と雖も今日攻略主義を取て直に威武を欧州に耀かす能はざるを知るべし然らば則ち防衛主義を取り（略）我国の軍備は先づ陸軍を先にすべしと切論したる者は誰ぞ陸軍中将曾我祐準氏、『我国の海軍は世界第二』『郵便報知新聞』一八九〇年一〇月二六日

村中朋之によれば、この防衛主義から攻略主義への転換は、一八九〇年に始まったという。

伝統的な安全保障概念、すなわち「外敵の軍事的脅威を、自らの軍事力を以て除去する」方法には、①自国の領土に侵攻してきた敵を自国の領土内で撃破する、②自国の領土外に存在する敵に対し自国の領土を超えて機先を制して撃破する、という二者が考えられる。黒野耐は前者を「守勢戰略」、後者を「攻勢戰略」と定義している。日本における国防戰略は、明治四〇（一九〇七）年の帝国国防方針「帝国ノ国防ハ攻勢を以テ本領トス」により、陸軍当初の守勢戰略から攻勢戰略へと転換した。しかし、この転換は帝国国防方針の制定を以て一朝一夕になされたのではない。その端緒は、明治二三（一八九〇）年三月に發表された山県有朋『外交政略論』における「我邦利益線ノ焦点ハ実ニ朝鮮ニ在リ」にあつた。

村中朋之「明治期日本における国防戰略の背景―朝鮮を『利益線』とするに至るまで―」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』五号 二〇〇四年

利益線とは、主権線（国境）の安全を守るための、国境の外側に想定される防衛ラインをさす。前掲村中論には「一八九〇年三月に發表された」とあるが、この時は閣僚内に留まつており、国民一般に公表されたのは、同年一二月の第一帝国議会での演説であつた<sup>③</sup>。

何をか主権線と謂う疆土是なり 何をか利益線といふ隣国接触の勢我か主権線の安危と緊しく相関係するの区域是なり（略）我邦利益線の焦点は実に朝鮮に在り

大山梓編 『山県有朋意見書』 原書房 一九九六（原文一八九〇）年

この一八九〇年の山県有朋の利益線演説（国防のための朝鮮進出論）に続き、四年後の日清戦争でそれが実現すると、論壇は一举に戦争肯定論に傾いていくことになる。「匿名投書」が書かれたのはまさにその分岐点である一八九〇年の、利益線公開演説の五ヶ月前であった。

### 三 匿名投書と署名書簡―「匿名投書」の二つの戦争観

「匿名投書」の作者村井弦斎もまた、一八八八年の小説「加利保留尼亞」では、人類間での戦争は一九世紀で終わり、「十九世紀以前の豪傑は他の人類にて戦争をなしたる者ならずや今日以後の豪傑は漸く将に天然力に向て戦争を為さんとす」という、平和的な未来像を描いていた。しかし、二年後の「匿名投書」ではそのヴィジョンを放棄し、自衛のための戦争すら不可能であるとするに至る。専守防衛論は、侵略肯定か戦争否定かのいずれかによって克服されねばならない、というのがその趣旨である。以下、中心人物である結城夫妻（鉄之助と緑）に焦点をあてて、「匿名投書」の梗概を振り返ってみる。

日本人の手になると思しき、露西亜の亜細亜侵略政策を非難する匿名投書が国際社会を騒がせ、日露の関係は緊張する（第一回〜第十六回）。柴部利鉄道の開通とともに、ついに露西亜の日本侵略は現実となる（第十七回）。

静岡県を占領され、東西に分断された日本で、ヒロイン結城緑は従軍看護婦を志願して戦場に赴く。が、沼津で露西亜軍の捕虜となり、そこで敵軍の看護婦をしている姉の紅葉と再会する。

「緑さん、和女も其辺の怪我人を介抱して御遣り、談話は跡で緩り出来るから、マ―少しでも此病人達の苦痛を薄くして遣り度ひものだ」

村井弦斎 「匿名投書」第二十回 『郵便報知新聞』 一八九〇（明治二三）年七月三十一日

この紅葉の言葉に共感した緑は、敵兵が日本軍との前哨戦で負傷したことを知りつつ看護を手伝い、露西亜兵たちからアングル（天女）と慕われるに至る。

しかし、野戦病院には実は、緑の夫で軍事科学者の結城鉄之助が潜んでいた。（第二十二回）。彼は緑らの献身を隠れ蓑として破壊工作を目論んでいたのである。鉄之助は緑らの脱出を促した上で最後には自らの命と引き換えに富士山を爆発させ、静岡県もろとも露清連合軍を全滅させる。鉄之助からの最後の書簡を受け取った緑は、「良人は妾を名譽ある未亡人と為したり、何故妾を死地に伴て、致命者の妻たらしめざるや」と嘆く。数年後、鉄之助の予言の実現（日本軍の亜細大陸への進出）と、緑が「婦人社会の女王」に祭り上



げられていく様を描いて、この小説は終る(第三十回)。

以上のように、この作品は反戦小説ではない。しかし、山県有朋の利益線論に沿っただけの警告小説とするには、割り切れない雑音が残ることも確かである。緑らの行為を「迷惑」だとする鉄之助の真意を知った際の彼女の「アラ、マー」という嘆声も、この作品は書きとめているのである。

#### 四 自衛戦争の害悪

以上のように、これは侵略軍に対する自爆テロを描いた作品ではあるが、それを賛美した作品ではない。鉄之助の自己犠牲は、緑の眼からは必ずしも、「名譽の戦死」とは見られていないのである。では、鉄之助の行動のどこに問題があったのだろうか。

自衛のための戦争とは一般に国家を守るための戦争であり、国土や国民を守るための戦争であるとは限らない。それどころか、沖縄戦にみられたように、国家(首都の政府)を守るために、国土や国民を犠牲にすることも辞さないのが戦争の通例なのである。

「匿名投書」の場合、静岡県民はすべて避難済みという設定ではあるが、東京政府を守るために静岡県という国土と国民の住居・財産を犠牲にしていることに代わりはない。

こうした自衛戦争にともなう悲惨を避けるには、いかなる方策が考えられるか。一つは作品冒頭の匿名投書で提唱され、結末部で実現したごとく、侵略可能性のある外国に逆襲して、自国の安全を守る侵略論である。だが、それは自国だけを守る利己的な戦略にすぎない。

敵国の兵士と交流し、その苦しみを救いたいと願うようになった緑にとっては、侵略論は自衛論と同じく「許されない」ものとなる。「恨めし気」な表情を見せる緑にとっての望ましい決着とは、作品内では明示されていないが、侵略と自衛のいずれの戦争をも否定することであろう。

#### 五 「日清戦争」を繰り返させないために

「自衛のための戦争は許されない」という「匿名投書」の警告からは、二つの相容れない結論が導き出せる。一つは先制して自衛のための侵略を可とする鉄之助の道であり、もう一つは人道的立場から戦争そのものを不可とする緑の道である。

現実の近代日本は前者の道を選び、国防のための侵略戦争(日清戦争)を起こした。朝鮮を利益線とする膨張主義は、「満蒙は日本の生命線」からサイパンを絶対国防圏とするに至り、日本そのものの破滅を招いた。

戦後の日本はその反省に鑑み、後者の理想に転換した、はずであった。しかし現実政治は安保条約や自衛隊を必要とし、戦争放棄と専守防衛の矛盾は十分に議論されないまま、平和憲法そのものを改変しようとする動きが強まりつつある。

長距離ミサイルや無差別テロが主流になった現代の世界では、自衛と侵略の区別は失われ、テロ防止のための先制戦争が認められつつある。日本国憲法九条を論拠とする専守防衛論は、国際社会からの圧力によって危機に瀕している。

単に「戦後」といえば太平洋戦争後をさすように、戦後の言説空間では「戦争」といえば必ず太平洋戦争をさし、日本の大陸侵略の原点となった日清戦争について論じられるこ

とは少なかった。後の戦争に比べて犠牲者が少なく、勝利に終わったからという理由もあるのだろうが、この戦争の勝利が以後の日本の方向を決定づけたという重要性は忘れられてはなるまい。清国への戦勝を「高価すぎる勝利」として描いている点に、「匿名投書」の先駆性がある。

専守防衛論を否定する「匿名投書」は、侵略を肯定しかねないと同時に、戦争そのものを否定する契機をもはらんだ、両義的な作品として読みうる。日清戦争の過ちを繰り返させないためにも、二一世紀の平和主義者にとって「匿名投書」は読むに値すると本論は結論する。

注

① 正確には、「箱根の山」ではなく富士山である。

② 以下に引用するように、ロシア側の戦略に眼を転ずれば、「匿名投書」は必ずしも空想的な小説ではなかった。

日清戦争後、日本はロシアを明確な仮想敵国として、営々と陸海軍軍備を増強していたが、当時ロシアも日本の軍備増強を警戒し、日本に派遣滞在中のヤンシユール陸軍大佐に日本の軍事状況の視察を命じた。(略)ヤンシユールは日本への上陸地点を駿河湾に、攻取地点(攻略目標)を名古屋に選定している。(略)上陸後の攻略目標を、東京ではなく名古屋に選定したのは、名古屋を占領すれば、日本は東西に分断され屈伏すると考えたからである。(略)ヤンシユールの日本攻略案は北海道とか九州を攻略して領土を掠め取ろうというものではなく、日本を東西に分断して屈伏させ日本全土を手に入れようとするものであるだけに、日本にとっては脅威的な案だったはずである。

原剛 『明治期国土防衛史』 錦正社 二〇〇二

③ 当時の郵便報知新聞を見ても、「所謂主権線を守御し利益線を防護すると論せしは何の意味なりや」(国会議員 Y生「論説 利益線とは何ぞや」一八九〇年十二月九日)とあるように、利益線論は国会議員クラスの政治家にさえ知られていなかったと思われる。

### 第三章 遅塚麗水「電話機」論―テクノロジーへの警告

#### 一 電話機の中の魂魄

忽ち次の部屋に電鈴の響、走りよりて聴器を耳にすれば俄かに変るお清の顔、昨日野辺の送りを済せたるに、コハ如何に、コハ如何に、峯、峯雄さまが活き還られしと、あ、あ、あ、三個は唯た茫然たり。

遅塚麗水 ちづかれいすい

「電話機」

第二 『郵便報知新聞』一八九〇年九月

一四日掲載

日本における民間電話交換事業が開始される一八九〇（明治二三）年一二月一六日を目前に見据えて、『郵便報知新聞』は近未来小説「電話機」を連載した①。死んだばかりの婚約者からの電話という怪談めいた物語に始まり、間違い電話、いたずら電話、密告電話、無言電話、脅迫電話、警視庁上層部による組織ぐるみの盗聴、電話の匿名性を利用する詐欺等の、いずれも「電鈴の響」が旧来の人間関係を破壊していくという主題の挿話群がオムニバス形式で語られ、ついに暴徒が中央電話交換局を襲撃するに至るこの小説は、電話という新しいメディアが後世に引き起こす問題を描いた最初の文学作品である。

父も母も亦茫然として呆れ惑へり現在昨日葬られし人の復此世に

出でん事あるべからずもしや峯雄さまの魂魄まだ此世に在してかと

流石は迷信深き母の思ひ、父はやがて伝話器②を耳にして其事の由を問ふに寂然として復た答あらず。

「電話機」 第三 一八九〇年九月一五日

電話回線内を彷徨する死者の魂魄というイメージは、いかにも電話というメディアが出現したばかりの明治前期らしく迷信めいてはいる③。しかし注意すべきことは、作者である遅塚麗水自身はそうした非科学的な恐怖のために、「電話機」を書いたのではないということである。

というのも、麗水こと遅塚金太郎（一八六六―一九四二）が勤務していた郵便報知新聞社<sup>④</sup>は、官営電話事業の最も強力な推進者であった前島密を創始者に、その協力者であった大隈重信<sup>⑤</sup>を後援者に持っているのである<sup>⑥</sup>。一八九〇年末の電話番号簿<sup>⑦</sup>によれば、同社は全二六九番中十一番という若い電話番号を持ち、一般社会よりも早い段階から電話機の導入に積極的だったことが窺える<sup>⑧</sup>。記者でもあった麗水自身、一般大衆よりも早く電話機 of 存在を知り、恐らくは利用する機会もあったはずである。その彼が電話というメディアの普及を阻害しかねない小説を書いたのは、電話機に対する無知ゆえではなく、むしろその問題点を熟知し、危惧していたからであると考えられる。

本論は、「電話機」の各挿話中でも中核をなす、政治結社と警視庁の電話回線上での暗闘の物語を中心に分析することで、科学技術の進歩を明治の文学者はどう受け止めたかを考察していく。

## 二 日本刀から電話機へ

「電話機」を書いた頃の社会情勢を、作者麗水は次のように回想している。

翌る二十三年は、帝国議会が始めて開かる、歳でありました。改進黨、自由党、愛国公党の諸名士は、中原の鹿を追ふて政論界は異常に緊張しました。各地各所の演説会に血の雨の降つたこともありました。我が報知新聞社も一再ならず筆禍を招きました。壮士の襲撃を受けたことも度々ありました。

遅塚麗水「記者生活三十七年の回顧」 『苦楽』一九二六年三月

大日本帝国憲法が実施され、第一回帝国議会が開かれた一八九〇（明治二三）年、かつての自由民権運動家は目標を見失い、その内のある者等は「壮士」すなわち職業的テロリストへと墮落していた。かつての不平等族のような直接的暴力ではなく、想像上の恐怖を利用することで利益を得る新しい形の政治結社を、本作品は日本刀と電話機という小道具で象徴化している。

対話の有様より推せば此の二人の客は世に言ふ志士とやらん漢<sup>おのこ</sup>に

して彼の色黒く顎髯あるは此輩の棟梁なるへきか。(略)此部屋  
必ず此輩が脳中の知恵を絞り出し胸裡の経緯を吐き盡す所なるべし、  
承塵には金の縁打つたる洋画を掲げ尚其傍には衆議院三百議員の肖  
像を懸けたりされど異しや其議員の頭上には朱点黒点幾個となく記  
しつけられしは何にやら少しも解らず、知る人の見ば薄気味悪き事な  
るべし窓に向ふて一間の床の間いかもの造りの日本刀一振横はる、床  
柱の側爰には電話機一個。

「電話機」 第一〇 一八九〇年九月二二日 傍点引用者

衆議院三百議員の肖像画に刻まれた朱点と黒点は、恐らくは彼等に対し  
て二つの道具の内のどちらを用いるべきかを暗示しているのであらう。電  
話機派である洋服姿の壮士は、日本刀派の志士にこう語る。

洋服着たる男、口を開きて、愈々明後日となつたな、昨日は余り  
過激だつたな、思ひ切つた事を仕をつたな、余り激烈だつたな、腕力  
も時によるサ、我輩が正当の武器は只此の舌あるのみサ、腕力は正宗  
の如し楊枝を削り箸を削り鉛筆を削ることは小刀に如かずサ、(略)

アノ位ひの事構ふものか剛愎な奴じやもの、懲らさんと癖になるよ、  
正義に服さん奴は構はんサ。腕を扼し力味返へりて兵児帯しめし若  
者は答ふ。

「電話機」 第一〇 一八九〇年九月二二日 傍点引用者

「腕力も時によるサ、我輩が正当の武器は只此の舌あるのみサ」という  
発言は、必ずしも倫理的な非暴力主義を意味するのではない。ここで語ら  
れているのは、「電話機は日本刀よりも効果的な凶器たり得る」という戦略  
思想である。

主人は田中といふて(略)壮士の頭となりて容赦なく遠慮なく正義

に合はざる奴と見れば。撃て。合点、今しも客の青年と語り合けるは則ち是事なり明後日上野に於ての反対党の大会合、不義の輩を懲らさんと示威運動の相談なるべし。

床柱に懸けし電話機の鈴鳴り響きぬ田中は起ち上がりながら莞爾

と笑みて聴器を耳にして鈕子ちゅうしを押し返へせば田中が顔色怫然として聴器を持てる拳震ひたり（略）余は最早汝と語るも穢れになるワ、言

ひ訳聴く耳はない、青校わかものを遣る、左様思へ、吾が腕には骨かあるワ、

青校は呆然として暫し無言なりしやがて、先生、先生、如何なされた「電話機」 第一 一八九〇年九月二三日

現に聴器を耳に当てながら「言ひ訳聴く耳はない」と言い放つ田中にすれば、電話機とは他者の言葉を聞くための機械ではない。彼の基準に沿った「正義」に合わない輩を懲らすための暴力装置なのである。

洋服姿の男が言ったように、「腕力」や「正宗」の射程距離には限界があり、目の前にいない相手に危害を加えることはできない。しかし電話機は、想像上の暴力への恐怖に訴えることによって、相手に見られることも反撃されることもなく不正を働くことができるのである。いちはやく電話機を導入した郵便報知新聞社の社員である麗水は、それが新聞社にとって便利な道具である以上に、言論の敵であるテロリスト達にとっても便利な道具になりうることに、危惧を抱いていたのではないだろうか。

### 三 恐怖と暴力の連鎖

「電話機」第二十二には「此老爺、今こそ零落したれ、一年前には可成の生活をなし、下婢五六人使ひし男にて、電話機さえ我が家にひきし程の身代なれば」という一節があり、この作品が個人レベルでの電話サービスが普及して少なくとも一年は経過した近未来を舞台にしていることを匂わせている。実際には、一八九〇年末の段階で個人電話を所有しているのは全国で七十三名にすぎず<sup>⑨</sup>、それ以外の人々は、次の場面で語られているように、電話局内に備え付けられた有料公衆電話機を利用していたわけである。

花火屋の主人吉報聞いて嬉し喜び、駄物でよければ何事も景氣よきをとの注文、花火の五六百本（略）硝石少しく足らぬ上に又赤燐も少々不足、只今直に取寄すべし（略） 家より程遠からぬ電話局に小廝<sup>こもの</sup>を走らせける、小廝<sup>こもの</sup>は一散に走り行きて電話局に赴き、通話料を払ひて本町の葉種問屋に、硝石二百斤赤燐五斤、直様鍵屋<sup>かぎや</sup>までと言ひ送りて、返辞も聞かず走り出づる

「電話機」 第一五 一八九〇年九月二七日

本作品では珍しく合法的な電話機の使用例だが、この物語はこれだけでは終らない。この通話は傍受されていたのである。

此一語の耳に入るや恰も機<sup>からくり</sup>をかけし傀儡<sup>かいらい</sup>の如く、（略）色黒き男

は口開かぬ先に右の手を揮<sup>ふ</sup>り動かして、只今何奴がかけし電話か知らざれど硝石二百斤赤燐五斤直によこせと申して来たり、戦争の話し何にやかや、世の中兎角に血醒<sup>ちなまぐさ</sup>き風の吹き回れば、非望陰謀を企てくらむ者ありて、何にか恐ろしきものを造らんと、同志に打ち合したるに、電話局の粗忽にて此方に伝はりしに極まれり、（略）電話よこせしは誰か、誰なるか確かめんとな、確<sup>し</sup>かとは聞へざれど梶谷<sup>かじや</sup>とか言へるを微かに聞きたり、ナニ梶谷とな、熱心に聞き居る彼の男は（略）一冊の名簿を取り出し指先なめて忙しく三四枚繰り返へし繰り返へしてハゝア梶谷剛助こ奴じやな、先頃より注意し居た奴じや、（略）此家は是れ警視の官房なるべし、名簿手に持ちて沈思せる人は、定めて是れ保安の枢機に与かる高等官か、今僚属<sup>れうぞく</sup>の報告を得て、胸中の疑团もつれ返へりて決しがたきに、復び次の室に、電鈴銷<sup>せうせう</sup>々として鳴り響きぬ。

「電話機」 第一六 一八九〇年九月二八日

電話局で盗聴していた署員の、「鍵屋<sup>かぎや</sup>」と「梶谷<sup>かじや</sup>」の聞き間違いという失策がきっかけで、警視庁と政治結社は全面対決に突入し、市内はパニックに陥る。

巡查二十五六名、佩剣の音<sup>しやうしやう</sup>と高く響かせて歩<sup>あし</sup>なみ早く馳け走るなり、市民は何事の起りとぞ顔見合せて呆れまどへる、(略)騒然として窓を開き戸を開くるの声、恐怖と共に次第<sup>ちまた</sup>に街に伝はり行きぬ。

此巡查の一隊は今署長の急命に因りて、爆裂弾製造陰謀発露の事を以て、彼の梶谷剛助の宅に向ふ途中なり。

「電話機」 第二四 一八九〇年一〇月六日

ここで問題になっているのは、テロへの対抗手段を警察に一任してしまうことへの危惧である。電話の悪用は確かに憎むべきだが、通話の一言一句が警察に盗聴されるような情報管理社会はそれ以上に厭わしい。実際にも当時の人々が電話が盗聴されることに不安を抱き、普及のネックとなっていたことは、同時期の『朝野新聞』の記事からも窺える。

電話漏洩の憂あるや否やは世人の頻に氣遣ふ所なるが今当局者に就て聞得たる所に依れば成程電話機を装ふて静かに四辺電話の模様を窺へば囁々として種種雑多の談話を耳にすれども其の模様は恰かも劇場等に於て数限りなき人々の談話するを聴くと同様、明かに一組の談話を聴く能はず(略)故に敢て差支あることなし

尤も此の漏洩を防ぐ手段なきにあらず佛京巴里に於ては現に其の手段を運らせり一体漏洩を防ぐには地中線となすを要し線路を複線となすを要し高価の電線を購求するを要し従て巨額の経費を要す故に(略)我国に於て直ちに之を用ゐんとは中々容易のことにあらずと云へり

『朝野新聞』 一八九〇年九月三〇日

「敢て差支あることなし」という断言とは裏腹に、盗聴を完全に防ぐ手段は提示されていないのである<sup>⑩</sup>。警察による私的領域の侵害への恐怖<sup>⑪</sup>は、本作品ではついに電話というシステムそのものへの暴力となつて発現



する。

先後<sup>せんご</sup>齟齬<sup>そご</sup>、何事か解らず、訝<sup>いぶか</sup>し訝し不思議なりと、皆一斉に中央電話交換局に走<sup>は</sup>せ向ひぬ（略）さきに巡査の剣声に驚かされし街々の市民、スハコソ一大事の起れるよ、大椿事の起れるよと、皆戸を開ひて表に走り出せり、巡査馳せ、憲兵走り、電話交換局の門前は車群<sup>むらが</sup>り人群り、喧嘩雑踏言はん方なし、電話局員は只呆然として周章<sup>あわて</sup>てまどえり。

「電話機」 第二五 一八九〇年一〇月七日

電話機が普及した社会では、もはや十九世紀的な意味での市民は存在できない。そこでは、総ての情報を経営を国家に傍受・管理される恐怖に耐え続けるか、管理を否定して暴力の主体となるか、すなわち警察側かテロリスト側かのどちらかにつく選択しか許されない、というのが、「電話機」が情報化社会の行きつく果てとして描き出した未来像である。

#### 四 科学技術に対して小説は何ができるか

冴へ渡る午夜の月は一切の事を照し出しぬ、冷然として澄み、淡然として円<sup>まど</sup>かなる月は、凄き冷やかなる顔を清らに拭ふて、虚寸の雲だになき中天に懸りつゝ、都門百万の家の中に冷笑、熱罵、詐譎、苦悩、幽憤、歓喜、哭泣、を閉したる個々毎家の光景を、知られざる漠々太古よりの冷光を放つて、宇宙に静かに流れつゝ真白に照らし尽しぬ。

「電話機」 第二四 一八九〇年一〇月六日

先に引用した暴動場面の手前で、これまで電話機をめぐる市民社会の混乱を描いてきた本作品は、突如として神の視点ならぬ宇宙からの視点に転じ、これまでに語られた挿話の顛末を物語っていく。突然の電話のために大金横領の機会を逃した番頭徳吉（第八く九回）は逐電し、貴人になりすましていた詐欺師の青木（第一八く二〇回）は被害者からの電話通報によ

つて逮捕され、政府党の間諜として働いていた今田（第十二〜一四回）は密告電話のため同志に正体を暴かれ、初孫の誕生を喜ぶ春山（第四〜五回）は「昨日葬礼を済ませた」との「忌ましき電話」に興をさまされる。個人レベルでは便利な道具である電話機が、よりマクロな視点から見下ろせば社会全体を不安定にしつつあることを暗示しつつ、最後に語られるのは、作品冒頭の「死んだ婚約者からの電話」の物語である。

お清は吾が情人なる峯雄の復活と聞きて、けうきこもこ驚喜交も到り、おやこ母子打ち揃ふて山本の宅を訪づれ門かどに入るや、（略）机の上なる白木の位牌、

（略）思へば峯雄の魂魄こんぱくまだ此世に彷徨さまよひて居るか、（略）されど其電話は何処より来たりしものか、

「電話機」 第二五 一八九〇年一〇月七日

そして最後の二話に入って、それまでの電話をめぐる怪現象の背後に「発狂した電話局の女技手」の手が働いていたことが明かされる。

さて其翌夕、東京新聞の夕版を見るに、左の雑報あり。

○中央電話交換局の騒動

昨夜十二時市街何んとなく穏かならず幾百人の市民は騒き立ちて中

央電話局へ馳けついたり巡查憲兵必死と鎮撫に力を尽して一時過漸いちじすぎやうやく静まりぬ蓋し電話局の女技手が如何なる間違ひにや電話線の接続を誤り互に齟齬を生じ遂に此大騒動を現出し来たるものなりといふ該女技手は平常非常の神経家にして近来其継母の為に心労する所ありて少しく発狂の気味ありといふ

「電話機」 第二五 一八九〇年一〇月七日

そして結末は再び人間の視点に戻り、問題の女技手のモノローグに転ずる。

ア、面白し面白し、（略）余りさびしく談敵はなしあひてなければつひむらくと

妙な事の胸に浮びて、飛とんでもなき事を考へ出した、ホム、ホム、ホム、しかし伝話の行違ふ筈は万々なき筈なり、技手の妾等わらわが気でも狂ふたら知らぬ事、左様な事はある筈なし、(略)されど故いふらに電話線の彼れと是れと続き合あすれば、互にその話の行違ひて、容易ならぬ椿事をひき起こす(略) 畏こわし畏こわし、妾とした事が妙な事を考へ出した事、ホム、ホム、

「電話機」 第二六 一八九〇年一〇月八日(最終回)

彼女は「接続を誤った」のではなく、「故に電話線の彼れと是れを続き合」せて、この騒動を引き起こしていたのである。他人の秘密を握り、それを意のままに操りたいという誘惑を囁くのは、電話機に限ったことではない。技術がもたらす力の誘惑に打ち勝てるだけの倫理を持たない時、人間は技術の「機かたちをかけし傀儡かいらい」に墮する。

近代の文明が抱える問題は、自然科学の進歩そのものではなく、その進歩に人文科学(文学・倫理等)がまったく追いついていないことにある。「電話機」が告発しようとしたのは電話機そのものというよりも、むしろ自然科学を制御する責任を放棄した人文科学である。

人形の様にチャンと椅子に倚よりて耳に電話の鈕子ちゅうしを鉗はめて閑な時は何事もなければついうかくと妙な事を、ホム、ホム、ホム、アムつまらなき事考えたり、(略) 折しも響く電鈴、乙女は逸早く立ち上りて電話線を手に把りつゝ、低声に囁けり、誤るな誤るな。

嗚呼一部二十六回きよた許多の脚色、只是れ此の愛らしき、やさしき乙女の妄想なりけり。

「電話機」 第二六 一八九〇年一〇月八日(最終回)

最後の数行に至ってパースペクティブはまた一転し、これまで語られてきた物語は実は、退屈した女技手の妄想にすぎなかったことが明かされる。小説作法としては安易な部類に属するかもしれないが、この結末が指摘している主題そのものは決して安直ではない。人間は技術の誘惑に屈することもありうると同時に、それを実行する前に空想し、その空想を「ホヽヽヽヽ、アヽつまらなき事考えたり」と笑い飛ばすこともできる存在であることを提示しているのである。

この潜在的には危険きわまりない人物を「愛らしき、やさしき乙女」と表現するのはアイロニカルに思えるが、そうではない。彼女は社会を大混乱に陥らせる手段を握ったにも関わらず、自らの意志でそれを放棄し、「誤るな誤るな」と、職務に忠実な交換手としての人生を選択したのである。情報化社会の安全は、情報を扱う技術者の個人的良心という極めて脆い一線に委ねられている。彼女はその一線を守ったがゆえに、「愛らしき、やさしき乙女」と呼ばれる資格を持つのである。

人は終日<sup>ひねもす</sup>さもしき五欲七情の為に、営々として蠅の頭の如き小さ

き利欲の為に、蝸牛角上の戦場の小さき名誉の為に、辛子<sup>けし</sup>の実よ

りも小さき眼、南京玉より微かなる眼光を、寸前如漆の世界に走<sup>は</sup>せて、

心神を疲<sup>つか</sup>らし疲<sup>つか</sup>らして、夜の衾<sup>ふすま</sup>の中<sup>うち</sup>にも、辛らき夢の中、嬉しき夢の中、畏わき夢の中、悲しき夢の中、恐ろしき夢の中、面白き夢の中、痛き夢の中、快よき夢の中、味気なき夢の中に、或は帝王となり、或は乞食となり、車夫となり、王侯貴人となり、役人となり、兵卒となり、(略)心の鬼は心の仏に責られ、吾が影、吾が足音におぞげを振つて潜み行く

「電話機」 第二四 一八九〇年一〇月六日

文明の産物は人々の夢を實現すると同時に、悪夢をも實現してしまう力を持つ。「電話機」の結末が暗示しているのは、空想と現実は一重であり、技術者がモラルを放棄した時、「電話機」一部二十六回が描いた空想は現実のものとなる、という警告である。

人間の文化の歴史には、個人生活および社会生活のさまざまな要素を新しい拡張に意識して適応させた例がない。ただ例外は、芸術家たちの些細末梢の努力だけだ。芸術家は、文化および技術からの挑戦のメッセージを、その変形の衝撃が起る数一〇年前に拾い上げる。そうして、間近に迫った変化に立ち向かうためのモデル、すなわちノアの箱舟を建設する。ギュスターヴ・フロベールが「もし人びとがわたくしの『感情教育』を読んでくれていたら、一八七〇年の戦争は起こらなかったろう」と言ったのは、その例だ。

M・マクルーハン 『メディア論 人間の拡張の諸相』 六七頁 栗

原裕・河本仲聖 訳 みすず書房 一九八七 原著一九六四

「もし人々が麗水の『電話機』を読んでくれていたら、一八九〇年に始まる電話社会は到来しなかったろう」とまで言うつもりはない。『郵便報知新聞』という極めて影響力の大きいメディアに掲載されたにも関わらず、「電話機」は具体的な反響を起せなかった。

問題は作者よりも、読者の側にあると思われる。同じ年に『郵便報知新聞』に矢野龍溪が連載した、日本人冒険家の一団が最新の軍艦や兵器を駆使してインド洋上に活躍する『報知異聞 浮城物語』は、蘇峰・鷗外・兆民・犬養毅らの絶賛を浴びた。すでに『経国美談』で一世を風靡した龍溪と新人の麗水では比較にならないとしても、同期の新人である村井弦斎の「電話機」完結の翌月から連載された「小説家」（本論第二章第四章参照）は、連載中に百二十九通におよぶ読者からの投書を集めているのである（同紙一八九一年三月四日号。そのうちの何通かは紙面で掲載されている）。「電話機」とこれらの評価の差は、作品そのものの完成度の差である以上に、新技術が開く輝かしく壮大な未来を礼賛する小説と、新技術の悪用がもたらす暗く卑小な近未来を予見する小説の差であると思われる<sup>⑫</sup>。麗水自身、保険金目当ての犯罪を扱った「保険娘」<sup>⑬</sup>（『文芸倶楽部』一八九六年三月）などを書いた後、未来への警告のための小説という方法論を捨て、以後は紀行文家としてのみ知られる存在<sup>⑭</sup>となっていくのである。

ベルもエジソンもグレイも、前島密も大隈重信も予見できなかった電話普及後の未来社会を、当時無名の新人記者兼小説家にすぎなかった遅塚麗水は予告していた。この事実は科学技術の進歩に対して文学が必ずしも無力ではないこととともに、時代の要請に逆行（あるいは先取り）した文学作品が読者に容れられることの難しさをも示している。そうした忘れられた作品を発掘し、発表時とは違ったコンテクストからの再評価を試みるの

も、文学研究という学問の果たすべき役割の一つであろう。

注

① 『郵便報知新聞』一八九〇（明治二三）年九月一三日号より連載開始、同年一〇月八日連載終了（全二六回）。なお、「電話機」本文および『郵便報知新聞』からの引用は、すべて『復刻版 郵便報知新聞』（全八二巻 柏書房 一九八九～一九九三）により、ルビは適宜省略、旧字体は新字体に改めた。なお管見の限りでは（『近代文学研究叢書 第四十九巻 遅塚麗水』（昭和女子大学 一九七九等を参照した）本作品の単行本等への再録・同時代評・先行研究等は発見できなかった。

② 本作品では「電話」と「伝話」という二つの術語が混在しており、「電話」という表記がまだ定着していなかったことを窺わせる。なお、日本電信電話公社編『関東電信電話百年史 上』（一九六八）には「電話機」の名づけ親は、工部省製機所技手若林銀次郎であった。輸入当初（引用者注 一八七七年、すなわちベルの特許獲得の翌年）、この舶来品は原語のまま「テレホン」またはドイツ語の「テレホーネ」などと呼ばれ、日本語では「伝話機」「伝話電信機」と書かれていたが、同所技手田中精助の相談を受けて「電話機」と命名したのが最初であった」（一四三頁）とある。

③ 前記『関東電信電話百年史 上』および一八九一年二月四日の郵便報知新聞記事によれば、「かくまで敏捷にかつ明瞭に通話を媒介するものなれば、コレラ病をも媒介伝播すべし、恐るべきものなるかな、加入せざるにしくはなし」といった非科学的な迷信が、電話の普及を妨げた記事が見られる。

④ 遅塚麗水「記者生活三十七年の回顧」（初出『苦楽』一九二六年三月 本論での引用は『明治文学全集』<sup>26</sup> 根岸派文学集』 筑摩書房 一九八一

による）に、「明治二十二年、憲法発布の歳の七月、菓研堀の報知新聞を、私の操觚の業に、たづさはる第一歩として（略）新参の私は思軒氏の隣に机を置いて探訪員と通信社から来る市井の雑報に筆を入れる所謂編集助手の役目を勤めてをりました」との回想がある（『郵便報知新聞』が『報知新聞』に正式に改称するのは一八九四年だが、それ以前から『報知新聞』という略称はしばしば用いられ、「東京横浜電話加入者人名表」にも『報知社』の名で登録されている）。

⑤ 大日方純夫「初期議会をめぐる大隈重信と立憲改進黨」は、一八九〇年前後の『郵便報知新聞』を『毎日新聞』と共に「改進黨の機関紙的新聞」と規定している（『大隈重信とその時代』早稲田大学出版部 一九八九）。

⑥ 前期『関東電信電話百年史 上』に、「通信次官に就任した前島は、時の外務大臣大隈重信を積極的に動かして、ついに太政官いらいゆるがなかった電話民営の最高方針をくつがえすことに成功、明治16年から6年間にわたった大論争もここに官営の帰結をみることになった」と、前島・大隈の電話事業への貢献についての記述がある。

⑦ 松田裕之『明治電信電話ものがたり』（日本経済評論社 二〇〇一）一二八頁および前記『関東電信電話百年史 上』一六五～一六七頁掲載の「東

京横浜電話加入者人名表（通信総合博物館所蔵）を参照した。

⑧ 一八九一年一月二日の『郵便報知新聞』には、「今年は電話の年始という新工夫出来たり。チリンチリン、『ハイ誰方』、『某ですが略儀ながら電話を以て御年始を申し上げます』と、電話が生活の一部として定着している趣旨の記事が掲載されている。当時の電話普及率を考えるならば、こうした光景が一般的だったかどうかは疑わしく、むしろ電話普及のための宣伝記事である可能性が高い。

⑨ 前記「東京横浜電話加入者人名表」による。なお、田村紀雄『電話帳の社会史』（NTT出版 二〇〇〇）にも指摘があるが、同表に名をつらねる個人電話所有者は大隈重信、後藤象二郎、前島密（いずれも電話事業を推進した政治家）、矢野文雄（龍溪。当時の郵便報知新聞社社長）といった明治の元勳、大企業家ばかりであって、「下婢五六人使ひし」程度の資産家が電話を所有していたという本作品の設定はいささかりアリティを欠く。

⑩ 後述する交換手の独白にも「それも単線なれば金の催促、金の無心、おかしき話しなど洩れ聞ゆることはあれど、ヒソ／＼と私語を聞く様にて

何番と何番との談話ありや慥かに解らず、已に複線にもなりたれば其話の漏れ聞ゆる筈もなし」（『電話機』第二六）とあり、この作品が東京がパリーナみのセキュリティ（複線化）を完備した近未来の物語であることと同時に、そうした時代であっても電話犯罪を完全に防ぐことは不可能であるという作者の認識も示している。

⑪ 泉鏡花の『夜行巡查』（一八九五）をひきあいに出すまでもなく、当時の市民にとって警察は信頼よりも恐怖の対象であった。「電話機」作中でも、「罪もなきに恨まるゝ因果、だゝをこねる小児にさえ、巡查さんおまわりが来たとの一言、大魔『もゝんがあ』の嚇しより恐ろしく畏きものと思はるゝは何の果報ぞ」（第十七）という署長のぼやきが語られている。

⑫ 「小説家」自体は未来小説ではないが、弦斎は『匿名投書』（本論第一部第二章参照）、『旭日桜』（『報知新聞』一八九五・新式水雷を発明した日本海軍が英国をジブラルタルに破る物語）等、SF的発想と対外膨張主義に基づく作品を多く書き、『報知』の部数増加に貢献していた。

⑬ 岡田豊「遅塚麗水『保険娘』試論―同時代の〈生命保険〉と関連させて」（『駒澤大学文学部研究紀要』二〇〇四年三月）に「政治の腐敗を告発し、社会の暗黒面をえぐり出そうとする」「『保険娘』は、保険業界にとっては最も好ましくないテキストということになるだろう」という指摘があり、この時期の麗水はまだ社会への警告のために小説を書くという姿勢を捨てていなかったことを窺わせる。

⑭ 『東京新誌』（一九二六年十月号）の特集「明治小説作家の処女作」に寄せられた麗水自身の回想によれば、「処女作として新聞紙上を汚せしは、去る二十三年の春なるべきか、読売新聞に『新佐用姫』と申すもの、踏波仙の名にて出し申候」とあり、他に捨てがたき作として「雪月花物語」「南蛮王」「半月城」「名馬小輝」「陣中日記」をあげているが、それらと同時期に書いたはずの「電話機」については沈黙している。

## 第二部 言葉による暴力は許されるか

### 第四章 村井弦斎『小説家』論―小説の「面白さ」とは何か

#### 一 読者を探す小説家―「面白さ」の問題化

読者は、今読んでいる小説の作者が誰かを知っている。しかし、小説家は今書いている小説が誰に読まれるかを知ることができない。この非対称性が、本論が取り扱う作品、村井弦斎『小説家』①の端緒である。

一日筆助は庭を掃除して娘が居間の前へ来たりぬ、中より漏るゝ読書の聲、「ハテナ、今娘の読で居る小説は………」と筆助は身を窓の下に摺り寄せ、箒の柄を肩に掛けて両腕を組み合わせぬ、

読書の聲止で窓の障子内より開け、庭の景色を眺めんと半ば顔を出したる娘「オヤ筆助掃除かえ、(略)和郎昨日裡口で薪を割りながら独言を言て居たネ、小説を書くより薪を割る方が余程六ヶ敷イと言て居たが、和郎小説を書た事があるかえ」、意外なる質問に筆助は驚き「イエ、如何致しまして小説なんぞと、左様の事は存じません、何か御間違で御座いませふ」娘は熱心なる顔色にて膝を進め「イエ、間違へは仕無い、確に左様言た、知らなければ知らんでも宜いが、今此に筆廼舎奈麻利といふ人の書た小説がある此小説は和郎定めて知て居るだろふ」筆助「一向存じません」娘「知らないかえ、」と暫く筆助の姿を注視し「丸で和郎の姿は仔細あツて下男奉公とでも言ひそふな風だネ」

弦斎居士 『小説家』 『郵便報知新聞』 一八九〇(明治二三)年十一月二十九日

上流階級を取材するために正体を隠して大阪一の富家の下男となった筆助こと小説家筆廼舎奈麻利と、その読者であるお君の不意の遭遇が発端である。彼女は「和女のおまへ」のもの、己れのもの……矢ツ張り己れのものだ」という主義を持つ強欲な父親のために、会ったこともない外国人資産家との結婚を強いられ、悩んでいる。

「アゝ、モー慨くまい／＼、何程慨ても詮無いこと、相談相手になる人は無し、丸



で小説にでも有りそふな此身体、イヤ小説と云へば彼の筆助、毎晩何か書<sup>か</sup>いて居ると云ふが、何を書て居るのだろふ、如何も只もので無い彼の人物、殊に依たら妾<sup>わたし</sup>の力になるかも知らん」

『小説家』 一八九〇年十一月二十九日

お君は筆助に苦境を打ち明け、東京への逃避の手助けを依頼する。それを自分への好意と勘違いする筆助に、お君はこう言い放つ。

「貴<sup>あなた</sup>郎は小説でもお書きなさる人物だから、妾<sup>わたし</sup>の心を御存知だろふと思て、今度の事を頼み申したので今更貴郎に考え違ひをされては、誠に困ります、(略)筆助さん、妾は決して良人を持ちません、(略)妾は子供の時から世の中の面白いといふ事は知りません、歳を取れば取るほど世の中といふものは嫌なものだと思ひました、其の嫌な世の中へ世間の人が無闇と子供なぞを生み落すのは何といふ無慈悲な事だと妾は世間の子供を見るたびに可哀相で溜りません、(略)先祖の血統が絶るなら絶えて宜し、妾は良人を持たり、子を生だりする様な、馬鹿氣た事や無慈悲な事は決して致しません」

『小説家』 一八九〇年十二月十五日

お君が筆助こと奈麻利に期待した「力」とは、物理的な援助ではなく、小説家としての人の心を理解する能力であった。筆助は「面白いといふ事」を知らずに育ったお君に深く同情し、下心ぬきで尽力することを約束する。

筆助が真実なる詞にお君は頼もしく感じ「筆助さん、(略)貴郎の御恩は生涯決して忘れませんが」此に至て言葉は途切れたり、筆助は笑を含み「生涯忘れませんが、跡は少し言ひ憎ひでせふ、御心配なさるな、私が貴嬢に向て難題を言ひかける様な事は決してありませんから」

『小説家』 一八九〇年十二月十五日

一般的に、小説家は読者に物質的な援助を与えることはできない。小説家が読者に与えられるのは小説のみであり、その小説を通して読者に「面白いといふ事」とは何かを伝えることである。はたして小説家奈麻利は、読者お君に「面白いといふ事」を伝えられるか。それが『小説家』の主題である。

## 二 『小説家』を書く小説家、村井弦斎―「面白さ」の開拓

小説家小説家を作る、何ぞ尋常一般の小説として見るを得べけんや、本篇の主人公筆の舍奈麻利は、元より仮設の人物たりと雖も、天下豈此の如きの人なしとせんや、著者は此の如きの人を取り、此の如きの人を主人公として本篇を著はす、著者が奈麻利なるか奈麻利が著者なるか、其は本篇を一読して始めて知るを得べし。

『小説家 上』広告文(春陽堂 一八九六年五月二日初版 『小説家 下』巻末広告欄)

書く小説家(弦斎)と書かれる小説家(奈麻利)はいかなる関係にあるか。高木健夫『新聞小説史 明治篇』(一九七四 国書刊行会)には 『小説家』は弦斎の自伝的小説といわれているものだが(二七〇頁)とあるが、この通説には検討の余地があると思われる。

まず、弦斎居士こと村井寛<sup>ゆたか</sup>が生まれたのは一八六三(文久三)年であり、一八九〇(明治二三)年には満二十七歳になる。筆廬舎奈麻利は『小説家』前半の段階(第一回帝国議會の年Ⅱ一八九〇年)に「二十五六歳」とあることから、年齢的にはほぼ一致する。

しかし、弦斎のこれまでの半生(カリフォルニア留学、新聞記者生活等)はこの作品には反映されていないし、小説内での事件(大阪での下男生活、唐沢山への隠遁、離婚歴のある女性との結婚)に相当する事実は弦斎にはない。黒岩比佐子『食道楽』の人 村井弦斎(二〇〇四 岩波書店)にも「これを弦斎の「自伝的小説」とする見方もある。だが、弦斎が奈麻利のような艶福家だったかといえ、証言の多くは否定的だ」(一〇三頁)とあるように、「主人公筆の舎奈麻利は、元より仮設の人物」であって、この作品は私小説ではなくメタフィクションとして読まなければならない。

作者弦斎と作中小説家奈麻利の両者に共通点があるとすれば、小説の素材となる、「面白い」ものへの貪欲さである。たとえば、

奈麻利は呵々<sup>からから</sup>と打笑ひ「実に妙だ、(略)民法商法の正条に对照して此権利を拡張収

縮する杯<sup>など</sup>は益々面白い、此奇言は拙者少し小説中に拝借しよふ、実に面白い」と筆を執て紙に五六行の文字を書き、猛は威猛高になり、「是は怪しからん、苟も金山溜の総理代人たる荒熊猛を以て小説中に書き込む杯は実に言語同断」

『小説家』 一八九〇年十二月二〇日

伝手を求めて彼方此方と原稿を持ち廻しけるが何れの書籍店にても皆草稿を買ひ込みすぎたとの口上、「今歳は暖いから草稿が無闇に芽を出したか知らん」と奈麻利は不審に思ひ「斯様<sup>こよう</sup>いふ時に手習雑誌があると都合が好いが、己<sup>お</sup>れの小説を出しながら何で潰れたろふ」

『小説家』 一八九〇年十二月二四日

という具合に、借金の催促や原稿の不採用さえも「面白い」と感じ、新たな小説の素材にしてしまうのである。己れの小説を出したから雑誌が潰れたなどというネガティブな発想は彼には無縁である。

次に、作者弦斎について述べると、以下のような例がある。次の引用は、『小説家』が連載されているのと同じ一面の三段目②に、掲載された同作品への批判の投書である。

弦斎居士に忠告す 四谷 仙骨道人

居士よ、居士の小説家は文章蕪雜にして趣向陳腐、徒に三馬一九の惡調を再發して（再興と云はず）世の婦女子を瞞着するのみ、誰か之を真の小説と云はん、然るに文学上の趣味を解せざる俗人が居士の出鱈目に籠絡せられて妄りに之を称賛するも笑ふべし、居士俄に慢心する勿れ

子供等の口あいて見る大神楽

『郵便報知新聞』 一八九一年二月二一日

この「忠告」が載った背景には、その十日ほど前から發生した『小説家』への投書ブームがあった。同作品は二月一日から十一日にかけて休載していたのだが、その再開直後から「小説家の再興について 無きものと思ひしものを帰り花 小網町 辺人」（二月十九日）といった、連載復活を祝う投書が掲載され始め、連載終了時には「小説家に関して江湖諸君より名吟玉詠又は評言贊辞等を寄せらるゝこと既に百二十九通に達せり、本紙は悉く之を載するの余白無ければ近日此篇を一冊子に纏めて其中に採録すべし、三月四日 弦斎 啓」という盛況に至つたのである。前述の仙骨道人なる人物の投書にあるのは、そうした風潮を「婦女子」「俗人」「子供等」への作者の迎合と見る、「文学上の趣味を解」するエリートとしての反感があつたと考えられる。この投書に対して、弦斎は翌日連載分の『小説家』中で以下のような対応に出た。

「ウム、彼大神楽小説か」前の書生「大神楽小説とは」後の書生「彼奴の小説は文章が蕪雜で趣向が陳腐で唯だ出鱈目を並べる計りだが如何いふ訳か俗受けがする、ソコで或る人が大神楽小説と名を命けたのだ」前の書生「アハハ、色々な名があるな、大神楽小説だの、顕微鏡小説だのと元来彼の奈麻利なまりといふ男は文学者の癖に西鶴風を知らんのだもの③、旨い小説が書ける訳は無い、三年が間唐沢山に籠つても一向筆が進まんといふのは全く韻文を学ばんから詩を小説に應用する道を知んのだ」

『小説家』 一八九一年二月二三日

批判の投書の言説をそのまま作品内に持ち込むことで、それを一種のユーモアに轉換することに成功している。このように『小説家』の新しさの一つは、読者の意見や同時代の社会象を、日刊新聞での連載という形式の利点を生かして、同時進行で作品中に取り込んでいった点にある④。

もう一つ、新聞というメディアの特性を生かした技法に、ルビの活用がある。借金担保として「小説を書く権利」を質入れてしまった小説家が、契約の抜け道について腕でなく口、すなわち口述筆記で小説を作ろうとする場面がある。

婦人は速記紙を手執りてやゝ暫く頭を捻り「最初の出は何と云ふ言葉でした」

主人「モー忘れたのですか、其所に符号が書いてありません」

婦人「此符号は好い加減に書いたのですから忘れると読めません」

主人「驚きますな、今一度述べますから本字で側へ書てお置きなさい、最初は発句です、ううべより今朝被り度し綿帽子、アラゆんべではありません、ううべです、仮名で書かず字でお

書きなさい、<sup>さくせき</sup>昨夕でも、<sup>さくせう</sup>昨宵でも、<sup>しやせう</sup>職掌ではありません、<sup>さくせう</sup>昨宵、<sup>よい</sup>昨日の宵といふ事、<sup>よい</sup>十二宵と云ふ字、ソレは<sup>うかんむり</sup>宇冠に肖ると云ふ字を書くのです、<sup>に</sup>イエ物を煮るのは無い人の肖ること、アラ似の字ではありません、自分の事を不肖と云ふ肖の字、ソレでは無性だ、<sup>がせう</sup>エイ分らんければ夕の字になさい、<sup>むかし</sup>イエ、昔の昔では無い朝夕の夕、アラ其関は逢坂の関だ」

『小説家』 一八九〇年十二月二二日

落語にでもありそうな状況だが、これを落語として口演して面白さを伝えるのは困難であらう。ルビツきの活字、同音異義語を識別できるリテラシーのある読者層、速記という新しい媒体への関心の高まりという条件がそろった新聞小説というメディアだからこそ可能なのである。

こうしてみると、奈麻利Ⅱ弦斎がめざす「面白さ」の方向性が明らかにようになってきたように思われる。それは「小説」というフィルターを通して現実世界を眺めた時に生じる、かすかな笑いをともなつた解放感である。思い通りにいかない現実の重圧（借金・ボツ・批判の投書など）の数々を、「これが小説であつたなら」と思うことで、「面白さ」に転じること。それが奈麻利Ⅱ弦斎のめざす小説観である。

### 三 『小説家』を読む文豪、森鷗外―「面白さ」をめぐる論争

東京に着いたお君は奈麻利一家の居候となり、自活の道を探すことになる。

主人の居間に入り来るお君嬢「筆助さん、では無い奈麻利さん」と言ひつゝオホ々と打笑み「如何も口癖に成つて不可ません、（略）<sup>あなた</sup>丁度貴郎の小説を読んで居た時庭の方から貴郎がお入来になつて」

主人「左様く、彼の時初めてお対話を仕たのでしたツけ、小説は面白ふ御座いますか」君「否<sup>いへ</sup>」と何気無く答ふ、主人は微笑み「是は仕たり、余り御世辞が無さ過ぎますな」君「幾何御世辞にも面白<sup>おもしろい</sup>とは云へませんもの」主人「益々悪い」

『小説家』 一八九〇年十二月二二日

先に述べたように、本作品にあつては、小説の価値は文学性の有無ではなく、「面白い」かどうかにかかっている。「面白さ」とは何かについて論じる前段階として、まず掲載媒体である郵便報知新聞の一八九〇（明治二三）年前後の経営戦略について見てみたい。

『小説家』掲載の前年に郵便報知新聞社の社長に就任した矢野龍溪は、自ら経営改善策

の一つとして小説『報知異聞 浮城物語』を連載した。その執筆方針は以下の通りである。

世にあり得可き事柄を湊合して世に有ることなき物語を組立て、世人に娯樂を与ふるものは是れ小説の本色のみ故に小説は読者を楽しましむるの多少を以て其の優劣とす、矢野龍溪 「浮城物語立案の始末」 『郵便報知新聞』 一八九〇年六月二六日

「小説は読者を楽しましむるの多少を以て其の優劣とす」という信念に基づき、同紙は近未来小説『電話機』の遅塚麗水、脱獄小説『闇中政治家』の原抱一庵、架空戦記小説『匿名投書』の村井弦斎などの新人を発掘し、部数向上に貢献する反面、その文学性の欠如は一方では内田不知庵・石橋忍月のような批評家から痛烈な批判を受けた。

小説の元素材料は人に在り（略）今報知異聞を閲するに、著者は第一に趣向を求めて戦争、冒険、烟等之に次ぎ、而して人物の感念は措いて問はざるものゝ如し

石橋忍月「報知異聞（矢野龍溪氏著）」『国民之友』 一八九〇年四月三日

「小説」のありかたそのものを問題化した『小説家』の掲載は、こうした批判に対する郵便報知新聞側からの反論として読むことができる。だが、次の森鷗外の『小説家』評を読む限りでは、その意図は十分に伝わらなかったようである。

#### 小説家

弦斎の作にて、筆のや奈麻利といふ小説家を主人公とし、奈麻利の妹春の牡丹<sup>⑤</sup>、奈麻利が上方にて下男奉公せし質屋の娘君の蓮、奈麻利が葬送の費を出しやりし貧家の娘千代の菊の三美人を種々にかませたる物語なり。凡そ芸術家を主人公にしたる小説はおほかた趣味高き小数の読者のためにするものなるが、これは全くその裏をゆきたるものなるべく、さてその裏をゆきたるも、意ありてにはあらずと思はる

帰休庵（森鷗外）「鷗<sup>しやう</sup>翻<sup>はね</sup>搔<sup>かき</sup>」 『めさまし草』巻の六 一八九六年六月三〇日

先に引用した仙骨道人の投書に比べれば婉曲ではあるが、本質的には同じ論点からの批判である。つまり、『小説家』は趣味の高くない多数の読者のために書かれた小説であり、ゆえに非文学的だというのである。こうした評価が鷗外のみならず、当時の文壇一般の弦斎観であったことは、次に引用する「雲中語」などからも窺える。

#### 小弓御所

頭取。これは北条氏綱に滅されたる足利義明と里見義弘との上を、古くいへば演義体、新しくいへば歴史小説風にものしたる（略）弦斎の作なり。

ひいき。この作者の筆に成りしものゝ中にては、小説家最高きよしなれど、わが見たところにては、小弓御所の方まだしも読むに堪へたり。（略）スコット<sup>⑥</sup>にでもありさうなる脚色なり。その主なる欠点は、少しは開明史的事実を調べたる上にて書かれたらばと思はるゝことなり。兎も角もこの作者は小説家の如きものよりは、かやうのものを作るかた適当なりとおもふ。

「雲中語」 『めさまし草』巻の八 一八九六年九月二日<sup>⑥</sup>

相変らずの弦斎物、舞台数の多きと、変化の賑しきと一寸（ひもと）き見るには、何の苦もなく読まるゝことによりて、婦女子の愛読を得るなるべし。

「時文」〔沖の小島〕評）『女学雑誌』四三二号 一八九七年一月一〇日

弦斎といえど「何の苦もなく読める」「婦女子むけ」という文壇側からの評価に対して、弦斎は何の反応も示さなかったわけではない。前述のように「面白さ」を小説の最大の価値とする弦斎は、難解な外国文学を崇拜する文壇人の軽薄さを、『小説家』内で以下のように皮肉っている。

来客の一人優然と髭を捻りつゝ坐中を視廻して聲高く「諸君、今年は実に多望の歳である、英を圧倒し佛を凌駕し、日耳曼を辟易せしめ、魯西亜を遁走せしむるは方さに今年に在り」乙「ヒヤ／＼、実に君の説の通り今年は長足の進歩を為すべき時である、昨年来独逸趣味が大分発達したから今年は是非魯西亜趣味を世人に紹介しよう、魯西亜にも大家がある、トルストイ、ツルゲーネフの如き何れも魯西亜の大家そして我党の人じや」丙は傍より「オイ／＼、ゴルチャコフは政治家で、セルワンテスは西班牙の人だぜ」乙「何でも構はん、人の知らぬ様な名前を大袈裟に吹聴すべしだ、」丁「ヒヤ／＼、然し、独逸、魯西亜は既に古い、僕は埃及趣味を持ち出さふと念ふ」甲「埃及も陳腐／＼、波斯が宜かるふ、」座末なる一人進み出で「諸君の言ふ所皆な奇ならず、僕は目下エスキモアの趣味を研究して居る、エスキモアの趣味は実に神韻縹渺たるものだ」(略)

「我輩は是れより月世界の趣味を研究せん」

『小説家』 一八九一年一月八日

さらに六年後の長篇『日の出島』では、さらに露骨に文壇の事大主義を「文学魔界」と名付けて風刺している。

ところであの鵠外氏だネ、氏は医師として衛生学の泰斗であり、文士として独逸文学の鼓吹者であるが、氏は折々その学識を振廻はされる、小胆なる文学者連に向つて大層八釜しい長談義をされてその跡で御自作の短編小説などを見せ付けられて是は何うじやと仰せられるから文学者は義理としても褒め奉らざるを得ないネ、譬へば殿様の御前で鶴のお吸物を頂戴する如し、鶴の肉は何う云ふ物だか、或は彦左衛門流の菜葉汁だか何だか彼だか面くらつて居て味などは碌に分らんけれども是非とも難有く頂戴仕ると御礼を申さなければならん様になつて居る、

村井弦斎 『日の出島 鶴亀の巻』 一八九七

「面白さ」のない小説などは、「味などは碌に分らん」高級料理と同様に無価値であつて、弦斎は通人ぶった文学者などよりも、より切実に「面白さ」を求める一般読者、ことに「婦女子」（作中のお君のような）読者をターゲットとしていた。では、なぜ「婦女子」読者は男性知識人読者よりも食欲に「面白さ」を求める（少なくとも、弦斎はそう考えた）のか。

#### 四 『小説家』の読者論―「面白さ」の倫理

この世で最も強い勢力とは何か。この時点では親友であり、後にはお君をめぐるライバルとなる横山・村田と、奈麻利は次のような議論を交わす。

「世中には腕力よりも道理よりもまだ一層強い勢力がある」横山「何だ」村田「即ち金力さ」

横山は如何にも金力と云へる語を冷笑せる如き口気にて「金力なんぞ何だ、我が一拳の下に張り飛ばして見せる」村田も冷笑し「左様は不可ん、世中は金力第一、腕力第二、道理の如きは其次に位すべきものだ」主人奈麻利は徐かに口を開き「両先生、其所にまだ一層強い勢力がありませふ、」村田は不審「是れよりも強い勢力とは」奈麻利は渾然と笑ひ「小説眼を以て視ると世中に婦人の勢力ほど強いものはありません」

「小説家」 一八九〇年二月二十九日

「婦人の勢力」とは、具体的には何を意味するのか。横山の策略によって、実家に連れ戻されて資産家の村田と結婚させられてしまったお君が、三年ぶりに奈麻利の小説の噂を聞く場面を引用する。

「奈麻利といふ人は三四年前に折々三文雑誌へ小説を出して居ましたが、或る時何か感ずる事があつて野州の唐沢山へ隠遁し三年が間必死になつて勉強したそふです、其故か以前は極く拙劣い小説家でしたが今度の未了縁まひようえんは生れ代ツたほど善く出来ました」お君は尚ほ委しく聞質さんと「其小説には如何いふ事が書てあります」前の夫人「ソレは斯ういふ筋です、先づ小説は自序体で自分が主人公になつて居ますが、其主人公は（略）古今無類の淑女を見出したそふです（略）淑女の方からも矢張り其家の人になり度ひと云ふ志願で遂に結婚する約定を結びました、然るに其淑女が急に用が出来て国へ歸たところ、マア不実ではありませんか、国で外の人と婚禮して仕舞たのです」お君は此の時他の人と顔を對する事能はずして頭を垂れて聴き居たり

夫人は尚ほも言葉を継ぎ「其時主人公は之を聞て非常に力を落し、一時は病氣にまでなツたのを妹に諫められて漸く氣を取り直し、ソレから人情の頼み難いのを悟て飄然と山に籠て仕舞たといふ仕組ですが、実に善く書てあつて小説だとは思ひながら読むと知らず／＼涙が溢れます」藪坂夫人は読ざるも既に涙を浮べ居れり、他の人に顔を見られじと横を向て此の談話に答を為さず、前の夫人は之を見て感情に脆き人かと念ひける

他の夫人はお君の心を知らず「其淑女といふのは余り不実な人ではありませんか、淑女でも何でも無い、悪女です」と熱心に小説中の人物を攻撃するも婦人の癖なるか、

『小説家』 一八九一年一月二十八日

お君にとって「未了縁」は事実そのものなのだが、いきさつを知らない他の夫人にとっては架空の小説にすぎない。にもかかわらず、彼女たちは「小説だとは思ひながら」小説

中の人物に泣きあるいは怒るのである。これが、「小説眼を以て視ると世中に婦人の勢力ほど強いものではありません」という言葉の意味するものである。

野史小説の要は人を悦はしむるに在り、憂る者は之を楽しましめ、窮する者は之を達せしめ、悶を遣り、鬱を洩らさしむれば、読者乃ち悦ぶ、(略)之を読んで而て大に悦は、其の悶鬱の在る所亦た知るべきのみ

矢野龍溪 『浮城物語』 自序 一八九〇

という龍溪の論理に従えば、婦女子読者が男性知識人読者よりも「面白さ」に敏感なのは、より「面白くない」日常生活を送っているからということになる。小説の面白さとは、現実の面白くなさが生み出す陰のようなものである。そのように考えたがゆえに、弦斎(あるいは奈麻利)は婦女子読者のために、「面白い」小説を書こうとし続けた。

飯田 逍遙は『小説神髓』のなかで、読者像の問題を転換させようとしている。それはとても意識的にするわけですね。婦女童蒙の玩具ではない「美術」としての小説なんだということを再三再四いうわけです。婦女子が啓蒙のレトリカルな象徴だった時代がありますね。(略)

亀井 『浮雲』などになると、新しい小説の読み手として考えれば、内海文三とお勢ということでお勢は明らかにネガティブに表現されている。(略)『浮雲』を当時の女性を読んで、素敵な小説だなどとは思わないと思います。こんなに若い女性を小馬鹿にした言葉がちりばめられているものを読んで、私たちの気持ちを書いてもらったなどと思うはずがない。(略)

飯田 婦女という読者を切り捨てながら別のかたちで文学の価値や小説の価値を持ち上げていこうというこのやり方はその後にも繰り返されて、明治三十年代のあたりで女性を含む「中流」の読者層全体の取り込みがもくろまれ、明治四十年代に入るあたりで女性の読者が切り捨てられていったと私は思っています。

「インタビュー」 亀井秀雄氏に聞く『小説』論―『小説神髓』と近代』をめぐって(聞き手) ロバート・キャンベル・飯田祐子 『文学』二〇〇〇年一(二月号)

少なくとも弦斎は、『小説家』(一八九〇)から『食道楽』(一九〇三)に至る作家生活の中で、一度も女性読者を切り捨てようとはしなかった。

「古往今来何れの時か欠陥世界ならざらん、自ら造らずんばユトーピア無し」  
『小説家』 一八九一年一月一三日

「面白くない」欠陥世界に生きる人々に、「面白い」ユトーピアを見せることこそ小説家の使命であると、彼は考えていたのである。ゆえに、最終回で、お君との再会を果たした小説家に友人はこう忠告する。

「僕は君に一ツ注文がある、君の小説は近頃余り残忍なのが多いといふ評判だがね、実際僕が見ても君は何時でも美人を薄命の境に陥れたり、罪も無い人を不幸な目に逢せたりす



るのが好きだ、彼れは読者の感情を害して甚だ不可んよ、今度などもお君さんが斯ふやつて山から出て来て見れば、何も言はずに黙て婚礼して仕舞ひ給へ、此で復た君が理屈を付けてスネると僕等を始め外の人までが殆ど失望するよ、斯ふ何も彼も揃て目出度くなれば今度は君の小説も目出度くなつて宜い訳だ、君一ツ此祝ひに極く目出度ひ極く面白い小説を書いてみないか」

奈麻利は頷き「成程貴客の被仰る通り僕の小説は惨に過ぎると云ふ評が大分あります、ソ

コで今度は極く目出度ひ極く面白い、一度手に執ると放すことが出来ないほどの小説を作る積りで『大福帳』と云ふ新趣向を腹案して置きました」<sup>⑦</sup>

「小説家」 一八九一年三月四日(最終回)

もし小説が読者に面白がらせることで、現実世界の欠陥・面白くなさに気づかせ、それを「面白く」しようとする意志を持たせることができるとしたら……いわゆる文学性とは独立した「面白さ」にも、存在意義はあるというべきではないだろうか。そう考える時、学問としての文学研究が、小説の最大の機能である「面白さ」への分析を怠ってきたのは、迂闊なことだといわざるを得ないのである。

注

①郵便報知新聞、明治二三(一八九〇)年一月二九日から翌三月四日まで連載された。なお、『小説家』および郵便報知新聞からの引用は、『復刻版 郵便報知新聞』(全八二巻 一八九九〜一九九三 柏書房)により、旧字体は新字体に改めた。傍線は特に注記がない限り引用者による。

②正確には、『小説家』が掲載されているのは二月二十一日号一面の二段目から三段目にかけてであり、仙骨道人の投書は三段目の余剰スペースに掲載されている。なお、一段目の社説欄には、押川方義ら五人の基督教徒による、いわゆる不敬事件を起した内村鑑三への弁護の社説が載せられている。

③ここで投書にはない「西鶴」の名が出てくる背景には、尾崎紅葉、幸田露伴らによる近代的写実主義者としての西鶴再評価の風潮があった。『国民之友』一八九〇・五・二三号の幸田露伴「井原西鶴」では、西鶴は「写真派」であり「仮令小説家といふあたはざるにもせよ亦一文豪たることは動かすべからざるの議なりとす」と、奈麻利とは対照的な西鶴観が語られている。

④一例を挙げるならば、「国会議事堂焼失す」との号外が出た一八九一年一月二十日の三日御に掲載された『小説家』に、「東京の国会議事堂が焼けたそふですネ、惜しい事では御座いませんか」という台詞がある。

⑤「春」が本名で「牡丹」は村田と横山がつけたあだ名である。「君の蓮」「千代の菊」も同様。

⑥「頭取」「ひいき」「スコット」の傍線は原文による。

⑦この『大福帳』という小説は筆廬舎奈麻利著 村井弦斎閲という名義で報知社から実際に発売されている(無論、実際に書いたのは弦斎である)。お遊びといつてしまえばそれまでだが、これも弦斎の「面白さ」追求の一例と言えよう。

## 第五章 村井弦齋『釣道楽』論―進化論の受容と不安―

一 進化論への不安と民種改善学の論理―「人間は動物である」

「有機体の根原を質す<sup>ただ</sup>と動物も植物も同じ細胞から出たもので親類の様なものだ  
そうです。譬へて見ると細胞と云ふ種を蒔いた所から一本の幹が生へる、大きな枝  
が二つに分れて一方は動物となり一方は植物となる、その枝から復た枝が出来て魚  
になつたり人間になつたり貝になつたり虫になつたりするのですとネ」

隠居「ナンだと人間も草木も親類だと、少し心細くなつて来た<sup>ど</sup>な、何う云ふ訳で爾<sup>そ</sup>  
んな事になつたらう、ネー鱗次郎さん、人間の身体も虫や草木と同じ様では人間の  
価値がありませんなあ」

村井弦齋『釣道楽』 「単細胞」 『報知新聞』 一九〇一（明治三四）年八  
月一六日掲載 傍線は引用者による

村井弦齋の新聞小説『釣道楽』中の、初めて進化論を聞かされた老人の応答を描いた一  
節である。進化論に「心細さ」「人間固有の価値への疑惑」を感じるといふ反応はこの作品  
に限らず、明治を代表する知識人の随筆・小説にもあり、ある程度一般的な対応であつた  
と思われる。

進化論を知り、星雲説を想像する現代の吾等は辛きジスリュージョンを嘗めてい  
る。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。（略）人間の生  
死も人間を本位とする吾等から云えば大事件に相違ないが、しばらく立場を易えて、  
自己が自然になり済ました気分で見れば、ただ至当の成行で、そこに喜びそこに  
悲しむ理窟は毫も存在していないだろう。

こう考えた時、余は甚だ心細くなつた。

夏目漱石「思い出す事など」（一九一一） 『文鳥・夢十夜』（新潮文庫 一九七六）

秀麿は父の詞を一つ思い出した（略）「どうも人間が猿から出来たなんぞと思ってい  
られては困るからな」と云つた。秀麿はぎくりとした。（略）うかと神話が歴史でない  
ことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るよ  
うに物質的思想が這入ってきて、船を沈没させずには置かないと思つていられるので  
はあるまいか。

森鷗外「かのように」（一九一二） 『阿部一族・舞姫』（新潮文庫 一九六八）

ジリアン・ビアの『ダーウィンの衝撃』（工作舎 一九九八 原著一九八三）によれば、「ヴィクトリア朝の人々の進化思想に対する拒否反応を見ると、その多くは、生理的にぞつとする、というもの」であり、それに抗して「人間を選ばれた存在として特別扱い」するような主題の小説が多く書かれたという。

一方、内村鑑三や植村正久ら日本人キリスト教徒は、聖書によって進化論を否定するという対応はとらず、むしろ進化論と宗教を調和させようという立場が主流であった。しかし、それは日本に「ダーウィンの衝撃」がなかったことを意味しない。進化論への潜在的な不安は、それを克服できる新たな倫理を必要としたのである。進化論によって人間観を一変した最も有名な例としては、天賦人權論から国家主義に転向した東京大学総理、加藤弘之の『人權新説』（二八八二）があげられる。

ダルウィンならびにスペンセル等の進化主義の書を読むにおよび（略）吾人人類が本来特殊の生物にあらず、進化によりてはじめて吾人人類となりしものなるゆえんを知りしかば、ひとり吾人人類にのみ天賦人權なるものの存すべき道理なきゆえんをますます明瞭に知了して、ここに旧著のはなはだしき謬見に属するを悟りし

加藤弘之 「経歴談」 一八九六（明治二九）

「人間は動物である。人間固有の価値など幻想にすぎない」という加藤弘之のテーゼは、日露戦争期には静岡県出身の水棲動物学者丘浅次郎に受け継がれる。丘の思想は加藤よりも悲観的であり、人類の退化と滅亡を先送りするためには、医学や人道主義の進歩によって機能しなくなった淘汰を、ふたたび人間社会にとり入れなければならない、という優生学（彼自身は、「民種改善学」と呼んでいた）がその骨子である。

進化論から見れば社会改良も矢張り自己の属する人種の維持繁栄を目的とすべきものである。世の中には戦争といふものを全廃したいとか、文明が進めば世界中が一国になつて仕舞ふとかいふ様な考を持つて居る人もあるが、此等は生物学上到底出来ぬことで、利害の相反する団体が並び存して居る以上は其間に或る種類の戦争が起るのは決して避けることは出来ぬ。（略）

尚人道を唱へたり、人權を重んずるとか、人格を尊ぶとかいうて、紙上の空論を基とした誤つた説の出ることが屢ある。例へば死刑を全廃すべしといふ如きは即ち其類で、人種維持の点から見れば毫も根柢のない論であるのみならず、明に有害なものである。雑草を刈り取らねば庭園の花が枯れて仕舞ふ通り、有害な分子を除くことは人種の進歩改良に最も必要なことで、之を廃しては到底改良の実は挙げられぬ。単に人種維持の上からいへば、尚一層死刑を盛にして、再三刑罰を加へても、改心せぬ様な悪人は容赦なく除いて仕舞うた方が遙に利益である。

丘浅次郎 『進化論講話』（一九〇四） 「第十九章 四 進化論と社会と」

丘自身は積極的な主戦論者ではなかったにしろ、日露戦争開戦の一ヶ月前に出版された同書は、同時期の加藤弘之の『進化学より觀察したる日露の運命』等とともに、日露開戦

の世論形成にある役割を果たしたことは否定できない。進化論の受容は単なる自然科学の問題ではなく、まさに「人間の価値」を揺さぶる倫理的な問題だったのである。

今回の発表で扱う『釣道楽』は、丘浅次郎が初めて倫理問題に踏み込み、善悪とは団体の利害であるとした「動物界における善と悪」（『動物学雑誌』一九〇〇年七月一五日）と、哲学や宗教を「脳の働きの結果」にすぎないとした『教育と博物学』（一九〇一）の間の時期に、静岡県出身の水棲動物学者志望者、池水鱗次郎を主人公として、進化論がもたらした衝撃と、そこからの「人間の価値」の再構築を扱った作品である。

## 二 村井弦斎の進化論受容——「人間は高等動物である」

村井弦斎の進化論への関心は、前作『日の出嶋』（一八九六—一九〇一）に遡ることができる。「太陽エネルギーの実用化に成功した、もう一つの日本」という設定のもとに、当時の世相や事件を織り込みつつ、科学の進歩がもたらすヴィジョンを描き出す壮大な作品である。北清事変を扱った『朝日の巻』（一九〇一）では、政府の対応の遅さに業を煮やしたヒロインの雲岳女史が、「女子軍」を従え、「三万頓の太陽船」で義和団討伐に旅立つ。この船中で、雲岳女史と同志たちが人類の進化の行き着く果てについて議論を交わす場面がある。

「僕は何うかして人間の身体に羽の生へる工風がして見度いのです。尤も西洋ではヤレ風船の改良とか、ヤレ空中飛行器の發明とか、爾う云ふ工風をするものがあるけれど到底完全の物の出来る筈が無い（略）鳥でも人間でも同じ動物だ、根源に遡れば矢張り単細胞から進化したのだ（略）鳥ですら必要に迫まれて飛ぶと云ふことを工風したのだから況や高等動物の人間が自分の身体へ羽を生し得んと云ふ事がありますまい」

「人の羽翼」『日の出嶋 朝日の巻』 『報知新聞』 一九〇一年一月三日

「僕は人間をして水陸両棲の動物たらしめ度いと思ふのです。他の下等動物ですらコロコダイルとか亀とか水陸両棲の者は沢山あるのに人間が陸地の外に棲めぬとは怪しからん」（略）

「妾の望む所は、地球の如き小天地に踟躕するを好まず、太陽系中の諸星を一团となし、宇宙の間を縦横に横行せん（略）妾は千百の太陽系を一团となし、他の宇宙あらば随て之を征服せん」

「魚類の王」『日の出嶋 朝日の巻』 一九〇一年一月四日

この『報知新聞』は同年の元旦に「二十世紀の予言」なる特集を載せている。そこには電気学の進歩による生活の向上、生物学による植物の品種改良、害虫の絶滅など、科学の進歩によるユートピア的な未来が語られており、同紙の編集総務を兼ねていた弦斎が企画

に携わっていたことは間違いない。人類の未来を悲観する丘浅次郎とは逆に、弦斎は、人類と科学の無限の進歩を信じていた。

同年五月、弦斎は六年に渡って連載を続けた『日の出嶋』を中断し、『新編百道楽』という新たなシリーズの第一作として『釣道楽』を開始する。前作のような荒唐無稽な物語ではなく、一九〇一年当時の科学水準で進化論を扱った啓蒙小説である。

静岡県出身の水棲動物学者志望者である池水鱗次郎少年は、趣味の釣りを通して知りあった資産家の川沼老人に気に入られ、その婿養子となる。が、長兄の遭難により、鱗次郎を跡取りとして取り戻そうとする池水家と、優秀な鱗次郎を手放したくない川沼家との間に争いが起こる。さらに周囲の「君は釣りが上手だと聞いていたが、鮒や鯉を釣るのでなくつて川沼家という静岡県第一流の名家を釣ったのだネ」といった視線に晒され、鱗次郎は「動物界に養子と云ふ事はない。養子制度と云ふ事が僕を斯る苦境に陥れたのだ」と悟って家を出る。そして「釣商売」で生計を立てながら東京での生活を続ける鱗次郎が、釣りを通して出会った人々を啓蒙していく過程が描かれる。

「動物界の事を考へると感情で進退するのが下等動物、人類は感情に打ち克つて道理の力に去就を任せなければなりません、即ち下等動物より一層進化したる所以で、人間が感情計りに支配されては禽獣と同じ事です（略）人類と云ふ万物の霊になればその感情よりも道理の力が優るだけ下等動物より高尚なので人は感情の動物なりと云ふ諺は大間違です、私に云はせれば人は道理の動物なりと云はなければなりません」

『釣道楽』 「道理力」 一九〇一年八月三二日

鱗次郎が一貫して主張しているのは、「自然」に対する「人為」、「遺伝」に対する「伝染」の優越である。登場人物の一人荒波漫太郎は、酒と芸者遊びに明け暮れる道楽息子であったが、鱗次郎らとの出会いによって釣りに目覚めてからは別人のように行動的になる。

さらには同じような遊び人であった父をも釣りに誘い出して改心させ、「よく世間の人が何う云ふから斯うしなければならんと心得る者が多いけれども今の世間位間違つて居るものは無い、（略）その間違つた世間へ自分を引付けられるから自分も間違つて了しまふ。是れからは自分の方へ世間を引付けて世間の人の間違を直して遣らなければならん」と言わしめる。子から親へ、個人から世間（環境）へという、自然界とは逆方向のフィードバックがここでは描かれている。

「鱗次郎さんに色々動物学のお話しを聞いてから人間と他の動物との区別も分り、私が以前に世を厭ひ人を嫌つたのは全く動物性の人物計り見て居た為めであると会得しました、（略）禽獣は自分の子を愛して外の子を憎みます、（略）同じ様に世間の継子苛めと云ふ事は全く動物性の自然でせう、継子を愛育すると云ふ事は人間性の高尚な愛情でなければ出来ません」

『釣道楽』 「人と禽獣」 一九〇一年二月二〇日

「実家」（自然）か「養家」（人為）かという選択はこの作品の最大のテーマである。鱗次郎は最終回で遭難していた兄の竜太郎と再会し、池水家の跡継ぎ問題の解決を見届けた末に養家の川沼家に復縁する。「動物界に養子と云ふ事はない」と主張していた本人が養子であることを選ぶというこの結末は、この作品の主題が「人間と他の動物との区別」であることを明示している。作者が丘とその思想をどこまで知っていたかの決定的な証拠はないが、池水鱗次郎の主張は丘次郎のアンチテーゼたり得ているのである。

しかし、人間の優位を主張する本作品は、前作『日の出嶋』もそうであったように、人間以外の「下等動物」を蔑視するのみならず、感情に動かされる無教育な人々を、「動物性の人物」「虫類の程度にあるべき人物」などと蔑む視線を持つ。弦斎が北清事変や日露戦争において、丘次郎以上に積極的な戦争協力の態度をとったのは、こうした進歩への崇拜と、その裏返し「野蛮」なるものへの蔑視と無関係ではあるまい。

### 三 非戦論者たちの進化論受容―「人間は動物未満かもしれない」

丘次郎と村井弦斎の進化論受容に共通しているのは、生物学上の「進化」と社会学的な「進歩」の混同である。古生物学者のグールドによれば、「スペンサーの唱道によって生物学に送り込まれた『進化』という語は、英語の日常用語では進歩という意味」であり、ダーウィン自身はその学説を「進化」と呼ぶことに抵抗していたという『フルハウス―生命の全容―』渡辺政隆訳 早川書房 一九九八）。ダーウィンよりもスペンサーが広く読まれた明治の日本にあつては、本国以上に進化と進歩、生物学と倫理の混同は自明となつてしまった。丘次郎の民種改善学も、村井弦斎の人間至上主義も、その混同の上に、進化論の名のもとに戦争と差別を擁護する立場をとった。だが、進化論を認めつつも戦争と差別を否定する言説が、当時に存在しなかったわけではない。『釣道楽』と同じ年に発表されたクロポトキンの『近代科学とアナーキズム』は、ダーウィンが『人類の起源』の中で「相互的同情と社会性の進化」にふれていることに依拠して、「生存競争」のみを強調するスペンサーやハクスレーら社会ダーウィン主義者を批判している。

内村鑑三が進化論と聖書の両立を志向していたことは前述したが、週刊『平民新聞』に拠る社会主義者もまた、進化論と社会主義の両立を目指していた。堺利彦は、新刊紹介で「猶一つ云ふべきは著者が社会主義に対する見解で、惜しむらくは世の多くの競争論者と共に速断に陥つて居る」と『進化論講話』を批判し『週刊平民新聞』一九〇四年一月三一日）、幸徳秋水は同日の社説で、「生物の進化は独り生存競争に由るのみならず、亦実に生存協同の恩に浴する」から社会主義と進化論は矛盾しないと反論した。キリスト教徒にして平民社の一員であつた木下尚江は、終戦後に出版した自叙伝でこう論じている。

今日でも我等人間と猿と同じ祖先から出たものであることを不愉快に思い、我等人間は決して其の如き下等なものでは無いと抗弁する人が尠すくなからぬのである。然し考へて見れば斯く抗弁する人々の愚劣な熱心こそ実に人の世の不思議では無いか。（略）

一個細胞微分子から子ぼうから子を経過し猿猴を経過して我等人間にまで進化した年月は幾百

満歳であつたろう。(略) 母胎に於ける僅々十個月の驚くべき進化は、其の昔し始めて人類に化成した我等の祖先が幾百満歳の歴史の、極めて美妙なる縮図ではないか。(略) 何故に我等は森羅万象を理解することが出来るであらう、『我』の裡に『彼』と同根の力を含んで居るが為である。

木下尚江 『懺悔』(一九〇六) 筑摩書房『明治文学全集四五 木下尚江集』(一九六五) より引用

これらの反論に共通するのは、人間は動物よりも「進歩」しているとは限らない、という主張である。日露戦争を引き起こした人類は、果たして猿よりも「進んで」いるといえるのか。村井弦斎もまた、第一次大戦下に発表した最後の小説『小松嶋』(一九一七)では、「進歩」への懐疑に憑かれた主人公にこう語らせている。

今の世の文明を称するものは人類の暗黒な方面が進歩したものです。飛行機が天を翔り、潜航艇が海を潜るのも、戦争といふ殺人事業が進歩した事ではありませんか。(略) 戦争の道具は百年前に比して幾百倍の進歩を称してゐますけれども、美術文藝音楽其他美に關した方面は百年前と同じ事です。

村井弦斎 『小松嶋』 改造社 『現代日本文学全集 歴史・家庭小説集』(一九二八) より引用

弦斎の時代からさらに百年が過ぎた今日でもなお、進化論を認めない創造論者は根強い勢力を持ち、一方では遺伝子工学の進歩を背景とした新優生学が復活の兆しを見せてもいる。弦斎が『釣道楽』で提示した人間至上主義という結論は現在では受け入れがたいものではあるが、彼は「文藝」を通して、科学と倫理の衝突という問題を時代の鏡として浮かび上がらせたといえよう。

## 付 関連年表

一八五九 (安政六)	ダーウィン、『種の起源』
一八六三 (文久三)	村井弦斎 (本名寛 <sup>ゆたか</sup> )、生まれる (一八九二七)
一八六七 (慶應三)	マルクス、『資本論』
一八六八 (明治元)	丘浅次郎、生まれる (一八九四四)
一八七一 (明治四)	ダーウィン、『人間の起源』
一八七六 (明治九)	スペンサー、『社会進化論』
一八七七 (明治一〇)	モース、東京大学で日本初の進化論の講義を行う
一八八二 (明治一五)	加藤弘之、『人權新説』で天賦人權説を否定
一八八四 (明治一七)	スペンサー、『社会進化論』、初邦訳
一八九〇 (明治二三)	弦斎、『郵便報知新聞』紙上で連載小説家として活動を始める
一八九四 (明治二七)	日清戦争 (一八九五)、『郵便報知新聞』、『報知新聞』に紙名を変更

一八九六（明治二九） 立花銃三郎訳、『生物始学』（『種の起源』の初邦訳）

弦斎、『日の出嶋』の連載を開始

一八九七（明治三〇） 丘、東京高等師範学校の教授になる

一八九八（明治三一） 丘、文部省の教員検定委員に。『近世生理学教科書』を刊行

一九〇〇（明治三三） 北清事変。丘、「動物界に於ける善と悪」（『動物学雑誌』）

一九〇一（明治三四） 一月、『報知新聞』紙上に「二十世紀の予言」が掲載

四月、弦斎『日の出嶋』連載終了

#### 五、二月 弦斎『釣道楽』、連載

一二月、丘、『教育と博物学』

ド・フリースが突然変異説を提唱。後のネオダーウィニズムの先駆

クロポトキン、「近代科学とアナキズム」でスペンサーを批判

一九〇二（明治三五） 五月 『釣道楽』単行本化。同時期の話題作に田山花袋『重右衛門の最後』

一九〇三（明治三六） 弦斎、『食道楽』を連載、代表作となる

幸徳秋水ら、平民社を結成し非戦論を展開

#### 一九〇四（明治三七） 一月、丘『進化論講話』

二月、日露戦争（一九〇五）

弦斎、『軍士読本』の自費出版など、戦争協力活動を盛んに行う

一九〇五（明治三八） 丘、「人類の生存競争」（『中央公論』一九〇五年一〇月）。戦争を「全く猛獣同士の競争と異なることがない」と表現。ただし非戦論ではない。

一九〇六（明治三九） 木下尚江、『懺悔』

北輝次郎、『国体論及び純正社会主義』で『進化論講話』を批判  
弦斎、『小松嶋』を「婦人世界」に連載。最後の小説となる

#### 参考

『近代日本思想大系 9 丘浅次郎集』（筑摩書房 一九七四）

黒岩比佐子 『「食道楽」の人 村井弦斎』（岩波書店 二〇〇四）



## 第六章 福地桜痴『女浪人』論——「主」を持たない者の革命

### 一 はじめに

縦<sup>よし</sup>んば此方が正義の師<sup>ひやく</sup>である故に至終<sup>しじう</sup>の勝を取ると致<sup>いた</sup>しても（略）長の年月を日本の国民は戦争の難儀に苦しみ塗炭に坐するとやら申しまする修羅の巷に生死の苦現<sup>くげん</sup>を致すは知れた事それが国家のお為で御坐りませうか？（略）

幕府を説き理の当然に屈服させ政權返上を自分と朝廷へ致すやうにさせますが第一の上策（略）

女の身でも小妾<sup>わたくし</sup>は此方向に及ばん限り力を竭<sup>つく</sup>し度と存じ居まする。

福地桜痴<sup>ふくちおうち</sup>① 『女浪人』 第十三回其四 『日出国新聞』 一九〇二（明治三五）年五月

三日掲載②

もし明治維新が、非暴力の、女性による、民衆のための革命であったとしたら。

それが本論が扱う代替歴史小説③『女浪人』の主題である。大衆向けの新聞小説である

必要上、主人公の松井お信<sup>のぶ</sup>は「静流の長刀<sup>ながなた</sup>を習ひたる素養はあり、一刀流の剣術の上に宝

蔵院の槍術までも修業なし今は男子も容易<sup>たやす</sup>うは敵し難し伎倆<sup>うでまへ</sup>」という超人的なヒロインとして造型されており、男性に対して剣術でも言論でもひけをとることはない。そんな彼女

の理想を阻む最大の敵は、新選組でも尊攘浪士でも蘇国連隊<sup>スコット</sup>でもなく、それら男性共同体

が構成する社会からの女性蔑視<sup>ミッジンニー</sup>であった。

彼女は持論を展開するたびに、「女の癖に余計な口を利やがるな」「女流に似合はぬ至極の御議論」といった黙殺ないしは揶揄を受けることになる。そうした男性社会からの排除は、ついに彼女の無血革命論を挫折させ、「政体改革の持論の為に幕府の役人には憎まれ、外国の事情を知て居る為に攘夷党には敵と目指され、又温和説を執る為に激烈派には害物と認められ四方八方の仇に成て」英国への亡命を余儀なくされる。そして英国でさえも「松川お信と云ふ女は日本の蛮女である、異人種である異宗教徒である、我々基督教文明社会の交際に入るべき者で無い」という、オリエンタリズムの壁に直面するのである。

本論の目的は、通俗時代小説として文学史から忘却されてきた本作品を、歴史家でありジャーナリストでもあった作者桜痴の思想遍歴に照らして、『主』を持たない者の革命を描いた文学作品として読み直すことにある。

## 二 先行研究及び福地の思想遍歴

本作品の数少ない先行研究の一つ<sup>④</sup>である越智治雄の「福地桜痴試論」(『近代文学成立期の研究』一九八四 岩波書店 初出『文学』一九六六年四月号)は、『女浪人』の主題を作者と同じ「現実主義」と見て「自己告白」「ほとんど彼は自分を語っていると言っているのだらう」と結論づける。つまり、主人公お信の平和主義は、そのまま作者桜痴の思想であるというのである。越智論の是非を検討するための手続きとして、まず『女浪人』の舞台、つまり幕末から執筆時に至る、桜痴の政治思想の変遷を見ていきたい。

幕末に桜痴が大量に書いた上奏文・日記などは現存しないため<sup>⑤</sup>、『女浪人』と比較的近い時期に書かれた『幕府衰亡論』『懷往時談』をはじめとする史論・回顧録<sup>⑥</sup>によって当時の桜痴の思想を再現していくことにする。

まず一八九二(明治二五)年の視点からの幕末史である『幕府衰亡論』では、政治の手段としての暴力について、井伊直弼を暗殺した者たちを「暴徒」と規定し、攘夷派を「変乱党」と呼んで非難する一方、鳥羽伏見の戦い直前の記述では「前將軍家(引用者注 慶喜)が何程に平和主義を執らるゝとも之(主戦派)を鎮圧すること能はざる」と幕府側の主戦論を肯定している。体制(幕府)に有利な二重基準と言うべきであろう。

その二年後の『懷往時談』では、より当時の自身に近い立場からの回顧を試みている。

余は原来純乎たる佐幕主義にて、(略)合議政体と幕府独裁は両立すべきものに非ずと主張せし者なりけるが、両度の洋行殊に仏国滞在中に聴聞したる説は激烈なる民権自由論にして(略)第一の極端保守と第二の極端進歩とは常に自己の胸中に衝突し

大政奉還の際に桜痴は、徳川慶喜を大統領とし、公卿諸侯をもつて諸藩会議とする新体制の建議を提出している。しかし「事行はれざる時は(略)独裁の権を掌握し玉ふべきなり」と留保をつけ、結局は却下されるなど、政治思想にも揺れが見られる。武士道徳と、西洋で学んだ共和主義との落差が、彼の理念を不安定にしていたのである。彼自身、幕末当時の混乱した自己を「今日より回顧すれば何にして余は斯まで愚蒙にてありし乎」と自嘲している。洋行体験を経た彼の思想は、旧来の「独裁幕府制」(桜痴は井伊直弼をその代表者とする)と、より西洋的な「立憲幕府制」(小栗忠順<sup>⑦</sup>を代表者とする)の間で葛藤していたのである。

そして桜痴が、一八九八(明治三一)年の『幕末政治家』で絶賛したのは、幕府内の主戦派であった小栗忠順であった。桜痴は当時を回顧して「少くも幕末数年間の命脈を繋ぎ得たるは、小栗が与りて力ある所なり(余は親く小栗に隸属したるを以て、其辛苦に心力を費せること、余が目撃せる所なり)」と深く共感している。

「現実」の幕末にあつては、小栗こそ最大の幕末政治家であり、その立憲幕府制(軍事・財政の両面で、幕府を近代的統一政府として再建する)の実現こそ最高のヴィジョンであった。動揺していたにせよ、彼の揺れ幅は幕府という「主」の枠を超えなかったのである。

幕府崩壊後、明治前期には新政府に接近し、立憲帝政党の設立にも携わるが、その時々体制を「主」としてその維持を前提に思考せざるを得ないのが桜痴の限界であろう。

では、小説『女浪人』に表出された、一九〇二(明治三五)年当時の桜痴の思想はいかなるものであったのだろうか。

### 三 暴力と報復の連鎖を断つ

お信といえども、生まれながらの非暴力主義者であったわけではない。新選組の芹川鴨⑧に幕府外国掛で許婚いひなづけだった笹野弁之丞を暗殺され、敵討かたきうちのために男装して京に上った発端の時点では、彼女は（思想的には）ごく一般的な旗本の娘であった。

新選組局長の近藤勇から芹川が既に別件で切腹したことから弁之丞暗殺の真相（薩摩藩倒幕派と内通していた）を知らされ、近藤に議論を挑んだ時、この物語の真の主題が始まる。まずお信は、日本の未来の為に行動していたはずの許婚がなぜ「不忠不義」の者として殺されなければならなかったのかを問い詰める。

笹野弁之丞をば徳川の御家へ対し不忠不義じやと仰せあつたは、左様かは存じませぬが、但し弁之丞が所存の処、日本国へ対しても不忠で御座るか不義で御座るか、その御判断を伺いませう

#### 『女浪人』 第四回其五

近藤も、倒幕派と呼ばれる者たちにも彼らなりの理想があること、つまり正義の相対性を認める。しかし、彼自身は己の正義である「武士の覚悟」から出ることは出来ない。

彼方で御為と思ふ事も此方から見れば御不為と存ずる事もあつて是が議論の分るゝ所。シテ見る時は今日の場合では各々自分が御為じやと信ずる所を目的めあてとして決

心いたす外は無いじや。是等の事は武士の覚悟おんみ女性の卿にょしやうに申すべき事では無けれど

#### 『女浪人』 第五回其一

（越智論に指摘があるように）近藤の相対的正義観を超え、非暴力こそ絶対的正義と信じるようになったお信は、「目的めあての外た敵討は詮ない事と存じますれば唯今スツパリと思切り其望は止やみました」と、「武士の覚悟」の中核というべき敵討そのものの断念を宣言する。

こうして、彼女は主人も主君も主家も、いかなる意味での「主」も持たない、「此世に一人の女浪人」となる。新たな目的を果たす第一歩として、男装を解いて（武士道徳・男性原理からの解放を象徴する）、祇園の仲居に身をやつしたお信は、土州浪人寺田の奉行暗殺計画を知り説得する。

尊王じやの佐幕じやのと互に立た見込の相違で切つはツつの天誅沙汰（略）我身を抓つて人の痛を知れと云ふ喩は正しう私の身の上に覚のある事、跡に残つた妻子一家その残念さ悔しさは何程じやと思召す

## 『女浪人』 第六回其三

暗殺によって「主人」たるべき人を失った悲哀が彼女の論に説得力を与え、寺田は翻意する。

暴力に報復で応じるのではなく、「主」の名のもとに反復される暴力と報復の連鎖そのものを「敵」として、その連鎖を断つことが彼女の新たな目的となるのである。

### 四 「尊王攘夷」の普遍性を超越する

行動原理としては非暴力主義（すなわち尊攘志士の敵）であり、政治思想としては許婚の遺志を継ぐ平和的政権交代論者（すなわち幕府の敵）であるお信は、前述のように尊王派・佐幕派の双方に命を狙われて英国に亡命する。この時、日本の将来を憂うお信に英国人の長崎領事が語った「ナンノ幕府が倒れやうが朝廷の政府に成らうが日本は日本ぢや」という発言は重要であり、これが後にお信の世界観を定めていくことになる。

しかし、「女性の身であられも無いヤレ国家だのソレ政治だの」に關与するお信は、「英国でも定めて狂人沙汰」という女性憎悪の視線から逃れられなかった。人種主義者・男性優位主義者である蘇国連隊スコットのトルニング大尉に「日本の蛮女」と侮辱されたお信は決闘を

申し込んで、劍の達人である彼を木薙刀で打ち負かす<sup>⑨</sup>。「卿おんみごとき婦人」と侮ったお信に敗れた上に命を助けられ、基督教とは違う道德体系の存在を知ったトルニングは、以後は彼女を「蛮女」ではなく社交界の一員として敬意を払うようになるのである。

越智論はこの挿話を、桜痴が武士道の普遍性を無邪気に信じていた証拠としているが、承服しがたい<sup>⑩</sup>。幕末と明治初期に各二回の洋行を体験した桜痴が、そこまで自文化中心のであったとは思えないからである。むしろ、この挿話は「尊王攘夷」思想の悪しき普遍性を桜痴が確信していた証拠と思われる。異分子を排除するために、神や天や君主などの「主」の名を利用する者たちは世界のどの国にも存在することを、洋行した幕末明治の日本人は必ず痛感したであろうから。この意味で英国にも「尊王攘夷」は存在するのである。

この決闘で英国社交界の一員と認められ、国際的な視野を身につけたお信は、幕府使節団の訪欧により日本の情勢が危機にあることを知り、帰国を決意する。

お信は憂苦一方ならず、朝廷と幕府との間は同じ日本国内の事なれば何れに政権の帰するとも日本は日本にて敢て驚く程にはあらねども、若も風説の如く双方にて各々

英仏を頼み其兵力を仮かりて雌雄を争う様に成ては夫それこそ日本を危くするの国難

## 『女浪人』 第二十回其三

英国での長い亡命生活を経たお信の政治思想は、「朝廷であらうが幕府であらうが（略）万事上の思召次第で御政治は御独裁、（略）英国その外の国々の如く會議を起して衆説に由て政治を行はせらるゝ様に成りませねば到底日本人が目覚めます程の改革は行へませぬ」という境地に達している。なおも幕藩体制の維持にしがみつ়幕臣たちに失望し

たお信は、彼らを出し抜いて日本へと急ぐ。

ここで興味深いのはお信に追い抜かれた幕府使節団についての「余も其随行の一人にてありき」という記述である。ここでの「余」とは超越的・透明な語り手ではなく、幕末に実際に二度の洋行を経験し、前述したように思想的動揺を味わった福地源一郎桜痴自身であらう。

この一節は生涯「主」に縛られた政治人桜痴の限界を、小説家桜痴が創り出した「女浪人」が超越していく様を表現しているのではないだろうか。

## 五 戊辰戦争の戦争責任を問う

密かに帰国したお信は朝廷と幕府の双方に働きかけ、後藤象次郎ら大政奉還派と協力して、宿願の平和的政権交代を実現寸前にまでこぎつける。しかし薩長は密かに明治天皇を動かして討幕の密勅を入手し、お信の努力も空しく鳥羽伏見の戦いが起きてしまう。

表では徳川慶喜の恭順を受け入れておきながら、裏では武力を発動する朝廷のやり方にお信は激しく憤り、その怒りの対象は薩長や公卿に留まらず、彼女は近衛公を詰問する。

どちらが真の叡慮やら恐ながら下賤の小妾どもには更に合点が参りません、まこと討幕の御召で御坐あるならばナゼ大政返上の奏問を御嘉納には相成りました？（略）

武家では是を二半と申して此上も無い不徳不義の至と申しまする、恐れ多くも一天

万乗の大君にて蒼生の神とも親とも仰がれ玉ふ朝廷の遊ばされ方とは愚かな小妾には存じ奉り兼まする、

## 『女浪人』 第二十九回其二

お信はいわば「一天万乗の大君」の戦争責任を問うているのである。彼女は大政奉還派に加わっているが、その最終目的は、朝廷に政権を還し奉ること（維新）ではなく、平和のうちに幕府から政権を奪うこと（革命）であったことが、この一節で明らかになる。

朝廷のやり方に絶望したお信は、もう一方の当事者である江戸の彰義隊（徹底抗戦派）を説得し、少しでも内乱の拡大を防ごうとする。

「彰義隊の衆は成ほど頑固の没理漢連中ばかり彼の連中が居たからと云て将来の日本

の為に害にこそなれ益には成らぬと仰しやりますのは御尤かは存じませんが、小妾はまた左様とは存じませぬ（略）及ばぬのを知つても見捨てませぬが誠の慈愛」と勝安房に語り、悲壮な決意で赴いた彼女は、逆に新政府側の間諜として監禁され、かねて彰義隊説得に反対していた勝によって救出される。お信とは異なる形での平和主義者である勝は、「勢ひ已

に斯なつては行所まで行く外は無い（略）ナニ戦争だつて体した事は無いよ、少し負るか勝かすれば和睦とか降参とかに直なるよ」と、むしろ犠牲を出すことで平和の到来を早

めようとする立場をとる。しかしお信は勝の相対的平和主義にも、「衆説に由」らない薩長政府にも共感できず、ついに再び英国に渡り、かつて世話になった英国人と再婚する。

その後のお信は岩倉使節団（本文中には書かれていないが、これにも桜痴は参加している）からの誘いにも応じず、政治とは無縁な余生を送る。最後に、日清戦争の際に大日本帝国の大義を力説する一婦人が英国にいた、という一節をもってこの小説は終わる。

英国人の「主人」と英国という「主君」を持ってしまったお信はもはや革命家でも平和主義者でも「女浪人」でもなくなってしまったのである。「主」を持つ者が平和的革命を遂行することの困難、それが本作品の主題であると思われる。

## 六 同時代人からの評価

以上見てきたように、『女浪人』の主題を「現実主義」「自己告白」に限定する越智論には、留保をつけざるを得ない。最後に挫折したとはいえ、『女浪人』の主人公は作者桜痴の実人生をはるかに超える理想主義者であり平和主義者なのだから。

むしろこの小説は、桜痴の「主」たる明治政府への、ひそやかな政治的抵抗のメッセージとして読まれるべきである。彼自身は公に日露非戦論に加わることとはしなかったが、開戦直前にこうした小説を新聞連載し、終戦直後に単行本として刊行したことの意義は問い直される必要がある。

だが問題は、当時の読者たちに、桜痴が『女浪人』に込めたメッセージが届いたか否かにある<sup>⑩</sup>。例えば、単行本刊行時の文芸誌の書評欄には次のような寸評がある。

桜痴が出て、盛んに武士気質を振舞す世の中だ、桜痴に御世話な話である

獅子児 「緩調急調」 『新声』 一九〇五（明治三八）年一〇月二〇日

おそらくは題名と宣伝文だけを見て、「武士気質を振舞す」物語であると即断したのであらう。『女浪人』がむしろ武士道否定の小説であることは既に述べた。

翌年一月に桜痴は病没するが、夏目漱石の書簡中に次のような興味深い一節がある。

（一九〇六年）二月七日 福地桜痴の幕末記事は今売つてゐるかね。いくらでどこに売つてゐるか教へてくれ給へ。桜痴といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し当人は余程えらいと思つてゐる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。（略）然しあんな浅薄な人間でも人から大にもて囃されるのだから殊に女から屢惚れられるのだから妙なものだね。そうなると女に縁が遠い程えらい人といふ訳だな。

岩波書店『漱石全集 第十四巻 書簡集』より

最後の一文や、日露戦争下に大塚楠緒子の反戦詩を「女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の従軍行杯はうまいものだ」（一九〇五年六月三日書簡）と評した例をあらためて引くまでもないことだが、漱石は強烈な女性蔑視の持ち主であった<sup>⑪</sup>。

漱石は桜痴の作品は一編も読んでいなかったようだが、巷間の逸話のはしばしから自分と逆の女性観を感じ取って、それを「浅薄」と評したのであらう。

一般的な文学上の価値観からすれば、桜痴は漱石よりも「浅薄」だという評価はその通

りかもしれない。しかし、政治的抵抗よりも自己告白に重きをおく純文学的価値観そのものが、漱石を国民作家とする人々によって作られたことは忘れるべきではない<sup>⑩</sup>。

漱石の予言通りに桜痴は、「生前は可成有名でも死ねばすぐ」忘れられた。かろうじて一時桜痴に師事していた永井荷風の『断腸亭日乗』（一九四二年二月二十九日）の中に「桜痴居士の名は今日全く忘却せられ其著述の如き殆ど棄てられて顧みるものさへ無きが如し。されど明治時代の政治文芸を研究するもの一応は桜痴居士の小説戯曲雑著の類は之を一読すべき必要あり」という記述が見つかる程度である。

天皇制軍国主義のもとではその程度の評価でも仕方がないとしても、問題は、戦前戦中の文学観が、戦後六五年を迎える今日にまで持続しているという点である。

政治人としての桜痴には無節操さが目立ち、必ずしも一貫した平和主義者とはいえない。しかし少なくとも『女浪人』一編は、漱石ではなく荷風の言に従う価値があると思われる。

## 七 おわりに

この世界において、次第次第に、効果のある非暴力をもって暴力にかえて行くように努力すること。非暴力は、それが効果のある場合にのみ、よいものである。

シモーヌ・ヴェイユ 『重力と恩寵』「暴力」 一九九五（原著一九四七） ちくま学芸文庫（傍点は原文のまま）

小説『女浪人』は、前述のように同時代にあつては支持を得られず、日露戦争に対する「効果のある非暴力」にはなり得なかった。荷風の日記にあるように、「明治時代の政治文芸の研究」のための一資料として片付けるのは簡単だが、それでは後世の非暴力主義者にとって、この作品はそれ以上の意味を持たないのであろうか。その問いに答えることで、本論の結びとしたい。

幕末には幕府という主を持つ男性であつた桜痴は、その先進的な言動ゆえに何度か天誅に遇いかけている『懐往時談』。それゆえに非暴力を実現しうる主人公は主を持たない女浪人として造型されねばならなかった。主と臣下と敵というヒエラルキーに縛られた男性たちにとって、他の主に仕える男性は敵だが、女性とは敵未満の何者でもない存在であり、お信は相手の女性蔑視の視線を逆用することによって対話の機会を得るのである。

そして、新選組の近藤との対話をはじめとして、彼女は暴力的他者を説得する際に、しばしば「国家のお為」というレトリックを使用する。こちらの言葉を相手に届かせるには、戦術的に（むしろ「平和術的に」と言うべきか）、ローカルな「主」よりも上位にある概念を持ち出さねばならないのである<sup>⑪</sup>。維新もしくは革命の過程の段階、一国家内に二つの「主」が並存していた状況にあつては、それは「効果のある非暴力」であつた。

だが、維新もしくは革命が最終段階となり、旧幕府と新政府とが戦争状態（戊辰戦争）に入ると、彼女の「国家のお為」を建前とする説得は通じなくなる。この時期の薩長要人ないしは彰義隊にとっては、自らの主こそ国家そのものであり、もう一つの勢力との戦いは内乱ではなく国家間の戦争である以上、その戦争を阻止しようとする者は国家の敵ではない。戊辰戦争の不義を訴えつつも阻止するには至らず、日清戦争には無力であつたよ

うに、「国家のお為」が通用しない局面では、彼女の非暴力論は効果を失うのである。  
英国への亡命や国際結婚の挿話にみられるように、お信は行動の面では日本という国家を超えていた。しかし、非暴力主義者の唯一の道具である言葉の面で、彼女は「国家のお為」を超える論理を紡ぎだすことができなかった。政治人桜痴を超えた小説家桜痴の想像力をもってしても、国家を上回る非暴力の源泉を見出すことはできなかったのである。  
「主」を持たないことで国家内の暴力（テロ・内乱）を否定しつつも、国家の枠を超えられなかったがゆえに国家間の暴力（戦争）を否定しきれず、惜しくも反戦小説たりえなかったこと。そこに『女浪人』の可能性と限界があると本論は結論する。

## 注

① 福地源一郎桜痴（一八四一〜一九〇六）は長崎出身、蘭・英学を以って幕府に仕え、維新後は東京日日新聞社長・日出国新聞顧問などを歴任、漸進主義を標榜し、政府との癒着を非難されもしたが（天皇主権説など）、政治・文学・歴史・演劇改良など各方面で業績を残した。近年の研究では、彼に「国内に存する封建制の残滓を徹底的に解体しようという目論見」（岡安儀之『平民』民権家・福地源一郎の『国民』形成論）東北史学会『歴史』二〇〇八年四月）を見るなど、「漸進派」に留まらない全貌が明らかになりつつある

② 『女浪人』は一九〇二（明治三五）年三月一日から七月二六日にかけて『日出国新聞』に連載され、一九〇五（明治三八）年一〇月二四日に単行本として刊行された。本論での引用はすべて『日出国新聞』により、近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/>）所収の初版本は参照するとどめた。なお表記については、旧字体を新字体に、傍点・ルビを適宜省略するなど私に改めた。傍線はすべて引用者による。

③ いわゆる「架空戦記」「歴史改変小説」に相当する。吉田司雄によれば、英語圏での代替歴史小説（alternate history）とは、「すでに起こってしまった過去の歴史にifを持ち込み、現実には起こりえなかった別の歴史を背景として物語が展開する小説」と定義される（吉田「代替歴史小説の日本的文脈」『思想』二〇〇六年四月）。

④ たとえば筑摩書房『明治文学全集』一 福地桜痴集（一九六六）の柳田泉による解題では、「女浪人」を歴史小説ではなく政治小説に分類しているが、具体的な評はない。また、寺谷隆「福地桜痴小論」（龍谷大学『国文学論叢』一九六八年二月）は、桜痴に「非暴力主義」を認めつつも、『女浪人』については「興味本位の作品」と一蹴している。

⑤ 一八六八（明治元）年に桜痴が薩長批判のため発行した『江湖新聞』は現存するが、未見。

⑥ 『幕府衰亡論』『懷往時談』の引用はすべて前掲『福地桜痴集』に、『幕末政治家』の引用は平凡社東洋文庫によった。

⑦ 小栗忠順（一八二七〜一八六八）は外国奉行・勘定奉行などの重職を歴任、幕府の再建に努めたが、戊辰戦争の際に新政府軍によって斬首される。

⑧ 芹沢鴨（？〜一八六三）は新選組の初代筆頭局長。粗暴な行動が多く、近藤勇らによって粛清される。

⑨ 「決闘は暴力ではないか」という批判は当然考えられるが、作者はこの決闘場面から暴力性を払拭する意図があったと思われる、お信に木薙刀を使わせ、敵を傷つけずに真剣をはたき落とすという妙技を披露させている。非現実的な設定ではあるが、少なくとも福地にはこの決闘を暴力としてでなく描く意図があったことは確かである。

⑩ 確かに作中のこの件には「武士の娘は女の武士」という台詞がある。しかし、これはお



信が既成の武士道に縛られていた証拠というよりも、むしろ逆の証拠ではないだろうか。

⑪『女浪人』は桜痴の死後に歌舞伎化・映画化されているが、『都新聞』の劇評や広告を読む限り、お信は脇役に押しやられ、「勤王美談」（映画版のサブタイトル）に改変されてしまい、原作の持つ政治的抵抗の要素は消えてしまっている。

⑫たとえば朴裕河の博士論文『日本近代文学とナショナル・アイデンティティ』（加筆修正して『ナショナル・アイデンティティとジェンダー』として刊行 二〇〇七 クレイン）の結論部によれば、漱石テクストの男たちには常に女性を恐怖し、不信し、排除する傾向が見られるという。

⑬前掲朴論によれば、漱石の国民作家化は大正教養主義を担った弟子たちの則天去私神話に始まり、戦後の江藤淳によつて決定的となり、柄谷行人・桶谷秀明・そして越智治雄らに継承されたという。越智論での桜痴の評価が低いのもむしろ当然であろう。

⑭そもそも幕末の志士が、朝廷や幕府を超えた国家という観念を持ちえたかという問題はある。しかし『懷往時談』には、「国権の維持」という名分によつて水戸の尊攘志士を説得できたという桜痴自身の体験が語られており、あながち荒唐無稽とは言えない。

## 第三部 平和のための暴力は許されるか

### 第七章 木下尚江『火の柱』論―実効性ある反戦小説のために

一 時代背景―平時ではなく、戦時に反戦小説を書くということ

「日本も偉いことになって参りましたナ、此の戦争熱の最中で非戦論の演説会を行ろうツてんですから」

木下尚江『火の柱』（五十八）

『毎日新聞』一九〇四（明治三七）年二月二九日掲載

国際協力の名のもとに、憲法改定と再軍備をめざす「普通の国」論は、今や国民的合意を獲得しつつある。そうした状況下、従来のような「戦争の悲惨さ」「軍国主義の恐怖」を繰り返すだけの反戦論は、もはや説得力を失いつつある。

にもかかわらず、軍事力を用いずして国際問題を有効に解決する方法を、積極的に提示した反戦論は、今日に至るまで極めて少ない。本論が取り扱う木下尚江の『火の柱』は、その困難な課題に小説という形式で応えようとした、数少ない例である。

各国の識者既に軍備拡張の競争の至大愚事たるを悟了せり

既に悟りて而して之を改むること能はざるものは事情已むを得ざればなり

国民既に重荷に苦み政治家既に其の煩勞に倦めり

ア、誰か来たりて之を救ふものなき乎

木下尚江「世界平和に対する日本国民の責任」『毎日新聞』一八九九（明治三二）年三月一七日（原文は改行なし）

この「世界平和に対する日本国民の責任」は、東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業後、弁護士・普通選挙運動を経て新聞記者となった木下尚江（一八六九―一九三七）の、初の署名入り論説である。世間が日清戦争の勝利に浮かれていた明治三二年という時期に、尚江はすでに軍備拡張競争の愚かさを訴え、世界平和のために日本が果たすべき責任を模索していた。

その木下尚江の最初の小説『火の柱』（一九〇四年一月一日―三月二〇日）は、日露戦争の開戦（一九〇四年二月一〇日）一ヶ月前という緊迫した状況下で、『毎日新聞』①紙上で連載を開始した。

年末の社内総会議の議題で、小説をどうするかという問題がでて、（略）木下尚江がつい「僕が書きます。」と発言して書く羽目になったという。彼は「斯うして私は『火の柱』を書くことになりました。此の瞬間まで私の意識の中には、小説を書くなど云ふことは爪の垢ほどもありませんでした。然かし『非戦論』を叫ぶ私の領分は、是で

豊富に獲得されました。」と述べている。

山田貞光『木下尚江と自由民権運動』一九八七（昭和六二）年 三一書房

この会議の前月（明治三十六年十一月）、『毎日新聞』は従来の絶対非戦論から戦争容認論に転じていた。その一記者として、論説や演説による反戦活動のいきづまりを感じたがゆえに、尚江は反戦小説という手段を選んだのである<sup>②</sup>。

若し政治的理想と野心とを見せざる文学者ありと言ふものあらば、予は敢て答へて言はん、其は文学者にあらずして男娼のみ幫間のみと、

罵花野郎（木下尚江）「詩人ミルトン」『毎日新聞』一九〇五（明治三八）年七月一日

後に尚江は島崎藤村の『破戒』を評して、「吾人は著者の着眼と用意と著作其物と総て真摯健全なることを感謝すると同時に、其の民心に反響する効果の大ならんことを祈らざるべからず」『新紀元』一九〇六（明治三九）年五月一日と述べている。反戦・反差別小説は単なる意思表示ではなく、作家の「政治的理想と野心」を「民心に反響」させ、現実の問題解決に貢献することが文学の使命であると尚江は考えていた。この章は、『火の柱』に込められた尚江の反戦理論と、それが同時代の読者にもたらした実効性を検証していくことを目的とする。

## 二 戦争観―「戦い」ではなく「戦わせ」であるという認識

「諸君が露西亜討たざるべからずと言ふけれ共ダ、露西亜の何物を討つと言ふのです」

「露西亜帝国を征伐するんだ」と叫ぶものあり、（略）

「我輩は諸君の態度が可笑しいと思ふです、即ち諸君は自家撞着です（略）看給え、露西亜帝国政府の無道壇制は露西亜国民の敵ではありませんか、然れ共独り露西亜政府のみでは無いです、各国政府の政策と雖も、其の手段に露骨と陰険の相違はあるか知れませぬが其の精神は皆な露西亜と同じ侵略主義ではありませぬか」

『火の柱』（五十九） 一九〇四年三月一日

そもそも、なぜ戦争は悪とされるのか。不当な攻撃への正当防衛が罪に問われないのなら、自衛戦争も同じことではないのか。従来、その疑問に正面から答えた反戦論は少ない。

恐怖を以て非戦の理由となすが如きは、思想の最も浅薄にして、精神の最も怯弱なる者の言ふ所のみ、豈に共に高明雄大なる平和主義を語るべけんや、

木下尚江「日本の婦人平和会に警告す」『毎日新聞』一八九九（明治三二）年五月二三日

戦争の恐怖を強調する反戦論を、尚江はとらなかつた。戦争への恐怖ゆえに不正に徴兵を忌避した者が、後に熱烈な好戦主義者になる例は多い<sup>③</sup>。尚江の戦争否定の基盤は、利

己心を越えた普遍的倫理に置かれている。

非戦論の要諦は其「不義」にあり、「不利」の如きは抑も末節の末節のみ（二行空）戦争を説くもの往々「国家の御為」を以て權威となす、借問す「国家の御為」とは何ぞや、（略）不時の暴利を穫取せる投機心の鬱勃として抑ゆべからざるものあればなり、故に尤も熱心なる主戦論者―愛国者は宿屋なり、料理屋なり、人夫なり、然れ共是れ豈に宿屋と料理屋と人夫のみならんや、將軍の愛国心も亦た畢竟是れのみ、策士の愛国心も亦た畢竟是れのみ、御用商人の愛国心も亦た畢竟是れのみ、他人の碧血を流がし、貧者の衣服を奪いて、私利を営み私営を買はんと欲する利己心の最大最悪なるもの、吾人は古来之を東西の戦争に見る、

木下尚江「国家最上権を排す」『毎日新聞』一九〇三（明治三六）年九月二一日

尚江にとって戦争は、「他人の碧血を流がし、貧者の衣服を奪」う主戦論者の「利己心」を発露させる社会悪であるがゆえに否定されるべきものである。ゆえに「自衛のための崇高なる戦争」を正当化する論理は無効化される。

実際に行われる戦争では、「戦わせる者」は、自らの手で「自衛」を戦うのではないのだから。侵略があった際に、自らの手で「戦う」ことはあるいは正当化されるかも知れないが、己の安全のために他人を「戦わせる」ことは、決して許されることではない。

徴兵検査に合格して「国家の干城」と煽て揚げられて、文明の人身供御となる者は無論労働者の子弟が尤も多いのである（略）悲惨なる戢兵士、極悪なる戢戦争、軍備拡張など自慢する下等動物は面を上げイ、

木下尚江「惨なる戢兵士」『毎日新聞』一九〇二（明治三五）年六月七日

開戦を議するの人は曰く、是れ国権拡張の為めなり、是れ領土膨大の為めなりと、彼等が為めに取る所の労は只だ『議論』のみ、之に反して戦争に赴くの将士は『死』の苦を犯さざるべからず、

木下尚江「戦争と宗教」『毎日新聞』一九〇三（明治三六）年十一月四日

私は軍人が戦争に熱中して主戦論を唱へることは怪しみませぬ、軍隊は戦争の為に造られた器械でありますから。政治家が主戦論を唱へることは。只憐れに思ふばかりであります、彼等は選挙の為に、ワザと粧ふて世間の機嫌を取る為めでありすから。

木下尚江「戦争の影」『社会主義』一九〇四（明治三七）年三月三日

戦争を賛美し、愛国心を唱道する者同士が「戦う」のが戦争であるならば、それは「不義」とは呼べないかもしれない。そうではなく、戦争で利益を得る自称愛国者が、自分以外の国民を「戦わせる」のが戦争の本質であるがゆえに、すべての戦争は「不義」なのである。

三 対象―「戦わさせられる者」ではなく、「戦わせる者」に向けて

「勿論、我々労働者は社会主義の空論を排斥するのである、非戦論なんて云ふ書生論に巻き込まれるものとは違ふのである、我々鍛工かぢこうの多数は現に鉄砲を造り軍艦を造つて飯を食つて居るものである」

『火の柱』(四十九) 一九〇四年二月一九日

作中の主戦論者による、非戦論への反論の一節である。尚江は「誰に向けて」平和を訴えるべきかという問題意識を、常に念頭に置いていた。

露帝は独逸・奥大利両国が平和の目的に反対するに快からず第二回の会議には之を取り除くべしと、然れ共若し独逸をして会議に与らしめずんば是最初より全く無益の企図に過ぎず、

木下尚江「露国皇帝の憤懣(万国平和会議の不結果)」『毎日新聞』一八九九(明治三二)年七月二四日

「平和の目的に反対する」者を排除した平和会議など、「全く無益の企図」に過ぎない。これは一八九九年の万国平和会議のみならず、後世の平和主義者も陥りがちな過ちである。反戦論は、当初からの平和主義者よりもむしろ、戦争容認・肯定論者にむけて説かれなければならぬ。反戦論に立脚する週刊『平民新聞』に発表の場を持っていた尚江が、あえて戦争を容認する『毎日新聞』に反戦小説『火の柱』を連載した要因はそこにあった。

我軍死傷三千、曰く四千と、蟻の如き観衆皆な呼で曰く名誉の戦死、名誉の戦死、独り二三の兵士遙かに之を望み見て悄然耳語して曰く、エラク死ぬなア

木下尚江「無題」『平民新聞』三四号 一九〇四(明治三七)年七月三日

これは尚江が「国民」すべてが権力の犠牲となる「戦わさせられる者」とは見ていなかったことを意味する。権力者のみならず、名もない「国民」もまた、他を犠牲にすることで「戦わせる者」の末座にあずかりうるのである。

「汝は世界の大勢を知らず、又東洋の危機をも識らざるが故に、其の如き可憐の痴語を放つなり」と言はん、ア、是れ海軍大臣山本権兵衛の蓄音器に非ずや、今や四千万の国民は皆な任じて海軍大臣となれり、

木下尚江「軍備宗の迷信」『毎日新聞』一九〇二(明治三五)年二月一五日

「戦わせる者」の多くは、階層の上下はあるにせよ、自ら戦うための知識も技術も経験もない、無力な人間である。だが彼らは、主戦論を主張し、他者を「戦わせる」ことで――あたかも通俗小説の読者のように――本来は決して持つことのできないアイデンティティを擬似的に獲得し、現にある自分自身の悲惨さから一時的に逃避することができるのである。

戦争は只是れ年金に衣食せんとするものゝ賭博なるのみ、(略)彼等は常に吾人を嘲

りて空想の徒と言へり、吾人は寧ろ彼等の実想を解すること能はざるを遺憾となす、  
残陽生（木下尚江）「非軍備論」『毎日新聞』一九〇三（明治三六）年五月一九日

「戦わせる者」すべてが（ほとんどが、ではなく）過剰に持ち合わせている二つの性質がある。恐怖心とロマンティズムである。

吾人は無情冷酷なる政府の警察権によりて無法の禁足を蒙る被害民に向て無限の同情を表すると同時に、此の傲慢臆病なる政府の器械となりて不義の権威を弄する警官等のために気の毒に耐えざるなり、

木下尚江「臆病なる政府」『毎日新聞』一九〇二（明治三五）年三月九日

戦争の實際が国民の間に知れ渡らんことは、今や愛国者の一恐怖となれり、彼等愛国者は「美しき観せ物」としてかつて戦争の歓楽を国民の間に鼓吹せり、而して無邪気なる国民も皆な一の谷合戦、屋島合戦等の古き物語を思ひ浮べて、頗る太平楽に之を謳歌し来りし也

木下尚江「戦争とは何ぞや」『新紀元』一九〇六（明治三九）年九月一〇日

尚江は、戦争そのものがロマンティックだなどと言っているのでは決していない。戦争を「美しき観せ物」であるかのように夢想し、他人にもそう思い込ませたがる愛国者たちのロマンティズムが、「彼等は肉弾として働き肉弾として碎けしに他ならず」（戦争とは何ぞや）という現実の戦争を引き起こす悲惨さを指摘しているのである。このような「愛国者」の精神構造についての類似した認識を、同時代の哲学者ウィリアム・ジェイムズも語っている。

度を越した野望があらゆる愛国心の本質であり、非業の死を迎えるかもしれないという可能性がすべてのロマンスの核心である。軍国主義的な愛国者やロマンティックな精神を持つ者はみな、特に職業軍人階級は、戦争が社会進化における一時的な現象であるかもしれないとは少しも認めようとはしない。

ウィリアム・ジェイムズ「戦争の道德的等価物」（本田理恵訳）所収 スティーヴン・  
O・ロウ編著『ウィリアム・ジェイムズ入門』一九九八 日本教文社

臆病でないのなら、主戦論者は自ら戦場に赴く道を選ぶだろう。あるいは少なくとも沈痛な表情で、己が戦場に行かないことを恥じつつ、戦争の正当性を説くだろう。また、もし彼がリアリストであるならば、声高に景気良く戦争を賛美する労力を、少しでも確実に敵に勝つ方法の模索に向けるだろう。

古典的な反戦論の一つに、主戦論者を強制的に戦場に送るべきだ、という提案がある。

上記の有資格者（引用者注、戦争に賛成した元首・政治家・宗教家をさす）は、戦争継続中、兵卒として召集さるべきものにして、本人の年齢、健康状態を斟酌すべからず。

長谷川如是閑「戦争絶滅受合法案」『我等』一九二九（昭和四）年一月

しかし、長谷川自身が認めているように、こんな法案が、元首や政治家によって採用されること自体がありえないのである。「戦わせる者」たちに、「兵士の代わりに自分が戦場に立つ勇氣を持て」と説くのは、倫理的ではあっても、論理的に実効性ある反戦論にはなり得ない。

ただ戦争に金がかかることや戦争の恐ろしさを訴えて反対するだけでは、軍国主義者の議論には十分に太刀打ちできない。恐怖はスリルとなるのだ。(略)平和主義者は、軍国主義者の審美的・道徳的な見地にもっと深く踏みこんでいくべきである。(略)反軍国主義者は、戦争の規律的な役割に代わるもの、つまり適切な行為とは何なのかを別のやり方で教える道徳的代替物を提案しないかぎり、いつになっても議論の非生産性を認識できない。

ウィリアム・ジェイムズ「戦争の道徳的等価物」

「戦わせる者」たちが持ち合わせていないことが確実な勇氣に期待するのではなく、彼らが確実に持ち合わせている「ロマンス」への憧れに期待すること。それが実効性ある反戦術である。

今回露皇が平和会議を提起したる所以のものは陸軍々費の巨額の要求を謝絶する一時の権略たるに過ぎざるなりと

余輩は之を以て一面の消息を洩らせるものと思ふと同時に又た露国皇帝の胸底深き処に於て平和的希望の美志と温情とを想見せずはあらざるなり(略)

盗児と雖も亦豈に義理人情の為に白玲瓏たる熱涙を流すことなしと言はんや故に余輩は露皇の心事に対して彼此の疑惑を抱くの要を見ず

木下尚江「世界平和に対する日本国民の責任」『毎日新聞』一八九九(明治三二)年三月一日(原文は改行なし)

ゆえに抗議行動や署名運動ではなく、まさに小説ロマンスこそが、主戦論者のロマンティズムに訴えるための、最も適切な道徳的代替物だと尚江は考えたのである。

#### 四 媒体―実際行動ではなく、新聞小説という場で

「ハ、神田の青年会館と申すで非戦論の演説会を」將軍の眉は釣り上がりぬ「怪しからんこと、戦争のことは上御一人の御英断に待つことで、民間の壮士などが彼此申すは不敬極まる、何故内務大臣は之を禁じない―」

『火の柱』(五十八) 一九〇四年二月二九日

現実世界での反戦活動を禁じられた尚江にとって、新聞連載小説『火の柱』を書くという行為が、「非戦論を叫ぶ領分の獲得」であったことはすでに述べた。官憲には演説を中止することはできても、すでに配達されてしまった新聞を一部残らず回収することは困難な

のである。反戦運動家と政商の娘の悲恋物語という形式は、『毎日新聞』を読む主戦論者に反戦論を読ませるための手段であった。

「テロリズム」と規定しうる暴力の種別性を「スペクタクル」という点にまず求めてみよう (Negri and Hardt)。「テロリズム」はスペクタクルの暴力である。なぜならば、それは直接の力の行使ではなく、しばしばわめて局所的で、直接的なダメージをねらった攻撃が、メディアを介することで、国家あるいは世界を揺るがす最大の効果に拡張するからである。たとえばマーシャル・マクルーハンは、赤い旅団によるモロ誘拐事件のさい、プラグを抜き、電灯を消し、回路を切断することでコミュニケーションをシャットアウトすることがテロリズムの効果を遮断することであると提言して波紋を投げかけた。

酒井隆史「攻撃ではなく防衛―暴力批判のためのノート 2 テロリズムとスペクタクルの政治」『現代思想』二〇〇三(平成一五)年三月

テロリズムの本質は暴力ではなく、メディアを介することで人心に訴えかけることにある。

ならば、あの二〇〇一年九月一日の世界貿易センタービル事件のときは、テロとしてはむしろ「失敗」だったのではないだろうか。あれほど夥しい犠牲者を出しておきながら、それがメディアを通して報道された際の人々の反応は、「ハリウッド映画のようだ」という程度でしかなく、テロリストが生命と引き換えに訴えたかったであろうイスラムの理念なるものは、非イスラム圏の誰にも共感を得られなかったのである。

或は正当防衛の理論により、或は復讐の激情により暗殺は古来世界の史上に幾多血痕の汚点を残した、然れども不正の手段の結果は、常に只だ其の悪敵に意外の寿命を恩賜するの外、何の得たる所も無い、

木下尚江「暗殺」『新生活』一九〇八(明治四一)年三月五日

むしろ、衝突寸前に旅客機を着陸させ、「我々イスラム教徒はアメリカと異なり、主義のために無辜の血を流すことはしない」とでも訴えていたとすれば、それははるかに衝撃的なスペクタクルを全世界の人々に与えたことだろう。それは、「ハリウッド映画のような」通俗的世界観からは決して出てくるはずがない、想像を絶する光景だからだ。それで初めてテロは「成功」したといえる。

とはいえ、ハイジャック自体は暴力的行為であり、たとえ一人の人命をも奪わずとも憎むべき犯罪であることには変わりはない。それでは生身の人間ではなく、メディアそのものを占拠するテロならばどうか。

是れ軍隊の戦争にも非ず政府の戦争にも非ず、国家の戦争にも非ず国民の戦争にも非ずして、実に新聞紙の戦争なり、

木下尚江『言論自由難』『新紀元』二号 一九〇五(明治三八)年二月一〇日

という状況認識<sup>④</sup>のもとに、メディア(新聞)の一面<sup>⑤</sup>(連載小説)を利用することで、



主戦論者に「直接的なダメージ」を伴わないスペクタクルを与えようとするところに、『火の柱』の戦術性があった。主戦論者は戦争に関心を寄せ続ける限り、戦争記事を載せた新聞を読むことを「シャットアウト」できないからである。

五、主題―戦争の悲惨さではなく、反戦の痛快さを訴える

「最早、虚無党の御世話になる必要はないよ、クルツプの男色を暴いてやれば、忽ち頓死するし、伊太利大蔵大臣の収賄を素破抜いてやれば直に自殺するしサ、爆裂弾よりも筆のほうが余ツ程力があるよ、僕は彼奴等の案外道義心の豊かなのに近来ヒドク敬服して居るのだ」

『火の柱』(十七) 一九〇四年一月十八日

『火の柱』を初めとする木下尚江の作品は従来、「通俗的」として低い評価を受けてきた。

実感主義的な日本自然主義の小説に対して、木下尚江の『火の柱』を中村(真一郎)氏は「抽象的な視野の下に作り出された架空の『現実像』として賞賛するが、この長大な小説をどんな風に読んでみても、意味ある文学作品と考えることは、ぼくには不可能だ。

篠田一士『全体小説』について『文学界』一九六二(昭和三七)年五月

著名人の実名(もしくはそれに近い仮名)での登場、連載直前または連載中に起きた事件の作品への反映、類型化された人物描写などが、日常的リアリズムに固着する純文学的価値観の反発を買ってきた。本論では、それらを「通俗性」ではなく、「術」(戦略性)として読みなおすことを試みる。

その(尚江の)演説には甚だ多くの滑稽がある。君は演壇に立って自在に群衆を笑はせるの術を知って居る。其術たるや、実に巧妙を極めたもので、人をして殆ど其術たることを感ぜしめぬ(略)君の本色は人を笑はせる為に在るのではなく、人を酔はしむる後の誠に在らねばならぬ。

枯川生(堺利彦)「同志の面影 木下尚江君」週刊『平民新聞』一九〇三(明治三六)年二月二〇日

「人をして殆ど其術たるを感ぜしめぬ」尚江の術がいかなる効果を博したかについては、以下のような同時代の、決して非戦論者ではない批評家による好意的批評がある。

小説と言へば何も恋愛や情死や探偵に限った訳はない、我々は昔から此種の小説に接せんことを望んで居たので、今の時余り一方に熱し狂ったウワライキネーシヨンの頭には之を一読するのも不可ではあるまい

無署名「出版界 火の柱 木下尚江氏著」『新公論』一九〇四(明治三七)年五月

この頃の小説にて、一寸異彩を放てるは、木下尚江氏の著せる火の柱なり。傑作とに

はあらねど、社会主義を唱ふる論客にして、専門の小説家ならぬ人の処女作としては、まづよく出来た方也（略）殊に余情ありて痛快なること甚だし。

大町桂月「文芸批評」『太陽』一九〇四（明治三七）年九月

主戦論者であり、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を批判した大町桂月をして、『火の柱』は、「殊に余情ありて痛快なること甚だし」と言わしめた。これは、「戦わせる者」にも通じるだけの通俗性を、この作品が持っていた証拠である。

「痛快」とは、いわゆる純文学の批評にはほとんど使われない言葉である。夏目漱石の『坊っちゃん』（一九〇六）あたりを数少ない例外として、近代日本文学には「痛快」な作品はほとんどない。むしろ近代日本文学の論理そのものが、小説が「痛快」であることを禁じてきた感がある<sup>⑥</sup>。

一方、戦争は、安全な場所に身を置く主戦論者にとつてはまさに「痛快」なものである。純文学がアイデンティティの喪失の物語だとすれば、戦争はアイデンティティ回復の物語といってもいい。時代は離れるが、そうした主戦論者の精神構造についての太塚英志氏の論考を引用する。

日本で今回の（引用者注 アフガニスタン）戦争に参加したいと考える人々の多くは、戦後の日本が憲法によって戦争放棄をしてきたことで国家として一人前ではない、と主張してきた人たちです。小泉（引用者注 純一郎。当時の総理大臣）がアメリカに「日本の旗を見せる」と言われてすっかりその気になったのも、湾岸戦争の時のように国際社会から笑われたくない、と主張する人が多いのも今回の戦争で「日本」という国ノアイデンティティを回復できると感じているからです。更にそういう人たちは「日本」がアイデンティティを回復できれば、自分もアイデンティティを回復できると感じている類の人だともいえます。

けれど映画の主人公と同一化して、何だか自分が本当の自分を取り戻したと感じていることと、アメリカの本物の「戦争」に参加して（しかも実際に参加するのは自衛隊の人たちです）、つまり他の国の戦争に便乗してアフガニスタンの人々の命を奪うことでアイデンティティを確立した気になるのでは全く意味が違います。アイデンティティの確立の舞台を誰かにお膳立てしてもらうなんて「電波少年」じゃないんだから、と正しく突っ込んであげてはいけません。

太塚英志 『サブカルチャー反戦論』 角川書店 二〇〇一

大塚氏の見解はまさに本論の趣旨と一致する。再三にわたって述べてきたように、主戦論者とは他人を戦わせることで、自分が本来獲得する資格のないアイデンティティを僭称する者たちなのである。ゆえに『火の柱』は、通俗小説を装うことで読者に「痛快」さというエサを与えつつ、以下の女性非戦論者と軍人の見合い場面のように、クライマックスの瞬間にその仮のアイデンティティを暴力的に剥奪するという「突っ込み」をいれるのである。

「軍人の思想は其程に卑劣なものですか」

「何ッ」松島は猛獅の如く躍り上りつ、梅子の胸を捉へて仰けに倒せり「女と思つて赦して置けば増長しやがつて（略）軍人の卑劣とは聞き棄てならぬ一言だ——貴様の大事な篠田の受売だらう、見とれ、篠田の奴も決して安穩に許しては置かぬぞ、貴様等のために帝国軍人の名誉を取れてなるものか（略）復讐——世に出られぬ様にしてやるぞ——」今や心狂いたる軍人の大腕に擁せられたる繊細なる梅子の身は、鷹爪に捉らはれたる雛雀とも言はんか、仮令声を限りに叫べばとて何処よりか援助来たらん、一点の汚点だにも留めたるなき一輪の白梅、あはれ半夜の狂風に空しく泥土に委すらんか。

『火の柱』（五十五） 一九〇四年二月二十六日

通俗的なまでに「ロマンティック」であつた『火の柱』は、日露戦争が勃発してしまつた二月中旬から下旬にかけて、大多数の読者が予想もしなかつたであろう、暴力と流血の場面へ急展開する。

死力を籠めたる細き親指に左眼挟られたる松島は、痛に堪へ得ぬ面、僅に擡げつ——秘密——秘密に——名誉に関はる——早く医者を、内密に——

「名誉ッ？」梅子は突つ立てるまゝ、松島を睨めり「名誉とは何事だ、誰の名誉に関はるのだ、殺人と略奪を稼業とする汝等に、何で人間の名誉があるか、——女性全体の権利と安寧とのために、必ず之を公にして、社会の制裁力を試験せねばなりません」

『火の柱』（五十六） 一九〇四年二月二十七日

明治三十七年二月二十七日、日露戦争開戦から三週間が経過し、そろそろ戦争記事にも飽きて連載小説に目を転じた読者は、おそらく戦争記事以上の衝撃を受けたことだろう。暴力の犠牲となつて血を流したのは、繊細なるヒロインではなくて、猛獅の如き軍人松島大佐の方だったのだから。尚江にとってはこの場面、この台詞を書きたいがための『火の柱』であつたとしても過言ではあるまい。

女性反戦論者との「戦い」に敗れ、「キャツ」と悲鳴をあげて怯える主戦論者を生々しく描くこと。それが『火の柱』が仕掛けた、現実には一滴の血も流すことなく最大のスペクタクルを与える、非暴力テロリズムであつた。

六、課題——「戦わせる者」を糾弾するのではなく、彼らさえも感動させる反戦論を

「力を以つて来るものには、只だ温順を以つて応接する外無いでせう」

『火の柱』（七十二） 一九〇四年三月十八日

同時代の批評によれば、『火の柱』は同時代の幅広い読者に「痛快」さを提供することはできたが、より深い「感動」をあたえることはできなかった。

其巻を経るに及んで失望せりユーゴーの『悲惨』亦其舞台面の変化の急なると人物の多様な点に於て『火の柱』に類似せるものありと雖其終局の一带はさらに是等の舞台と役者とを一括して何物をも余す処なし『火の柱』は此（略）於て失敗せり。

白柳秀湖 「『火の柱』を評す」 『平民新聞』二七号 一九〇四（明治三七）年五月

一五日

その原因の一つとして、尚江が「戦わせる者」と考えた政治家や財閥への、作中でのスキヤンダル捏造をも含めた人格攻撃があると考えられる。たとえば梅子の叔父として登場する政商大洞利八（大倉喜八郎がモデル）の執拗な誹謗中傷は、避戦論者の代表であった伊藤博文への戯画化とならび、反戦の理想を追求した『火の柱』における、最大の汚点といふべきであろう。

「戦わせる者」のスキヤンダルを捏造し、その社会的影響力を失墜させるという方法は、戦争やテロに比べれば確かに魅力的である。しかし、それは相対的な評価であって、スキヤンダルもまた直接的な暴力と同様に不当に人を傷つけるのである。現実に対応するモデルのいない松島大佐への虚構内暴力とは意味が違ふ。

「非暴力による戦争阻止」が反戦小説の理想であるとするならば、スキヤンダル捏造は反戦小説の正しいあり方ではない。

石川「木下は私に、人を感動させるには自分が冷静でなければいかん、と言ってた。それを自分が冷静でなくなつたんだから、をかしかったです」

石川三四郎他 「生きている日本思想史 座談会 大逆事件前後」 『文芸春秋』 一九五〇年二月

尚江自身、以下の回想にみられるように、『火の柱』に完全に満足していたわけではなかった。

私は元政治法律の書生です。文学に就ては全くの無知者です。私が『火の柱』を書いたのは、必竟文学侮辱の精神の発露でした。然かし妙なことには、毎日毎日『火の柱』を書いて居ります間に、私の胸裡に一つの変動が生れました。「出発点」を誤つた、と云ふ一種の懺悔です。早く結末をつけて新たに更めて小説と云ふものを真面目に書いて見たいと云ふ気が動きました。

木下尚江 長編小説刊行会宛て書簡 一九三七（昭和一二）年三月二二日

戦争の現実をあらゆる方面から研究しつくし、虚構内で戦争を阻止していく過程を精緻に描いていくことで、反戦論者のみならず主戦論者にさえも感動をあたえる小説。それが反戦小説の一つの理想形であろう。

戦争は人生の惨禍なり、空しく之を賛美すべからず、故に尤も熱心なる主戦論者と雖も、之を不得已の犠牲となすなり、徒に之を罵倒すべからず、罵倒の為に戦争は遂に一步も退却せざるべければ也、新に此の惨禍より脱れたる日本国民は、此の人生の一大真実に向て厳明正確の批評を加ふべき責任を有す、今こそ戦争文学鼓吹の時機は到来したるなれ、戦争文学とは何ぞや、戦争を因縁となせる人生社会の批判即ち是れ

木下尚江 「戦争文学の募集」 『新紀元』 一九〇六（明治三九）年二月一〇日

いくら罵倒したところで戦争はなくならない。必要なのは、戦争を「厳明正確」に理解

した上で、それを批判しつくす力を持った文学作品である。

『火の柱』中の一社会主義者のように、今日自信を持つて「爆裂弾よりも筆のほうが余ッ程力があるよ」と語れる文学者がいるだろうか。だが、その困難を克服しない限り、「最早、虚無党<sup>デロリスト</sup>の御世話になる必要はない」と言える時代は訪れないであろう。

※本文引用は『毎日新聞 縮刷版』（不二出版）に掲載された、初出『小説 火の柱』に基づき、旧字体は新字体に改め、原文の総ルビは一部省略するなど、表記は一部改めた。

注

①明治三年創刊。明治三六～三七年当時の社長は島田三郎、発行部数は一四〇〇〇部とされ、足尾鉍毒・娼妓自由廃業などの社会問題に意欲的にとりくむ姿勢で知られた（山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局 一九八一 による）。なお、二〇一二現在の『毎日新聞』は当時の『大阪毎日新聞』（当時の発行部数は一〇万部前後）の後身であり、直接の関係はない。

②とはいえ、尚江は演説や新聞社説による非戦論の展開を放棄したわけではなく、『火の柱』連載と並行してそれらに従事していた。参考までに、『火の柱』連載開始から完結に至る反戦運動の流れをまとめておく。

一九〇三（明治三六）年

一〇月一二日 幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三ら、主戦論に転じた『萬朝報』を退社

十一月五日 幸徳・堺・木下尚江ら、平民社を設立。週刊『平民新聞』を創刊。

このころ『毎日新聞』も主戦論に転じる。

尚江、辞表を出すも慰留される

一二月 尚江、『火の柱』の執筆を宣言

一九〇四（明治三七）年

一月一日 『火の柱』、『毎日新聞』に連載開始

一月五日 軍機事項の新聞雑誌掲載禁止

一月一〇日 尚江「予は如何にして社会主義者となりし乎」（『平民新聞』第九号）

一月一四日 神田青年会館にて社会主義大演説会。尚江も参加

一月一七日 『火の柱』に、『平民週報』の会議場面が描かれる

二月八日 日露艦隊の戦端開かれる。『火の柱』に伊藤侯爵のスキヤンダルが描かれる

二月一〇日 ロシアに対して宣戦布告の詔勅が下る

二月二九日 『火の柱』に神田青年会館での社会主義大演説会場面が描かれる

三月二〇日 『火の柱』連載完結

五月一〇日 平民社版『火の柱』初版刊行。

八月一四日 『火の柱』初版二〇〇〇部完売、五〇〇〇部再版（『平民新聞』記事より）

③ 以下にその例をあげる。

ヒトラーは申告、登録しなかっただけでなく、一九一〇年も一一年も一二年も検査をうけなかった（略）彼は二重の罪に問われることになった。兵役忌避者としての罪と、そのうえに罪を逃れるために外国に脱走した罪と。

村瀬興雄『ヒトラー——ナチズムの誕生』誠文堂 一九六二

一九〇四年四月、期限切れ旅券の偽造容疑で、ジュネーブの警察に逮捕されたときは大変であった。この時イタリアの警察に身柄を引き渡された場合、スイス滞在で兵役を逃れていたから、兵役忌避で懲役に処せられることになっていた。(略)この時ムッソリーニ救出のために特に尽力したのはティチノ州の弁護士ジュゼッペ・レンチであった。ロモノ・ヴルピッタ『ムッソリーニ—イタリア人の物語』中公叢書 二〇〇〇

一九六八年の春、ジュニア(引用者注 ジョージ・ウオーカー・ブッシュ。第41代ではなく第43代のアメリカ大統領)は歴史学で単位を得てエール大学を卒業した。(略)「ヴェトナムで一兵卒として歩兵隊に入ることはいらない」と決意したジュニアは、「飛行機の操縦を習おう」と思い、アメリカがヴェトナムで戦っていた時期に、テキサス州空軍に入隊することで兵役の義務を果たすことを選んだのだ。(略)後にブッシュは、自らのことを三人称でこう語った。

「ええ、たしかに彼が歩兵になるのを避けようとしたと言えないことはないだろうが、私としてはパイロットになる機会があったら絶対になろうと思っていたから……」

J・H・ハートフィールド『幸運なる二世 ジョージ・ブッシュの真実』二宮千寿子他訳 青山出版社 二〇〇一

④ 大江志乃夫『世界史としての日露戦争』(立風書房 二〇〇二)は、一九〇三(明治三十六)年六月のクロパトキン訪日という「唯一ともいうべきこの好機」を桂首相・小村外相らが「無為に逸してしまった」経緯を指摘し、「日露開戦は両国にとつて避けることのできた不必要な政治的選択であった」と結論している。『火の柱』連載開始時点ではすでに時期を逃していたかもしれないせよ、新聞の反戦世論形成による戦争回避という方法自体は、必ずしも絵空事ではなかったと思われる。

⑤ 当時の『毎日新聞』は六面構成であり、『火の柱』は社説と同じ一面に掲載されていた。

⑥ こうした自然主義的な文学観に対して、漱石・尚江の理想主義を評価した同時代評に、田岡嶺雲の「作家ならざる二小説家」(『天鼓』一九〇五(明治三八)年五月)がある。

今日の作家概ね皆思想渴れ、其筆荒びて、文壇寂寞を極むるのに際り、二個の客星の突如として天の一方に現れ、煌々として異彩を放つ者あり、(略)他の群小説家を推倒して、今の浅俗浮靡なる所謂写真小説以外に一新生面を拓けり、(略)曰く夏目漱石氏、曰く木下尚江氏。(略)氏の筆は明快なり、奔放なり、雄渾なり、熱烈なり、丈夫的也(略)譬へば夏目氏の文は深淵の如く其深きを以て勝り、木下氏の文は飛瀑の如く其勢ひを以て勝る

## 第八章 木下尚江『良人の自白』論——非戦論における「公」と「私」

### 一 戦争下の「公論」と「私情」

「諸君、今両国政府が急ぎつゝある日露戦争に対して吾人は全然反対せねばならぬ、特に日本人の一人として絶対的に反対の意を明白にせねばならぬ」(木下尚江『良人の

自白 続編』(十八の二) 『木下尚江全集』第三卷 四三五頁 『毎日新聞』一九

〇六(明治三九)年四月七日掲載<sup>①</sup>

「日本人の一人として」戦争に反対しなければならぬ、という論理は、一見奇妙に見える。戦争とは「公」の事業であり、それに逆らうことは(善悪は別として)「私情」にすぎない、というのが一般の通念だからである。

魯人、君に従ひて戦ひ、三たび戦いて三たび北ぐ。仲尼其の故を問ふ。対へて曰く、

我に老父有り、身死せば之を養ふもの莫からむ、と。仲尼以て孝と為し、挙げて之を上

せり、(略)仲尼賞して魯民降北を易んず。上下の利、是の若く其れ異なり(略)

古者蒼頡の書を作るや、自ら營する者之を私と謂ひ、私に背く之を公と謂ふ。公私の相背くや、乃ち蒼頡固より以に之を知る。

『韓非子』五蠹第四十九 竹内照夫訳注 『新釈漢文大系12』 明治書院 一九六四

こうした戦争観は古今東西を問わず認められており、明治期の日本も例外ではない。

たとえば一八八二(明治一五)年の軍人勅諭では、「一 軍人は信義を重んずへし(略)公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬ」と、軍人の信義は「私情」ではなく「公道」に基づくべきであることが明示されている。

また教育勅語(一八九〇)中の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」の一節も、井上哲次郎の注釈によれば、「若シ今日外寇アラバ、臣民タルモノハ、一個ノ私ヲ以テ妄リニ事ヲ挙グベキニアラズ。唯々徴兵ノ発令ニ従ヒテ(略)決シテ逃竄シテ公事ニ赴クコトヲ避クベキニアラズ」(『教育勅語衍義』一八九一)と、軍人のみならず「臣民」一般に「公」の「私」への優越という道德律を要求している。

そして福沢諭吉は、「瘦我慢の説」(一九〇一公刊)で、「忠君愛国の文字は哲学流に解すれば純平たる人類の私情なれども(略)哲学の私情は立国の公道にして(略)自国の衰頹に際し、敵に対して固より勝算なき場合にても、千辛万苦、力のあらん限りを尽し(略)」

死を決するは立国の公道にして、国民が国に報ずるの義務と称する可きものなり。即ち俗に云ふ瘦我慢」と、「公道」を上からの強要ではなく、国民自らが自発的に守るべき「瘦我慢」と定義している。ここで注意すべきなのは、在野の知識人である福沢が、政府を批判するための論理として「公道」「国民」を持ち出しているという点である。

私人が「公」の論理を演じることで他を「非国民」と攻撃する風潮は、「私」の領域であるべき文学の領域にも及んでいった。三宅雪嶺・大町桂月・高山樗牛らによる国粹主義文学論がそれである。

今の小説の最も売行好きものと雖も、其部数三千を出でずと云ふ。(略)是即ち今の小説が国民的ならざるの一証なり(略)日本国民は忠孝義勇を以て人道の大本となす、然るに写真小説は一も君父を言はざるなり(略)我国家が国命を懸けて東洋の平和を争いし時、彼等は其恋愛談に苦心するを以て文士の本文を知れりとなしたりき(略)畢竟非国民的文学なればなり。

高山樗牛「非国民的小説を難ず」『太陽』一八九八年四月

こうした徴兵・戦争を正当化する「公」の論理に対して、当時の非戦論者たちはどこに抵抗の基盤を見出したのであろうか。

#### ①与謝野晶子 「ひらきぶみ」

私が弟への手紙のはしへ書きつけやり候歌、なになれば悪く候にや。あれは歌に候。この国に生れ候私達は、この国を愛で候こと誰にか劣り候べき。(略)平民新聞とやらの人達の御議論などひと言ききて身ぶるひ致し候。さればとて少女と申す者誰も

戦争いくさざらひに候(『明星』一九〇四年一月)

#### ②内村鑑三 「戦争廃止論」

余は日露非開戦論者である計りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない。(『万朝報』一九〇三年六月三〇日)

#### ③幸徳秋水 「吾人は飽くまで戦争を非認す」

真理の為に、正義の為に、天下万生の利福の為に、戦争防止を絶叫すべきの時は来れり。(週刊『平民新聞』一九〇四年一月一七日)

#### ④木下尚江 「国家最上権を排す」

非戦論の要諦は其「不義」にあり、「不利」の如きは抑も末節の末節のみ、(略)

他人の碧血を流がし、貧者の衣食を奪いて、私利を営み私栄を買はんと欲する利己心の最大最悪なるもの、吾人は古来之を東西の戦争に見る、而して之を掩護して曰く、ア、是れ国家の御為なりと、迷惑なるものは豈に真に国家に非ずや(『毎日新聞』一九〇三年九月二一日)

与謝野晶子、内村鑑三、幸徳秋水が日露戦争に際して非戦論を唱えたことは、歴史教科書などを通して一般に知られている。本論があえて教科書が教えない非戦論者である木下



尚江②に着目したのは、彼が前三者と異なり、衆議院議員選挙と新聞小説連載という、「公」と「私」双方の極致から同時に非戦論を訴えたという独自性のゆえにである。

今や日露戦争の苦痛は国民をして普通選挙の必要を自覚せしめぬ、(略)帝国主義の大敵は普通選挙なり、無権利の賤民多からずんば資本家政治は成効せざる也、軍隊政治は成効せざる也

衆議院議員候補者 木下尚江 「宣言書」 『直言』一九〇五年五月一日

收穫も済んで先づ一休みと云ふ時分から戦争の風説は日々に高くなつて行く、(略)

鎮守の杜へは、何卒戦争の起らぬやうに、何卒我子の戦争に行かぬやうにと、夜更けて参詣するものが近頃少くないとの噂、

『良人の自白 続篇』(二十七の二) 一九〇六年五月二〇日

知識人と庶民、あるいは政治と文学の両方の言葉で、木下は己の非戦論を語ろうとしたことがうかがえる。さらに、その小説『良人の自白』の中でも、地主階級の出身であり、

帝国大学出のエリート弁護士でもある白井俊三と、その小作人であり、兄を軍隊で苛め殺

された恨みを持つ野間與三郎(與三)という、二人の対照的な非戦論者を主人公にすること、  
「公」と「私」の葛藤の中での非戦論の多様性を描き出すことを試みている。同作品に描かれた四種類の非戦論の大づかみな見取り図を描くと、ほぼ以下ようになる。

- ① 「私」的・非戦論(私↓公) 上中下篇の野間與三郎
- ② 「公」的・非戦論(公↓私) 上中下篇の白井俊三
- ③ 「公」を横断する非戦論(公↓公) 続篇の俊三
- ④ 「私」を問い直す非戦論(私↓私) 続篇の與三

本論の目的は、『良人の自白』の分析を通して、この四種類の非戦論の相違とその有効性を明らかにすることにある。

### 三 「私」的・非戦論—素朴厭戦感情の限界

「—與三や—手前は、モウ兵隊などに行くなよ、—虐め殺ろされちや堪らねエでな」  
「ウム、行きやしねエよ、心配するにや及ばねエよ」

と與三は耳元近く口を寄せたが、最早老父は目を閉ぢて夢現

『良人の自白 上篇』(六の三) 一九〇四年八月二九日

『良人の自白 上篇』で語られる與三の告訴をめぐる挿話は、あたかも冒頭に引用した韓非子の寓話を思わせる。すなわち、戦争下における公論と私情の対立という主題である。

「目の前に老父<sup>おやち</sup>が死にかけて居るじや無いか」

「仮令老父が死にかゝつて居ようとも、法律を犯して可いと云ふことは無かるう」

「煩<sup>うる</sup>せいッ」

と、ギリリ巨眼を光らせて、與三は欄干へ半身を乗り出した、

「法律々々ツて勿体振るが、「法律」が薬一服でも持つて来た例があるだか」

『良人の自白』上篇（十九の四） 一九〇四年一〇月一三日

よく知られているように、これと類似した家族至上主義から戦争を批判したのが、与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」であった。

「君死にたまふこと勿れ」に対する大町桂月の「乱臣也、賊子也」という批判と、与謝野の反論「ひらきぶみ」はよく知られている。だが、もう一人、「君死にたまふこと勿れ」に憤慨し、そのパロディまでも創作した小説家がいたことはあまり知られていない。

プラットフォーム

広津柳浪の「昇降場」（一九〇五）<sup>③</sup>がそれである。同作品は新宿駅のプラットフォームで、戦地に向かう兵士を見送る婦人たちの言動を、女性の一人称視点で語っている。

「兄さん、貴方は死んでくれちゃいやすよ。決して死ぬんじゃありませんよ。貴方は普通の兵士ですよ。戦争の時、死ぬ為に、平生から扶持を受けてる人達とは違ってよ。兄さんは自分から好んで、」

強い咳払いを一つ、態とか三つまで続けて、其女の方の言葉を紛らわそうとしたのは、其兄上らしい三十近い兵士さんでした。それで、其兵士の顔には、他の人へ羞しい様な色が溢れて、妹さんを見据えてお居での眼は、何様に迷惑そうに見られたでしょう。

「もう可いから、彼方へ御行で……お前の云った事は、既う充分解つてる。其処を退いたら可いだらう。邪魔だよ、何時までも一人で、其処を占領しているのは。」

広津柳浪 「昇降場」 『柳浪叢書 前編』 博文館 一九〇九 引用は『日本平和論大系 5 反戦平和文芸集』 日本図書センター 一九九三 による

この与謝野晶子を思わせる裕福そうな若い女性に、乳吞児を抱いた百姓のお神さんの、「お前さんが戦死さっしやつても、日本中の人の為だ思つて、私諦めるだからね」という発言が対置される。居合わせた人々の同情は後者に傾き、語り手は前の女性に嫌悪を抱く。悪意に満ちたパロディとはいえ、この作品が与謝野晶子への的確な批判たりえている理由は、「公」の場で、私情である「君死にたまふこと勿れ」というメッセージを送られた側の羞恥と困惑を描き出している点である<sup>④</sup>。軍隊という「公」の場にあつては、周囲から平和主義者・危険思想家の縁者として見られることは決してプラスにはならない。こうした配慮を全く欠いている点、「君死にたまふこと勿れ」の非戦論は、しょせん私情であり内輪の論理にすぎないと批判される余地を残している<sup>⑤</sup>。

また、戦争の主体を「すめらみこと」に置くことは、果たして歴史的事実に照らして妥

当だったのであろうか。

議遂に決するや、夕刻内廷に入りたまひて後、左右を顧みて宣はく、今回の戦は朕が志にあらず、然れども事既に茲に至る、之れを如何ともすべからざるなりと、(略)是れより天皇、宸衷を悩ましたまふこと殊に甚しく、夜々寝に入りたまふも、眠安らかなる能はず、朝夕の膳御亦多く旨味を覚えたまはず、日を経て頗る健康を害ひたまふに至ると云ふ

宮内庁篇 『明治天皇紀』 明治三七(一九〇四)年二月四日 吉川弘文館

この記述を信用する限り、明治天皇は(私情としては)厭戦論者だったのであり、開戦の決断は健康を損なわせる程に苦悩させられていた。宣戦の詔勅が天皇の名において発せられた以上、あくまでも私的厭戦論者であつて公的非戦論者ではないことは確かだが、それは自らの言説を「あれは歌に候」と私的領域に逃避した与謝野にもあてはまることであり、一方がもう一方を非難するのは正当ではない。

最高権威である天皇に罵声を浴びせてことたれりとすることは、一見痛快で英雄的に見えるが、それは平和実現に結びつかないのみならず、あらゆる「公」の否定、すなわち無政府主義とテロをもたらす恐れのある思想なのである。

六月二十二日諾威皇帝の戴冠式に際し、瑞典皇帝を暗殺せんと陰謀発覚したりと伝ふ、吾人は無政府党の実行手段に向て絶対的反対の意見を表する者也、之を無政府党の立場より観ずるも、此の如き手段は偶々以て被害の皇帝に世界の同情を寄せしむるに過ぎざるを思へ

木下尚江「無政府党に反省せよ」 『新紀元』 一九〇六年七月一〇日

私情だけに依拠する厭戦論は、無下に否定されるべきものではないにせよ、公権力を動かすことはできない。自身も法律家(弁護士)であつた木下はそう考えたがゆえに、以下のように與三の私情論を裁いている。

検事は咳払いしながら、衣紋を正して立ち上がった(略)、

「法律上の威信を維持する為に一言判事等閣下まで御注意したいと思ふ、即ち此の被告が国家の法律、社会の秩序と言ふものを、眼中に置いて居ないことである、被告は老父の病気の為めには法律を破つても差支無いと云ふが如き口吻を漏らして居る、一寸聞けば非常な孝子の様であるが、乍併今日法治主義の国家に於ては、左様な古代的倫理を容れることは出来ない、若し之を寛大に処するならば、法治的秩序は直に破壊せられて、恐るべき無政府主義の天地となるのである」

『良人の自白』上篇 (十九の四) 一九〇四年一〇月一三日

そして、与謝野が平民新聞の非戦論に「身ぶるひ」したように、與三は白井俊三からの弁護の申し出を拒絶する。

「如何だ、野間、白井弁護士に弁護を依頼するか（略）白井弁護士が好意を以て彼言はれるのだから、弁護して貰ったらば可からう」（略）

「イヤでい、穢らしいやい、（略）其も基は誰の為めだい」と言ひながら與三は向き返つて俊三の面を睨んだ、

「手前達の為めだ、老父も老母も手前達親子に殺されただい、此の両眼の黒い間は決して忘れねいから、然う思へー竹馬の友だと？笑はせやがらア、成程小供の時にや一緒に遊んだこともあるが、成長おほきくなつてからア地主と小作人だい、生涯の敵同士だい」

『良人の自白 上篇』（十九の五） 一九〇四年一〇月一四日

同じように、『平民新聞』（正確にはその後継紙『直言』）は、一九〇五年四月二三日の婦人号（前面緑刷り）で、「君死にたまふことなかれ」を掲載し、これを評価しようとした。同号の巻頭論文「醒めよ、婦人」で木下は、社会主義者への女性の偏見を指摘しつつ、彼女らが「私」を問い直すことを期待している。

諸君にして『社会党の如き国賊奸物と握手するを恥づ』と云はゞ、吾人は諸君を追ひ廻して強いて之を苦しむることを為さざるべし、要は諸君の自覚に在也

木下尚江 「醒めよ、婦人」 『直言』 一九〇五年四月二三日

#### 四 「公」的 非戦論——「公を演じる私」の陥穽

新聞は（略）法学士白井俊三の不忠不義の思想の履歴まで書き加へて、彼が先年大学を卒業する際、名誉なる恩賜の時計を拝受することを避けるために、急に其の儀式の席を逃れ去つたる旧き事件までを穿鑿せんさくし（略）弁護士時代の旧悪を有ること無いこと書き擲つて、此の挙国一致して世界の人道と、東洋の平和とのために露国膺懲ようちやうちやうの聖軍を催ふすの時に当りて、斯かる非国家的人非人を出したことは、我が信州の為に千歳拭ふべからざるの大汚辱であると激論したのである

『良人の自白 続編』（十八の二） 一九〇六年四月七日

『良人の自白』のもう一人の主人公である白井俊三の人格形成に、内村鑑三の不敬事件が影響をあたえていることは、次の記述からもうかがえる。

「然う、明治二十三年——我れ十六歳の青春——昨年の春憲法は発布せられ此の冬帝國議會始めて開かる、議會開くに先ちて教育勅語が出た、文部大臣の訓令が出た、——衆議院に於て民党と政府と衝突した、民党の中堅たる土佐の自由党は変節した、「不敬事件」は高等学校の講堂に演ぜられた」

『良人の自白 上篇』（十の六） 一九〇四年九月六日

しかし、これは作者である木下尚江自身が内村鑑三に賛同していたことを意味するわけではない<sup>⑥</sup>。

内村にとって戦争は「人を殺すこと」ゆえに「大罪悪」であり、木下にとってのそれは「他人の碧血を流す」すゆえに「利己心の最大最悪なるもの」であった。同じように見えるが、この違いは重大である。前者にあつては罪の主体は戦場で戦う兵士であり、後者にあつては戦争から利益を得る銃後の主戦論者である。そして、兵士に「人を殺すことは大罪悪である」と呼びかける非戦論は、究極的には、「無抵抗を貫いて戦死せよ」という極論にいきついてしまうからである。

可戦論者の戦死は戦争廃止のためには何んの役にも立たない、然れども戦争を忌み嫌らい、之に対して何の趣味をも待たざる者が、(略)敵弾の的となりて戦場に彼の平和の生涯を終るに及んで、茲に始めて人類の罪惡の一部分は贖われ、終局の世界の平和は其れ丈け此世に近づけられるのである、(略)近けよ両国の平和主義者よ、行いて他人の冒さざる危険を冒せよ、行いて汝等の忌み嫌ふ所の戦争の犠牲となりて殲れよ、

内村鑑三 「非戦主義者の戦死」 『聖書之研究』一九〇四年一〇月

人類のためと称して、兵士に死を強要することによって実現される「終局の平和」とは果たして何であろうか。それは結局、東洋平和のためと称して日露戦争を賛美する主戦論者と、非人道的であるという点で大差ないのではないか<sup>⑦</sup>。

人間の努力ではなく、神の裁きを待つて始めて実現されるような「平和」<sup>⑧</sup>ならば、それは幸徳や木下がめざした平和とは無関係であると言わざるをえない。神(国家を超えた「公」)の代理人であるかのように語る内村の非戦論には、「私」が欠けている。私心を持たないという意味ではなく、現実の世界で戦争に対抗するために、この「私」は何をなすべきか、という主体性が欠けているのである。内村が兵役を拒否しようとした斎藤宗次郎に反意を迫り、荒畑寒村ら非戦論者を失望させたという挿話は、そのことを端的に示している。

禪師は微笑んだ「耶蘇の聖書と云ふものを先年一寸見たことがあつたがな、耶蘇と云ふ男流石に年が若かつたわい、老衲の見たでは彼奴の心の蓮花が、未だ一葉閉ちて居たようじや、(略)じやから彼奴の遣り工合が何処やら肌剛くて垢抜けがしないじや、其処へ行くと釈迦の方が十段も百段も通人じやつたぞい」

『良人の自白 中篇』(六の三) 一九〇五年四月一五日

木下自身も基督教徒ではあるが、彼は社会主義運動家と小説家という経験によって、「私」の中の「公」(神)を相対化する視線を培ってきた。現実世界に生きる民衆のために行動し

ない限り、いかなる理想主義も「公を演じる私」に陥る危険に気づいていた。

『良人の自白 下篇』において、與三は一年半の獄中生活を終え、俊三は挫折と周囲の無理解による墮落の日々への悔恨を経て再会し、ついに長年の確執から解放される。

『地主と小作人』！與三さん、何と云ふ不愉快な言葉でせう、(略)土地の私有！神の盗賊です、僕は嘗て思ふた、若し父祖伝来の地主の子が、其の山と森と田畠とを挙げて、之れを天と人にと返へし、文明の知識と器械とを利用して、昨日の小作人と同一の労働を負担するならば、其処に如何に美<sup>うるは</sup>しき偉大の結果が出現することであらうかと、其は地主と小作人とが互に昨日の猜忌嫉妬食欲の悪念より救い出される時です」

『良人の自白 下篇』(二十五の九) 一九〇五年一〇月一四日

平和は神の手ではなく、人間の努力と自己犠牲によって実現されるべきだというのが、木下の「基督教社会主義」であった。

## 五 「公」を横断する非戦論―神と国家を超えて

「あの漢学の教員の生垣先生が怒りなすたゞよ、「日本は神の国と言はれてあるものを、国賊同然の不届漢」と云ふだ、私は最眞のお前様だ、(略)心配したゞが、今以てお前様が斯うして達者で、評判の良い所を見ると、生垣先生の「神の国」も怪しいものだ」  
『良人の自白 下篇』(七の三) 一九〇五年七月一九日

戦争を阻止するには、それを正当化する神や国家という「公」を越えねばならない。無神論者であった幸徳秋水を指導者とする平民社は(木下らキリスト教徒も含めて)そうした認識を共有し、敵国ロシアをはじめとする世界の平和主義者と連帯し、一国の枠を超えた平和主義を実践した。

『良人の自白』でも、父祖伝来の農地を與三ら小作人に託した俊三は、その理想を実現するためアメリカやロシアに赴き、各国で反戦を訴える。自然主義リアリズムに慣れた読者の眼には「不自然」「通俗的」と映ったにせよ、木下には身近なモデルが存在したのである。

君は明日の午後を以て欧米行の途に上らんとす、举世、戦争を説いて是れ日も足らざるの時、悠然として君を送る、(略)所謂「帝国」の破壊は社会主義の目的なり、汝等帝王が偽善虚偽を以て嫉妬猜疑排斥を事とするの時、吾人は同胞の義と愛とを以て世界の人類と握手せん、我等の同志は露西亞にも在り、

木下尚江「送片山潜君」 『毎日新聞』一九〇三年十二月二八日

片山潜の欧米行から三ヵ月後(日露開戦からは一ヶ月後)、幸徳秋水ら平民社は露国社会党に宛てた公開状を発表した。

今や日露両国の政府は各其帝國的野望を達せんが為めに、慢に兵火の端を開けり、然れども社会主義者の眼中には人種の別なく地域の別なく、国籍の別なし、諸君と我等とは同志なり、(略) 諸君と我等は虚無党に非ず、テロリストに非ず、社会民主党也、社会主義者は万国平和の思想を奉持す、

「与露国社会党書」 『平民新聞』 一九〇四年三月一三日

しかし、ロシアの社会主義者すべてが平民社の呼びかけに賛同したわけではなかった。

インターナショナルのアムステルダム大会の壇上でのブレハーノフと片山潜の握手は、全人類に向かって社会主義運動の救いの原理を印象深く宣言したものであった。(略) 二人の演説に注意を向ければ、日露戦争に対する二人の態度には若干の本質的な差異がある(略) 片山が「交戦国社会主義者の結合した闘争を通ずる平和」を主張したのに対して、ブレハーノフは端的に自らの敗戦主義(「ロシアの敗北を通ずるロシア革命を」)を表明したのである。これは際立つた対照であった。

ボリシェヴィキの機関紙『ペリョート』は、その創刊時より、もつとも遠慮のない、無限定的な敗戦主義を主張した。一九〇五年一月一四(一)日付の第二号には、レーニンの有名な論文「旅順の陥落」が発表された。(略) レーニンは、日露戦争の「偉大な革命的役割」というような表現をあえて用い、これを論文の中でくりかえした。そうするとき彼はこの戦争に抗議する日本の社会主義者の存在を無視した。

和田春樹 「日露戦争中の日露社会主義者の連帯」 『史潮』 一九八〇年

国際協調という美名の下での困難を、木下は次のように作中に露骨に描いている。

満洲に於ける日露両国の衝突と云ふことが、世界の注目を惹くやうになつて来たので此頃北米合衆国シカゴ市に於て、各国から来て居る無政府党や革命党や社会党の集会が催ふされた、(略) 差し迫つて居る日露戦争其物に就ては、独り露西亞の革命黨員のみは、露西亞革命の目的の為に寧ろ熱心に之を歓迎すると絶叫したのである、日本と云ふ東洋の好戦国民は必ず愚かにも其の一切を犠牲に供して露西亞政府を攻撃して呉れるに相違無い、露西亞に革命を成就する為めには、此の天與の好機会を忘れてはならぬと言ふのであつた、

『良人の自白 続編』(十八の一) 一九〇六年四月六日

戦争を革命遂行のための手段として利用しようとする自称社会主義者は、ロシア側のみならず日本にも存在した。

吾人は社会主義者なり。恐くは其の信仰の度に於て万人の後へにあらざるべし。故に最も今日の社会主義者を尊敬す。安部磯雄氏といひ、木下尚江氏といひ、片山潜氏といひ、西川光次郎氏といひ、幸徳秋水氏といひ(略) 氏等が其主義の為に日露開戦に反対せしと報ぜらるゝに至つては。吾人は他日の立場の為に、而して目下においては、

社会主義者にして亦日露開戦論者たる位置の為に、実到大問題たるの感あり。

北輝次郎「咄、非開戦を云ふ者」『佐渡新聞』一九〇三年一月三十一日 引用は

『北一輝著作集 Ⅲ』みすず書房 一九七二 により、傍点はすべて省略した

平民社（安部・木下・片山・西川・幸徳）は、日露戦争への反対を表明することによって、自らがレーニンや北一輝とは違うタイプの社会主義者であることを証明した。レーニンや北一輝には決して口にできない発言を、木下は『良人の自白』の俊三に叫ばせている。

彼曰く「吾人は地上一切の権威を否認する点に於て全然露西亜の親友に同意を表することを憚らない（略）去れど其の事情と経路の如何様にあらうとも、罪悪は到底罪悪である、（略）仮令此の戦争が露西亜の専制を打撃する上に、又た日本の国民に自覚を興ふる上に於て、少なからぬ利益ありとするも、吾人は断然之れに反対せねばならぬ」

『良人の自白 続編』（十八の二） 一九〇六年四月七日

しかしその結果は、「日本の勝利は、一方で日本と朝鮮の民衆の不幸をもたらし、他方で、ロシアにおいては革命と容易にした。この複雑な事態の中では、社会主義者の連帯は、実際には無力な夢想にすぎなかった」（前出和田論）。国際連帯主義という公論は、自国の革命を最優先し、そのためには暴力も戦争も厭わない「公を演じる私」の論理によつてはね返されたのである。

六 「私」を問い直す非戦論——全ての主戦論は「公を演じる私」である

露西亜は満洲から其手を引かぬと言ひ、日本は如何にしても露西亜の勢力を満洲から逐ひ払はねばならぬと言ふのである、剛欲なる熊の手を断ち切つて日本の名誉を発揮する為には如何なる犠牲をも厭はぬと言ふのが日々に高まる新聞紙の調子である、（略）

宗七が（略）役場の机の上で議論する所を聞くと、日本は決して他国を侵略する為めに戦争をするのでは無い、畢竟東洋百年の平和の為に義侠心で闘ふのだそう、（略）若し自分も貧乏人の子供に生まれて、小さい時から野良仕事に鍛はれて居たものならば、急渡徴兵検査にも合格して居たであろうし、従て此の千載一遇の大戦争にも出陣して、屍を満洲の野辺に晒して大にしては天皇陛下に忠義を尽くし、小にしては一家一門の光栄を歴史の表に輝かすことが出来るのだものを、実に残念至極だと言ふのである、

『良人の自白 続編』（十八の二） 一九〇六年四月六日

幸徳・片山の、「公」を横断する非戦論の挫折を間近に見た木下は、最も初歩的な非戦論に立ち返る。敵国の非戦論者と連帯する前に、自国の主戦論者と対話し（罵倒ではなく）、説得するという方法である。

ここで「公を演じる私」の典型として登場する宗七という官吏は、決して主戦論者実像以上におとした戯画ではない。口先で戦争を賛美しながら、自分が戦場に出るのだけは避けようとする主戦論者の典型として、次の二人の知識人をあげる。



太陽にある大塚夫人の戦争の新体詩を見よ、無学の老卒が一杯機嫌で作れる阿呆陀羅經の如し女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の従軍行杯はうまいものだ

野村伝四宛書簡 一九〇四年六月三日 岩波書店『漱石全集』 第二十七巻より

先生から徴兵避忌は国民の恥辱である、此国民の義務たる義務を遂行しなくては忠良の日本国民ではないと云う様な意味の話を聞かされた時、長男がスト立上つて「ダツテ先生、私のお父さんは北海道へ行って徴兵をのがれたのですがお父さんは日本国民ではないのでしやうか」と先生に質問を浴びせた。(略)父が北海道に転籍して徴兵避忌をしたなぞ誰が教へたものか実際驚か(さ)れる。

『夏目博士座談』 『高田日報』一九一一年六月二〇日 岩波書店『漱石全集』第三十五巻より

そのうち日露戦争になり、いつ召集されるかも知れないというので、戦争に関係のある仕事をしている方がよろうということになり、捕獲審検所に出ることになった(「捕獲審検所のころ」)。この三十七年に私は結婚したので、その前後はごく気楽に暮らしてゐたように思ふ

柳田国男『故郷七十年』 『定本柳田国男全集 別巻三』

彼らは日露戦争期の主戦論者のうちで特に卑劣だったわけではない。「召集される」ことへの恐怖ゆえに、「戦争に関係のある仕事」につき、自分の代わりに他人を戦争に駆り出すというエゴイズムは、すべての銃後の主戦論者に共通する原罪なのである。

宗七は合点いて両手を腰に、身を反らして立ち上つた「野間君、其れは僕が説明しよう、即ち議事法の原則と言ふものは、一定して居るんだからね」

與三は其方に顔を向けた「お前は何だ」

其の獅子の吼へたる如き声に座中皆な震動した、宗七は色を失つた、

「お前は此の仲間の顔じや無い、聞いて居る分にや差支無へが、口出して邪魔すると承知しねへぞ」

與三は一つ瞬きして向き直つた「七公、俺、議事法なんて其様六ヶしいことは厭だ、それだで今日は男ばかりじや無へ、女衆にも寄つて貰つたゞ、今度の仕事は、お前、頭数などで決めることの出来るもので無へだ、頭数で決めた所で、それで出来て行く仕事で無へだ」

『良人の自白 続篇』(二の三) 一九〇六年一月七日

與三は多数決の原則自体を否定しているのではない。女性を排除することを前提とする制限選挙を批判しているのである。

七五郎が冷笑を含んで立ち上つた、「與三公、お前の話は牡丹餅で頬辺叩かれるような、

甘過ぎる話だが、其様夢見たような馬鹿なことが一体出来ると思ふだか（略）お互いに負けめへと思へばこそ死ぬようになって稼ぐじや無へか、俊三さの話だとか言ふことで、先頃中聞くには、田地の收穫を一つにして、各自に入用だけのものを取り出すだと云ふじや無へか、然すりや、働いたものも働かねへものも差別が立たねへだ、子供の多勢あるものなどは徳をするだ、然なつて見なせへ、働くもの馬鹿、<sup>なまけ</sup>懶るもの得と云ふ次第じや無へか、べら棒な」

一同は復た低語き始めた「然云勘定だ」「俺も然思ふだ」なぞ云ふ聲が隅から隅まで伝はるのである、（略）

「じや、仕方が無い」と與三は又た一同を見廻した「皆様が厭だと言ふじや、如何することもならねへだ、其の通り俊三さあの方へ言つて遣るだが―そうすると皆様は矢張り今まで通り小作人の方が可いと言ふだかい、<sup>はつきり</sup>判然と言つて貰へてい、」

一同は互に顔見合わせた、

『良人の自白 続篇』（二の四） 一九〇六年一月八日

「平等で平和な世界など実現するはずがない」といった、一見現実的に聞こえる安易なシニシズムこそ、まさに「公を演じる私」なのである。

「お前達も目の前の勝手ばかり考えねへで、<sup>も</sup>今少し大きな量見を出しなせへよ」と與三は笑ふ「腰拔爺だからつて、昔時や矢張お前達のように盛に働へた時もあつたゞ、お前達だつて、足手まといの赤兒<sup>がき</sup>の時代を過して来たでねへか、お前達にしろ、何時病氣になつて動かれねへようになるも知れずさ、今に戦争でも始まつてお前達兵隊にでも取られて仕舞つたら、お前達の家じや食はねへで居るだか、まあ、<sup>うち</sup>吝嗇な量見は棄てなせへ、（略）何だか爺振るように聴へるだが、私も実を言や、<sup>まへ</sup>以前にや只だ無暗に他人のことが癪に障つて腹ばかり立つたゞが、漸くのことだ始めて解つたよ、『他人<sup>ひと</sup>の利益<sup>ため</sup>をおもうふが、我身の利益』だ」

『良人の自白 続篇』（二十六の二） 一九〇六年五月七日

こう七五郎らの詰問に答える與三は、もはやかつての「私」的非戦論の論理を完全に克服している。木下が選んだ非戦論とは、「公」への罵倒でも模倣でも依存でもなく、「私」から別の「私」への問いかけを通した「公」の再編成という形態であつた。

戦争論征露論は則ち愛国的『小我』の勃動のみ、（略）古来戦争が神の名に依りて、哲人鴻儒の唇頭より是認せられたることは、吾人の多く聴きたる所なり、然れ共吾人は敢

て言はんとす、彼等も亦た皆一時其の大理性を忘却して、以て祖国的小感情に服従したりしに過ぎずと、

木下尚江「思想界の一瞥（四）——戦争論は『小我』の発動」『毎日新聞』一九〇四年四月四日

#### 七 非戦論の公共化をめざして

『良人の自白』は実に面白い様に売行きます。最初まだ製本が五百部しか出来ぬ時に売捌店からは早や七百部も取りに来る、二度目に又五百部出来た時には、既に千部以上の注文がある、といふ有様で、五日にはモウ千八百部ばかり出てしまつて、二千部の内、僅々二百部足らずしか残つて居なかつた。それで直ぐに再版の注文をして目下その印刷中です。

「平民社より」『直言』 一九〇五年七月九日

「今の小説の最も売行好きものと雖も、其部数三千を出でず」（前出「非国民的小説を難ず」という出版状況での、小説『良人の自白』の商業的成功は、平民社の財政に、ひいては非戦運動そのものに大きく貢献した。「私」を問い直すことで「公」を再編成するという目論見のうち一方は成功したといつていい。では、それと同時に並行して展開された「公」すなわち選挙活動の結果はどうであつたか。

五千三百四票 林 謙三

二千七百六十九票 江間 優一

三十二票 木下 尚江

（『萬朝報』一九〇五年五月二〇日の記事より）

惨敗といつていい。いかに「林は郵便と印刷ばかりに二千五百円払つて、総て一万円以上費やしたが、江間は五千円位さへ持たなんださうだ」（『萬朝報』同日の記事より）という金権選挙<sup>⑨</sup>とはいえ、これでは木下の非戦論もまた無効だったのではないか、という疑問が当然生じる。では、この三二票の意味するものは何か。

午後來状あり、曰く「小生は今回の選挙に関して林、江間、両派より勧誘を受けたり、木下派より勧誘を受けたることなし。小生三氏に対して毫も恩怨なきのみならず、三氏を見たることだになし。然れども林、江間、両氏の中に投票するを快しとせざりしに依り、木下氏に投票せり。小生は社会主義の純然たる同意者にはあらず、又木下氏の平素の意見に全然同意する者にもあらず、されど小生は三氏中にては木下氏が衆議院議員たるに適するの人物たるを信じたればなり、（略）小石川一平民」

無署名「社会党選挙運動日誌」『直言』一九〇五年五月二一日

木下の公論は、社会主義者でも非戦論者でもなかつた有権者の心を動かし、私情によらずして票を投じさせていたのである。

日露戦争が始まっていた。《自伝材料》によれば月末の二月二十九日（略）傍らに週刊『平民新聞』があった。その新聞は《自伝材料》の次の項によれば、まさに甲山の運命を変えた一紙となった。

〈何心なくとりてこれを読みしに非戦調の文字火の如く花の如く燃えたり（略）我はこの刹那に半生求めしものを授けられ、迷へる道を開かれたり、〉

（略）甲山は翌三月一日、人に頼まれて書き渡してあった「征露の歌」など軍歌三篇を取り戻し、焼き捨てた。

きしだみつお 『評伝 大塚甲山』 未来社 一九九〇

反戦詩人、大塚甲山を生んだ記事を特定することは不可能だが、日付から考えて二月二八日付『平民新聞』の巻頭論文、木下尚江の「戦争の影」であった可能性は高い。

幸徳秋水や片山潜に比べスケールは小さいとはいえ、木下の非戦論は確実に効果をあげていた。主戦論者を論理によつて説得し、あるいは文学作品によつて感動させるという方法は、資金力も組織力もない一個人がすぐにでも実行できる、数少ない実効性ある非戦論なのである。

白刃、秋原の芒の如き所、赤手独往するもの之を平和主義の戦士となす、真勇の人始めて共に平和を談ずべし、

世界は常に二個の理想に依て支配せらる、小我の膝前に大我の屈服を夢むもの其なり、大我の懷中に小我の甘睡を祈るもの他の一なり、前者は戦争主義なり、後者は平和主義なり、前者は即ちシーザルより以下ウイルヘルム第二世に至るまで、帝国主義の勇者をして苦悶煩惱せしめぬ、後者の勝利は吾人既に之を基督の十字架に見たり

木下尚江「無題録」『毎日新聞』一九〇三年八月二二日

国家主義者たちの主張とは逆に、戦争を生むものは「小我」（私）であつて「大我」（公）ではない。「公を演じる私」が戦争を生み、「公を否定する私」がテロをもたらすのである。

木下は先の一節に続けて、「人は悪をなすの自由をなす」とも書いている。主戦論者に罵声や暴力で立ち向かうのではなく、彼らの「私」を理解し、容認した上で対話すること、それが木下にとつての、実践可能な平和主義であつた。

注

①本文の引用は、教文館版木下尚江全集第二巻『良人の自白 上篇・中篇』および同全集第三巻『良人の自白 下篇・続篇』（一九九〇）により、旧字体を新字体に、会話の二重引用符を通常の引用符に改め、ルビは適宜省略し、『毎日新聞』初出時の年月日を付記した。傍線は引用者による。

② 一八六九（明治二）～一九三七（昭和一二）。東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業後、弁護士・普通選挙運動を経て一八九九年より『毎日新聞』（現在の同名紙とは無関係）記者として言論活動を開始する。『良人の自白』執筆時は、『前編』の序文にもあるように、

『毎日』『平民』両紙の事務に加え、「共産党宣言」訴訟の弁護、非戦講演活動、吉野作造との国家宗教論争、そして自身の東京市衆議院選挙出馬と、きわめて多忙な時期であった。

③ 「父が与謝野晶子をカルカチュアにしたような「昇降場」という小品を書いたのだけ覚えていて。それは「こんなもの父親が書かなければ好いのに」と思ったので覚えているのである。それはあの日露戦争に反対して「きみ死にたまふこと勿れ」と晶子が歌ったことを、父が憤慨して書いたのである」（広津和郎『年月のあしおと』一九六三『日本平和論大系 5 反戦平和文芸集』日本図書センター 一九九三）

④ C女（引用者注、「昇降場」の登場人物）は明らかに晶子をモデルとしたものと解釈することができる。C女の兄は、反戦思想や厭戦気分をもってなく、そのため、C女の厭戦的な発言に辟易している。晶子の弟壽三郎も晶子の「ひらきぶみ」によれば、「父の忠君愛国のしつけを身につけた素直な弟」である。壽三郎は姉の「君死にたまふこと勿れ」をどのように受けとめていたのであろうか。有難いという感謝の反面、誹謗されることから、C女の兄のような感懷もあつたのではないだろうか」（中村文雄『「君死にたまふこと勿れ」 和泉書院 一九九四）

⑤ 坪井秀人「戦争と〈女の感受性〉——与謝野晶子」『国文学解釈と鑑賞 別冊 女性作家の現在』二〇〇四・三）は、「与謝野の詩は、結局は家父長制に依存して生きる『女の感受性』の生産物の域をこえず、私に発して公を撃つたとしても、それは私性を免れない（略）」といった見方が出てきても不思議ではない」と規定しつつも、「君死にたまふことなかれ」の「私性に発するその過剰性」を評価している。だが、本論は本文にあげた理由からその評価に賛同しない。

⑥ 「尚江と鑑三が直接に親密な交渉をもつたのは明治三十四年から三十六年にかけてである。（略）しかしながら尚江の鑑三に関する発言等がほとんど残されていないためもあり、いつ彼が鑑三と面識をもったのか、どの程度の著書を読んでいたのかは特定できない」（伊藤義器「木下尚江『火の柱』——内村鑑三との接点」『立教大学日本文学』一九八一年一二月）

⑦ 「これら（引用者注、反戦論と正戦論の両方）が孕む問題は、現実を無視することによって、人命を危うくすることである。絶対平和主義の問題点は、万一侵略されたときに、それに物理的に抵抗する可能性がなくなり、国民の命を危うくするところにある。逆に、新保守主義は、自ら侵略することにより、対象地域の人々の人命を犠牲にし、世界に混乱を生じさせる。後者の方が明らかに悪質であろうが、思惟様式の問題点には対称的な共通性がある」

小林正弥編『戦争批判の公共哲学』「序章 6 反戦論と正戦論」勁草書房 二〇〇三

⑧ 富岡幸一郎『非戦論』（NTT出版 二〇〇四）は「内村の聖書的終末観に立つ非戦の思想は、いわゆる平和運動や反戦運動が目ざしているような「平和」ではない。聖書を引いてヒューマニズムの次元で、平和を願うことでもない。繰り返すがそれは、終りの日に神の祝福にあずかる、終末的な約束としての平和である」と内村のいう「平和」を規定する。

⑨ 「平民社財政の現状」『直言』一九〇五年八月二〇日）によれば、同年五月一〇日から八月一六日までの平民社の選挙運動費は三十七円四十五銭にすぎない。

## 第九章 木下尚江「墓場」論——非暴力的抵抗の挫折

### 一 はじめに

『時間』<sup>と</sup>に後れずに走る、『時間』を出し抜いて走る、『自然』に抜け駆けして我が手に革命を成就する、<sup>こ</sup>是れが岡本の生命<sup>いのち</sup>であつた、(略)が、<sup>い</sup>今になると、まるで白昼の夢だ、

木下尚江<sup>きのしたなおえ</sup> 「墓場」 一の一 『東京毎日新聞』 一九〇八(明治四一)年九月七日<sup>①</sup>

日露戦争期(一九〇四〜〇五)における代表的なキリスト教社会主義者であり非戦論者であつた木下尚江(一八六九〜一九三七)は、翌一九〇六年の「旧友諸君に告ぐ」で日本社会党からの脱党を宣言し、社会主義史上初の転向者という汚名を浴びるにいたつた<sup>②</sup>。普通選挙運動(一八九七〜)、社会民主党結党(一九〇一)、日露戦争非戦論(一九〇三〜〇五)等、まさに時代に先駆けた革命家であつた彼は、なぜ一年のうちに挫折しなければならなかつたのか。

先行研究はその理由を、母の死による精神的喪失感といった伝記的事実<sup>③</sup>や、日露戦後に勢いを増した明治政府の弾圧への恐怖によるものとして説明してきた。

それらの要因は否定できないにしろ、本論はもうひとつの大きな原因として、小説「墓場」(一九〇八(明治四一)年九月七日〜一日 東京毎日新聞連載)<sup>④</sup>に描かれた、日比谷焼打事件の衝撃と、その衝撃に対して平和的革命論を貫いたがゆえの孤立を提示したい。初期社会主義者たちが唯物論(『光』派)とキリスト教社会主義(『新紀元』派)に二分された一九〇六年、尚江は後者の代表者であつた。機関誌『新紀元』の廃刊にあたって、彼は『光』派を主軸とする日本社会党に向けて以下のように語っている。

二条の路は僕の眼前に開かれて其の選択に任かせたり、暴力的革命と平和的革命と即ち是れなり、(略)。然れども僕は基督教徒也、

然り、僕は諸君が嘲弄し給ふ所の基督教徒なり、暴力的革命は目を以て目を償ひ齒を以て齒を償ふと云へる旧約主義にして、基督の鮮血は此の復讐主義を超脱(略)の為に流されたり、

木下尚江 「旧友諸君に告ぐ」 『新紀元』 一九〇六(明治三九)年一〇月

キリスト教徒であるがゆえに暴力的革命に与しないという弁明には、検討の余地がある。なぜなら尚江自身がしばしば非難しているように<sup>⑤</sup>、当時のキリスト教指導者層が日清・日露戦争の遂行に積極的に加担したことは周知の事実であつた。また、戦争に反対したキリスト教徒であっても日本社会党に留まり続けた石川三四郎や片山潜の例もある。

尚江は教条的なキリスト教徒ではなく、むしろ形骸化した教会に属さない「野生の信徒」であることを誇りとしていた。その信仰告白である「野生の信徒」(『六合雑誌』一九〇二年三月一五日 『全集』一五巻収録)では、三位一体や化体説などの「正統派神学」を否定して、「天国を地上に経営する」こと、基督は「純然たる人なること」、「此人によりて世界的大革命の宣言せられしこと」等の信条を挙げている。

彼自身「自然神学派」と規定したこのキリスト教観は「万国皆な其境を徹し(『撤し』の誤りか)、人類皆な同胞の愛情に満ちて天国を地上に建設する」という「世界的大革命」を最終目的とする。内村鑑三らとは違い、尚江にとつてのキリスト教は、現実社会での人間の手による「革命」と不可分だったのである。では、一九〇六年以降の彼の中でキリスト教と革命が矛盾するに至った理由は何なのか。

そこで、「生命」であつた「革命の成就」を、「まるで白昼の夢」と感じるにいたる経緯を描いた新聞連載小説「墓場」を読み返す必要が生じる。後神の『著作集』解説によれば、「墓場」は、「思想の動揺を事実即して述べるべく、意識して虚構を排除」しており、主人公の岡本は木下尚江自身に、錦橋は幸徳伝次郎(秋水)に、古川は堺利彦(枯川)にとつた具合に、一対一でモデルを特定しようという<sup>⑥</sup>。同じ顔ぶれの三人が登場するにも関わらず、理想主義的・勧善懲悪的な虚構化が目立つ第一作『火の柱』とは小説の方法そのものが違ふのである。

『火の柱』は、「非戦論を唱へて、その為の武器として小説を書く」(戯作者と革命家長谷川辰之助君)『明治文学研究』一九三四年三月)という意図で書かれた。では、「墓場」は誰に對しての、何のための「武器」として書かれたのか。まず執筆時の尚江がおかれた時代背景を振り返ってみたい。

## 二 「墓場」執筆時の木下尚江―一九〇八年、『新生活』創刊と赤旗事件

尚江が日本社会党を離れ、伊香保山中に隠棲した一九〇七年、アメリカから帰国した幸徳秋水は直接行動論(いわゆる硬派)を主張し、田添鉄二・片山潜ら議会政策派(いわゆる軟派)と激しい論争を繰り広げていた。

余は正直に告白する、『彼・の・普・通・選・挙・や・議・会・政・策・では・真・個・の・社・会・的・革・命・を・成・遂・げ・る・こ・と・は・到・底・出・来・ぬ・、・社・会・主・義・の・目・的・を・達・する・には・、・一・に・団・結・せ・る・労・働・者・の・直・接・行・動・(・デ・レ・クト・、・ア・ク・シ・ョ・ン・)・に・依・る・の・外・は・な・い・』余が現時の思想は実に如此くである。

幸徳秋水「余が思想の変化(普通選挙に就て)」 日刊『平民新聞』一九〇七(明治四〇)年二月五日

幸徳の言う直接行動論とは理想としては総同盟罷工(ゼネスト)を指すが、より過激な暴力的手段を排除するものではなかった。「構和問題の騒動」(日比谷焼打事件)のような民衆暴動もまた、直接行動の一例にあげられているのである。

議会政策を取る人は（略）労働団体の、首領の腐敗をも憂へなければならぬと云ふが、（略）電車事件の如き、構和问题の騒動の如き、今回の足尾の騒動の如きは、或る首領なるものが代表したる運動では決してない、彼等の間には首領はない、彼等は実に直接の運動を取つたのである。（略）

今一つは直接行動には犠牲が多いとの批難である、（略）犠牲なくして進歩はない、（略）暴動は悪い、然しながら議会廿年の声よりも三日の運動に効力のあつたこと丈は認めなければならぬ。

「幸徳秋水氏の演説（一昨日社会党大会に於ける）」 日刊『平民新聞』一九〇七（明治四〇）年二月一九日

「首領のいない自然発生的運動であること」「犠牲なくして進歩はないこと」「議会政策よりも政治的に有効であること」この三点が、幸徳の唱える直接行動論の骨子であった。

こうした直接行動派が社会主義運動の主流となる一方で、伊香保での一年余りの隠棲から帰京した尚江は、一九〇八（明治四一）年二月、雑誌『新生活』を創刊し、言論活動を再開する。キリスト教社会主義を標榜していた『新紀元』に比べ、『新生活』は社会主義よりもトルストイ的平和論をより前面に押し出している。

たとえば、『我に憲法を与へよ』を符調とする十九世紀の革命（市民革命）、『我に麵包を与へよ』を旗章とする二十世紀の革命（日露戦争下のロシア第一革命）の両者はいずれも平和ではなく、「傲慢な破壊」の繰り返しをもたらしたと指摘している（「破壊の経路」『新生活』二号 一九〇八（明治四一）年二月一五日）。

また尚江はポルトガルの暗殺事件に仮託して、君主暗殺否定論をも展開している。

此の不人望の皇室は、压制皇帝の血の高価を払つて、多少愛憐の同情を買ふことが出来たであらう、（略）

或は正当防御の理論により、或は復讐の激情により暗殺は古来世界の史上に幾多血痕の汚点を残した、

然れども不正の手段の結果は、常に只だ其の悪敵に意外の寿命を恩賜するの外、何の得たる所も無い、

木下尚江 「暗殺」 『新生活』三号 一九〇八（明治四一）年三月五日

一方幸徳は『新生活』に対して、尚江が固執する非暴力主義は革命そのものの否定であり、民衆の苦しみを見殺しにする「残忍」な思想でさえあると反論した。

トルストイアンは曰く、国家も非なり、左れど革命も亦非なり、唯神を信ぜよ、隣人を愛せよと、嗚呼敬虔正直順良なる農民が神を信じ隣人を愛する幾千年ぞや、彼等は何時まで、神を信じ隣人を愛して牛馬の生活を為さざる可らざる乎、小生は彼のトルストイアンの言義の寧ろ残忍なるに驚くものにて候。

▲トルストイアンの議論文章は、理義にあらずして寧ろ詩歌なり、識見と言はんよりも寧ろ情熱なり、友人木下君の『新生活』の如きは、其較著なる標本なり、小生は



之に対して深き同情を有し、大なる尊敬を払ふ者なるも、而も常に其論理の帰結茫漠たるに失望せしめらるゝの遺憾に堪へず候。

幸徳秋水 「海南評論」『大阪平民新聞』 一九〇八（明治四一）年三月二〇日

しかし、尚江が否定したのは唯物論的な「二十世紀の革命」であつて、革命そのものを否定したわけではない。尚江が『新生活』で提案したのは、破壊の繰り返しを断つ、無抵抗主義による革命であつた。

無抵抗主義の実践者だと言はれる耶蘇のことを考えるに、彼は実に天下の大戦士であつた、彼の甚だ短き歴史は極めて猛烈な戦闘であつた、無抵抗主義とは無戦闘のことでは無い、「無抵抗」と云ふ大武器を揮つての大戦闘である、憎悪嫉妬嘲弄復讐の強敵に向て、愛の鋭刀を突きつけて更に劇しく奮戦することである、

木下尚江 「醒めたる人」 『新生活』三号 一九〇八（明治四一）年三月五日

この無抵抗主義の根底にあるのは、言論によつて「何時の世にも、人の心の真底」にある（と尚江が信ずる）「絶対的非戦論」に訴えかけ、目覚めさせうという人間観であつた（「愛と労働（思潮史論）」『新生活』三号 一九〇八年三月五日）。これは階級闘争の必然を説く直接行動派はもちろん、議会政策派やキリスト教徒にすら受け入れがたい説であつたと思われる。

議会政策派・直接行動派のいずれの賛同も得られないまま、尚江は両派の対立の帰結である、六月二二日の赤旗事件に遭遇する。硬軟両派の和解のために設けられた山口弧剣出獄歓迎会の席上で、荒畑寒村・大杉栄ら硬派が「無政府共産」などと書かれた赤旗を振り回して街頭を走り、止めようとした堺利彦・山川均らもろとも逮捕された事件である。現場に居合わせた尚江は弁護側ではなく証人側に立ち、宇都宮卓爾ら被告側の反感をかつた。

▲ 木下の大入道随分馬鹿だ、アノ証言は故らに僕等を罪に陥れることを吐かして居る、大将トルストイに熱中して老耄おいぼれたな、基督教などには御互なりたくないものだ

▲ 熊本評論に金曜社同人の『宗教臭味のある連中と絶縁する』云々の宣言が載て居るそうだが、新紀元を中心として居る有難屋連中に対してならんとは無論首肯される、それも時代マヤの要求なら仕方がない、

宇都宮卓爾 「獄中消息」 『熊本評論』 一九〇八（明治四一）年九月五日

『熊本評論』のみならず、『東北評論』九月一日号も遠藤生「木下老人に教を乞ふ」なる社説を掲載し、読者の好評を呼んだ。四〇歳を前にして、過激化した若い社会主義者たちから完全に「老耄おいぼれ」「老人」とみなされた存在、それが「墓場」を執筆している時点の尚

江であった。「時代の要求」に抗うために、彼は「墓場」を書いたのである。

### 三 暴力的革命への異議——一九〇五年九月五日、日比谷焼打事件——

「墓場」は主人公岡本の一人称に近い三人称の語りによって、母の死を契機とする思想的動揺（一の二）、三、一年前の日露戦争前から戦中の世相の変化と岡本の憤り（一の二）、九月五日の日比谷焼打事件の回想（一の三、四）、ふたたび語りの時点に戻って、母の死と同志の離散への嘆きで終わっている（一の五⑦）。

回想時の岡本にとって日露戦争とは、日本とロシアの間の暴力ではなく、国家の民衆に対する暴力であった。「人の怒、草木の怨」を代表しているという自負ゆえに、戦時下の彼は「天に代つて日本帝国を弾劾し」「非戦論を絶叫」できたのである。

しかし、「忘れもせぬ去年九月五日」ポーツマス講和条約への反動として起きたとされる日比谷焼打事件は、彼の眼に「民衆の国家に対する暴力」と映った。国家が平和を、民衆が戦争継続を望んだ時、平和的革命を奉じてきた者はどちらに味方すべきなのか。それは岡本のみならず、当時の社会主義者・非戦論者全般を襲った矛盾であった。

「戦争が済めば狂つて居た民心も平生に戻」るはずではなかったのか、民衆は本当に戦争継続を望んでいるのか、「媾和反対！非戦論者に取ては如何にも不思議な声だ」と岡本は疑問に思う。同志古川の結婚式に出席するため日比谷前を通った岡本は、暴徒の攻撃が外務省ではなく内務大臣の官邸に向けられていることに気づく。

媾和の不平を洩らすのなら、内務大臣を虐めるのは余程人民の見当が違ふように思ふ、すると戦争の最中内務大臣の地方巡回のことを思ひ出した、行く先き／＼で内務大臣が酒に耽り婦女を弄んで、乱暴狼藉を働き廻つたことを思ひ出した、然うだ、「戦時」の一語に庄へつけられて居た天下の怨が、媾和を待つて爆発したのだ、『成程、媾和の不平じや無いのだ』と岡本は独り首肯いた、

「墓場」 一の四 一九〇八（明治四一）年九月一〇日

「民衆は戦争継続を望んでいるのではない。政府への不満が爆発しただけなのだ」と観察する岡本だが、彼は民衆の暴力を肯定しているわけではない。

暴動の犠牲になった死体や、新聞各紙が民衆の敵として中傷した桂総理の愛人お鯉（作中では「亘利総理の妾お艶」）への同情（「お艶に何の罪がある」）も、交番所の炎が「罪もなき杉の立木に燃え移」る様も、「墓場」は書き留めているのである。暴動は本来の攻撃対象ではなく、罪もない者たちに被害を及ぼす、ということはこの作品は強調している。

もう一つ、「墓場」の語りの特徴として、見物に集まった「群衆」と、「焼打の壮士」「一個の若者」のような少数の暴力行為の当事者を分けて描いていることがあげられる。大多数の群衆は暴動に喝采し歓声をあげることがあっても、暴動の積極的な主体としては描かれ

ていない。

一方、錦橋はこの事件を聞いて、「眼中には見る／＼電光が閃いて、痩せ枯れた頬に血が(みなぎ)漲」り、古川家に集まっていた一同と「仏蘭西大革命の昔話」に盛り上がる。その直後に岡本と錦橋の二人が「西と東」へ別れる場面が描かれるのは暗示的である。

錦橋は淀橋へ帰る、岡本は麻布へ帰る、二人は此処で西と東へ電車に乗り別れた、見ると、帝都の秩序は最早全く転覆されて居た、

「墓場」 一 の四 一九〇八（明治四一）年九月一〇日

後年の大逆事件の際の「彼（幸徳）が東へ行くに連れて小生は益々西へ行く 思想の距離益々開きを加ふると共に彼を思ふの情ます／＼切なり」（一九一〇年十一月十五日 石川三四郎宛 『全集』 第十九巻より）という書簡に照らせば、「墓場」中の「西と東」が地理上の方角ではなく、この事件を革命とみなすかどうかについての尚江と幸徳の「思想の距離」を指していることは明白である。幸徳ら主流派が暴力的革命に惹かれていく中で、尚江は日露戦争期以来の絶対非暴力論を貫き、孤立していったのである。

以上の日比谷焼打事件観は、同事件を「日露戦争講和条約（ポーツマス条約）に反対する全国的運動の頂点となった都市民衆暴動」（『国史大辞典』橋本哲哉執筆「日比谷焼打事件」の項より）とする定説からはかけ離れている。しかし、当時の証言の中には「墓場」に近い事件観も存在する。たとえば赤旗事件では木下尚江と立場を異にした荒畑寒村もまた、民衆は必ずしも戦争継続を望んでいなかったとする回想を書き残しているのである<sup>⑧</sup>。近年では、中筋直哉もまた社会学の立場から、事件の三日後に出た『東京騒擾画報』の分析をもとに、歴史学の先行研究に次のような異議を唱えている。

定説は、群衆の大部分が投石や焼打の主体だったように考えているが、これは史料から考えても論理的に考えても、無理な推定である。（略）「論理的にも」というのは、焼打に必要な時間はわずかだから、立ち会えた者はごく限られていたはずだという意味である。（略）焼打現場の群衆は凶悪な暴徒ではなく、燃えさかる火の見物人だった

中筋直哉『群衆の居場所 都市騒乱の歴史社会学』新曜社 二〇〇五

本論は文学研究である関係上、日比谷焼打事件の歴史的評価にこれ以上立ち入ることはしない。「墓場」の岡本にとってより重要なのは、日露戦争期に非戦論者として行動を共にしてきた錦橋と、この事件に関してだけは見解を異にしまった事実である。

以上のように、「墓場」は日比谷焼打事件を「民衆ではなく少数の『壮士』を主体とする組織的テロ活動であること」「罪もない者たちを犠牲にしたこと」（「媾和反対という」政治的目的によるものではないこと」という三点で描き出している。

これは先に述べた幸徳の直接行動論、すなわち「首領のいない自然発生的運動であること」「犠牲なくして進歩はないこと」「議会政策よりも政治的に有効であること」への異議申し立てであり、批判であった。

#### 四 新聞小説の感化力

「墓場」は、なぜ小説という形をとる必要があったのか。尚江が最も訴えたかったのは、「犠牲なくして進歩はないこと」という点の否定であることは、「墓場」の連載終了直後に、尚江がより端的な形で書いた直接行動論への批判からも明らかである。

諸君近日の言行を見ると、敵を憎むの猛熱に逐はれて、浮き足の盲打ちと云ふ欠点  
が著しく現はれて来た、敵は冷笑を浮べて落着き払つて諸君を捕縛して居る、諸君は  
自ら『犠牲だ、犠牲だ』と呼ばつて居る、然し僕は敢て一言を呈す、『少こし謙遜に考  
え給え、一つきりの生命だぞ』

木下尚江「廃刊を祝す」『東京社会新聞』一九〇八（明治四一）年九月一五日

しかし、こうした直接的なメッセージでは彼らに届かず、反感を買うばかりであることは、『新生活』や赤旗事件での体験から、尚江にはよくわかつていたのである。かつて日露戦争期に、演説や新聞社説や選挙運動による非戦論に限界を感じた末に反戦小説『火の柱』を書いたように、彼はふたたび小説というメディアの可能性に賭けたのである。

「悪人を主人公にして書いて居たところ、それが段々書いて居るうちに悪人でなくなるのです」と尚江は、自身の執筆時の体験をこの時期に語っている。作者尚江の意図を読者尚江が超え<sup>⑨</sup>、戦争や暴力を手段とする敵たちへの憎しみを冷ます力があることを、己の小説を一読者として読むことで、彼は実感していた。

何でも悪いと思つた奴は用捨無く追窮してまで非難もし、攻撃もした私が、敵を愛  
むといふやうになつたとは、実際驚かるゝ変化では無いでせうか。それが何の為めかと  
いふと、自分の書いて居る小説の為に感化されたのだから、実際不思議です。

木下尚江「自己生存の要求」『文章世界』一九〇八年一月一五日

小説の持つ感化の力によって、直接行動派の社会主義者たちを支配している「敵を憎むの猛熱」を冷めさせること。それが尚江の「墓場」執筆の意図であつた<sup>⑩</sup>。

しかし連載は作者急病のため五回で中断し、結果として、幸徳秋水をはじめとする社会主義者たちが尚江の声に耳を傾けることはなかった。激しさを増す政府の弾圧に追い詰められた彼らの自暴自棄的な過激化は、ついに大逆事件という最悪の結末を迎えることになるのである。

#### 五 おわりに

幸徳の絶筆「基督抹殺論」の批評を名目とした追悼演説で、尚江は「憎悪と恐怖とは毫  
も解決の力を有つて居ない」と前置きして、弾圧とテロの双方の論理を否定しつつも、被  
告側へのシンパシーを語っている。

著者は予に取て実に十年の親友である。彼と予との関係は即ち「同志」であつた。今や彼既に絞台の露と消え、予は無用の身を生きながらへて居る。何故に予は彼と死ぬることが出来なかつた乎。即ち予は何故に彼と「同志」の手を分かつたねばならなかつた乎。斯く推窮し行く時、最後の問題は即ち「基督」である。(略)基督は即ち人格だ。我等は皆基督だ。我等は依然基督の中に宝探の必要を信ずるものである。

木下尚江『基督抹殺論』を読む―早稲田雄弁会にての演説』『野人語』一九一一年七月 収録

前述のように、尚江の言う「基督」とは神ではなく「純然たる人」であり、「復讐主義の超脱」のために自らの身を犠牲にする者たちすべての代名詞であつた。大逆事件直後の尚江の書簡は、キリストの実在を否定する幸徳をも殉教者に、というよりもむしろ「基督」たちの一人になぞらえているように読み取れる。

秋水もいよ／＼大勝利を以て理想の如くに死んだ 日本帝国と云ふものは彼を殺したことに依て心臓へ自ら一刀を刺したようなものだ(略)今度の裁判に依て、政府の弱点は悉皆国民の面前に暴露された(略)彼の判決書で秋水も到頭神様になつた 一九一一年一月二六日 石川安次郎宛書簡『木下尚江全集 第十九巻』より)

幸徳は死刑によつて理想を成就したと考える尚江は、石川三四郎とは違って、政府側に恩赦を嘆願する運動には加わらなかつた。

死刑の前に立つの彼を考えて日々我心身に鉄鞭を加へつゝあり(略)今日の小生は勿論幸徳の議論に服せずと雖も而かも其の意の在る所を了解するや更に深きを加へ得たりと信ず 幸徳の目的は死刑に依て成就するものに非ずや(略)国権の宥恕を希望するが如きは是れ幸徳を侮辱するの最も大なるものなりと信ず

一九一〇年十一月一日 石川三四郎宛書簡『木下尚江全集 第十九巻』より)

「お互いに人だと云ふ觀念が、お互いの腹の底に湧いた時、地に平和は成就するものだ」(「悔い改めよ」 『東京社会新聞』三号 一九〇八(明治四一)・四・五)という彼の理想からすれば、天皇暗殺計画もまた弁護しがたい犯罪であつた<sup>⑩</sup>。しかし、尚江がなお幸徳の意思を尊重せずにはいられなかつたことは、最晩年の回想での、「僕は(略)逆徒を擁護するのではない。『逆徒の悩み』を少しく聞いて欲しいのだ」(「幸徳秋水と僕」 朝日新聞 一九三三)という屈折した言い回しからも窺える。

この事件の後、いわゆる社会主義冬の時代の到来と共に、尚江は筆を絶ち、二十年以上におよぶ沈黙の生活に入る。地下活動が続けた堺利彦や荒畑寒村から見れば、それは「転向」「裏切り」と写つたかもしれない。

しかし、少なくとも連載「墓場」執筆当時の尚江は、これまで述べてきたように、直接行動派とは違つた形の革命、すなわち新聞小説による平和的革命を実践していたのである。それは定本『墓場』の次の一節にあるように、秋山(幸徳)と僕(尚江)の根本的な世

界観、決定論と自由意思論との対立に由来し、唯物史観ではなく自由意思にもとづく革命を志向するものであった。

『我輩は意思の自由を信ずることが出来ない、我輩は只だ、運命を信ずる』(略)秋山は運命を信ずると言ふた、然れ共彼は果して甘んじて運命に従ひ得るであらうか、

否な、彼は現に運命に従ふことが出来ない為めい、自ら革命に手<sup>ママ</sup>を着けるのでは無い

か？唯物論の論理は、余儀なくも秋山を「運命」の終点に導いた、乍<sup>しかしながら</sup>併論理以上の潜める或物は、事実秋山を運命に安住させることが出来ないでは無いか？―斯う考えると、僕は猛烈な秋山の、底の悲哀を思はずには居られない、

### 定本『墓場』 三

定本『墓場』では日比谷焼打事件の挿話は抹消され、母の墓参りとアメリカに旅立つていく秋山を見送る場面から始まり、外部の動向よりも「僕」の内面に重点が置かれている。

唯物論に対抗しうるのは自由意思のみとでも言うかのように、定本『墓場』以降の尚江は鎌倉仏教などの精神主義に傾斜していく。

もはや新聞小説による呼びかけという手段に尚江が絶望し、「平和」と「革命」の両立困難を痛感したことは、連載「墓場」にはない次の一節からも読み取れる。

栄華の代りに黒き津浪の押寄せて来た時で無ければ、此の無智な傲慢な国民の迷信

は醒めない。新聞は最早厭だ他人の商売品の新聞は最早真平御免だ。

### 定本『墓場』 四

それは技術的なレベルでの失敗だったのか、それとも文学を平和的革命の手段として使う方法そのものが誤っていたのか。仮に後者が正しいとして、完全な非暴力手段による非暴力主義の実践の方法は他にありうるのか。それは今日の我々が考えるべき問題であろう。少なくとも、新聞小説による非暴力的抵抗という尚江の試みは、この「墓場」をもって終わりを告げたのである。

### 注

① 引用中の傍点原文のままとし、傍線はすべて引用者による。ルビは適宜省略し、読みがなが必要と思われるものはかつこ内ルビの形で引用者が補った。なお、本論でいう「墓場」ないし「連載『墓場』」とはすべて東京毎日新聞連載版をさし、同年一二月に刊行された単行本については「定本『墓場』」と呼んで区別する。

② たとえば後神俊文「木下尚江『小説 墓場』について」(『文学』一九六二年一月)は、連載『墓場』を「彼らの運動が大衆の支持のないインテリゲンチヤの知的運動にすぎなかったことを暗示し、ひいては尚江の転向の客観的理由を暗示している」と評し、高坂正顕『明治思想史』(燈影社 一九九九年 原著一九六八)は『新紀元』創刊から廃刊までの尚江

の思想遍歴を「社会主義からの別離」の過程と捉えている。

③ 「墓場」自体、「母を葬つてから急に世界が暗くなつた岡本は」という一節から始まつており、母の死が彼の氣力を奪つたことは否定できない。

④ 連載版「墓場」は明治文献『木下尚江著作集』第八卷（一九六九）以下『著作集』と略す、教文館『木下尚江全集』第一八卷（一九九九）以下『全集』と略す）の双方に収録されている。本論での引用は『東京毎日新聞』によつた。

⑤ 一例を挙げると、『新紀元』（一九〇六年八月）収録の「宗教家を一掃せよ」で尚江は、「戦争起れば戦争を賛美し、敵愾心旺さかんなれば敵愾心に謳歌し、陋劣なる官人等の利用する所となる」と、「仏教及び基督教諸先達」の時局迎合あきやまぶりを罵倒している。

⑥ 定本『墓場』では、岡本は「僕」に、錦橋は秋山に改められ、モデルとの類似が一層強調されている。

⑦ 九月一日掲載の第五回（最終回）は、原文では「一の四」と記されているが、明らかに「一の五」の誤記であると思われるため、本論では「一の五」と表記した。

⑧ 荒畑は次のように回想している。

この騒動の最中に、私は曙会の同志と謀つて横浜市内で講和賛成の演説会を開いた。一人として私たちに敵意を示した者はなかった。果然、民衆の怨嗟憤激は直言記者が論じたように、必ずしも屈辱的な講和条件のためではない。国民に犠牲を強いながら暴状いたらざるなかつた為政者に対して、戦争中しいて抑え来つた国民の宿怨積憤がいまその吐け口を見出したに過ぎないのだ。

荒畑寒村 『寒村自伝 上巻』 筑摩書房 一九六五 九七頁

文中の、講和が原因ではないと論じた「直言記者」とは、事件直後に機関誌『直言』に掲載された無署名論説「政府の猛省を促す」の筆者と思われる。これは一時幸徳の筆と思われていたが、前掲後神論によつて尚江筆と証明され、『全集』にも収録されている。

⑨ イーザーは、連載小説に特有の読書形態（中断を強いられること）について以下のように論じている。

このような空所は、読者自身に物語の躍動性を与えさせる効果をもつ。読者は登場人物とともに生活をし、彼らが遭遇する事件に一喜一憂し始める。読者は物語の展開がどのようなかわからないが、それは登場人物にとつての明日を定めぬ暮しと同じことに思えてくる。こうして読者と小説の人物とは、いわば（共通の）空白地平によつて連帯関係をもつようになる。

イーザー 『行為としての読書』Ⅳ テクストと読者の相互作用 B 構成行為の

推進力」 岩波現代選書 一九八二 原著一九七六

⑩ 幸徳が「墓場」を読んだという証拠はない。しかし連載当時、幸徳は赤旗事件の公判傍聴のため上京しており、『東京毎日新聞』を発表媒体に選んだ尚江が幸徳を読者として意図していたことは十分に考えられる。

⑪ 今日では大逆事件とは官憲側のいわゆるフレームアップであつたとする説が主流である。しかし尚江は、少なくとも幸徳に関しては（他の被告についてはほとんど何も語っていない）天皇暗殺の意思があつたものと考えていたようである。

# 博士論文『明治の平和主義小説』結論

フィクション ニュース  
— 小説は新聞を変えられるか —

## 一 序論および第一部～第三部の概観―平和主義小説の到達点

序論で扱った矢野龍溪の一連の平和主義小説は、先駆的ではあるが一つの欠点があった。平和を実現・維持するための暴力装置の存在を、否定しきれなかったという点である。

『経国美談』の平和会議は違反国を罰するための武力行使を認めていたし、『浮城物語』にあつては海王国の独立は浮城艦隊の軍事力によってのみ保証されていた。『新社会』では各国労力者の連帯による世界平和という構想を描きかけたものの具体化はせず、『不必要』に至つては再び平和維持のための軍事力を正当化するに至つた。

この結論部での課題は、一連の平和主義小説がどこまで絶対平和主義（平和のための暴力さえも否定する主義）に近づきえたか、あるいは平和優先主義（平和のための暴力を肯定する主義）にとどまったかを検証することにある。

第一章および第六章で扱った福地桜痴の二作品に共通するのは、政府やテロ集団の暴力に対して、「決闘」という個人レベル間の暴力による対抗手段を提示している点である。だが、『仙居の夢』『女浪人』のいずれでも決闘は最終的な解決手段にはならず、主人公は演劇もしくは説得という非暴力的手段によって目的を達成していく。だが、説得の口実にせよ「国家の御為」という建前に固執した点で、桜痴が「国家のための暴力」を脱しきれなかったことを示している。

第二章・第四章・第五章で扱った村井弦斎は、本論が扱わなかった長編『日の出島』では太陽エネルギーによつて日本が覇権国家となる可能世界を描いており、本論が取り上げた作家たちの中では、最も国家主義的といえる。従軍看護婦の善意を大量殺戮兵器が押しつぶす『匿名投書』、恋愛や感情に動かされることを動物的とみなして抑圧する『釣道楽』の二作品は、せいぜい平和優先主義の段階にとどまっている。ただ、金力や腕力を自慢する不実な恋敵たちを相手に、「婦人の勢力」（想像力・感情移入の能力）を武器にすることとヒロインと結ばれ、恋敵たちさえも最後に改心させてしまう『小説家』の主人公にだけは、後に絶対平和主義に転向する弦斎の、言葉の力への信頼を見ることができると。

第三章で扱った遅塚麗水の『電話機』が特異なのは、これまで扱ってきた作家たちが否定しきれなかった、「国家のための暴力」（たとえば警察力）をも、反体制派の暴力行為と等しく批判している点である。ミクロレベルの「言葉による暴力」の氾濫と、その抑圧をはかるマクロレベルの「国家のための暴力」との衝突を阻止したのは、交換手という職にある一個人の良心であつた。暴力を（戦争をとまでは書いていないが）個人の自由意志で阻止・予防しようとした点で、『電話機』は絶対平和主義の先駆的作品と呼びうる。

第七章～第九章で扱った木下尚江は、『火の柱』ではまだ、国家の暴力に言葉の暴力で対抗する（具体的にはスキヤンダル暴露の）段階を脱しきれいかなかった。『良人の自白 続篇』でようやく、個人から個人へ、国家や階級の壁を越えて対話を試みる主人公を描きえた。それは「平和のための暴力」さえも否定する絶対平和主義小説の到達点である。



## 二 小説は新聞を変えられたか

フィクション ニュース

では、そうした平和主義小説の達成は、日清日露戦争期およびその後の日本の歴史にいかなる影響を及ぼしたか。

個々の作品の同時代評価は、すでに各章でも述べてきた。まったく評価された痕跡のない『電話機』から、日露戦争下に版を重ねて平民社の財政を助けた『火の柱』『良人の自白』まで、その評価はまちまちである。特に木下尚江の『良人の自白』は武者小路実篤・香川豊彦・木村毅・前田河廣一郎・山川菊栄・吉屋信子・神近市子ら、社会問題の解決に関心を持つ青年男女に深い感動を与えてきた(筑摩書房『明治文学全集45 木下尚江集』(一九六五) 山極圭司「解題」による)。

だが、その『良人の自白』に動かされた人々であっても、その後の生涯ですべて平和主義を貫いたわけではない。武者小路実篤・木村毅・吉屋信子のように、積極的に戦争協力の側に立った文学者もいるという事実は、むしろ尚江の小説が必ずしも「平和主義小説として」読まれていたのではないことを示している。文学的意義のためではなく、非戦論のために小説を書いた尚江からすれば、これは敗北といえるであろう。『経国美談』後篇から『墓場』に至る明治の平和主義小説の歴史は、いわば連戦連敗の歴史でもあった。

平和主義小説は戦争を止めることはできなかった。その事実を認識した上で、問いを変えなければならぬ。「小説は新聞を変えられたか」ではなく、将来において「変えられるか」と。

## 三 展望―小説は新聞を変えられるか

フィクション ニュース

「平和のための暴力」さえも否定するに至った木下尚江にとって、最終の目標は相対的な「軍備縮小」にとどまらない、完全な「軍備撤去」であった。

善良なる愚学者は講義して曰く、軍隊は国家防衛の干城のみと。何ぞ知らん、軍隊は国民鎮圧の魔力に外ならざることを。(略)

今や世界の災禍は軍備に在り。軍備縮小、而して軍備撤去、是れ明白に世界万民の希望要求也。

木下尚江 「日本国民の大誘惑」 『新紀元』第一二号 一九〇六年一〇月

「軍備撤去」は、国家間の協議や国際機関による「軍備縮小」とは次元を異にする。力をもって力を抑えるという、人類が文明誕生以来慣れ親しんできた慣例への決別である。

絶対的非戦論、

何時の世にも、人の心の真底には必ず此の声がさゝやいて居る

木下尚江 「愛と労働(思潮史論)」 『新生活』三号 一九〇八(明治四一)年三月五日

何時の世にも「あるべき」ではなく、「ある」と断言しているのである。日露戦争とその後、の社会主義運動の過激化を見届けた後で、なぜ尚江はこのような確信を持ち得たか。

尚江は「吾人をして世界的平和の大光明」を感じさせた実例として、「戦争に於て其兄と叔父」を亡くした「露国の年少音楽家クロースチツフ嬢」の東京での演奏が、日露戦争で失明した山岡少佐も含めた日本人を感動させたニュースを紹介している。

嗚呼敵とは何ぞや、味方とは何ぞや。敵国露西亞の少女クロースチツフは、此の迷想妄執を破散すべきの大使命を担ふて、日本の首都に来れるなり。吾人は彼女の大成功に對して無限の感謝を捧げざるを得ず。

木下尚江 「少女樂師の使命」 『新紀元』第三号 一九〇六年一月

旅順要塞に降伏を勧告した山岡熊治元少佐が、クロースチツフの演奏会に出席していたか否かについては、現時点では裏づけをとることはできなかった。だが、この一文は尚江の見通しを読み取るには十分すぎる。すなわち、芸術的感動による、個人から個人への、暴力の連鎖への非暴力的な抵抗である。

近年における個人的非暴力行動の理論として、マイケル・ランドルの『市民的抵抗―非暴力的行動の歴史・理論・展望』にある、リチャード・グレッグが「道德的柔術」と呼ぶ理念を引用する。

非暴力抵抗者の目的は、暴力による戦いにおけるように、自分の相手を傷つけたり、粉砕したり、侮辱したりすることにあるのではない。その目的は、相手を改心させ、両者にとって真に友好的で満足のいく解決を求めることに抵抗者とともに誠心誠意参加するように、彼の理解と価値観を変えることである。

マイケル・ランドル著 石谷行・田口江司・寺島俊穂 訳 『市民的抵抗―非暴力的行動の歴史・理論・展望』（新教出版社 二〇〇三 原著一九九四）

この「改心」を目的とする「道德的柔術」は、尚江が『新紀元』誌に連載し、一九〇七年に『飢渴』の題で刊行した、一連の絶対平和論とほぼ一致する。

一方、ランドルはジーン・シャープが提唱した、「より実用主義的」な「政治的柔術」についても言及している。「改心」（小松茂夫訳では「回心」）だけでは、「大規模な集団間の大きな闘争ではその有意性が疑わし」い。それに次ぐ非暴力のメカニズムとして、シャープは「和解」と「非暴力的強制」をあげている。後者は集団による不服従運動であり、ここでは前者を問題とする。シャープ自身による定義は以下の通りである。

和解においては、敵対者が、（略）問題となつてゐる事柄が争うに値するほど重大ではないと考えるようになるとか、あるいは、もし譲歩しなければ強制されることになるかもしれない自己の敗北を予見して、恩を売るかもしれない損失を最少限度にとどめるという形で、相手の要求に応ずるといふことをのぞむようになる

ジーン・シャープ著 小松茂夫訳 『武器なき民衆の抵抗―その戦略論的アプローチ

一方、「和解」は個人レベルでも実現可能であり、しかも「改心」よりも人間性の低い面に訴える、より応用範囲の広い非暴力的抵抗である。シャープはこれらの手段での「非武装による国防」「戦争と圧制の双方を前進的に根絶してゆく努力」を、「それはわれわれの生きている間に実現しようと思えば実現しうるであろう」と断言している。

本論が扱ってきた小説でいえば、演劇によって敵対しあっていた政治家たちを強引に仲直りさせる『仙居の夢』の西藤や、「面白さ」を追求することで敵対者たちと宥和していく『小説家』の主人公、己の野心を「つまらなき事」と笑い飛ばす『電話機』のヒロインは、「和解」の原理を体現しているといえる。この三作品は反戦小説ではないにも関わらず、個人レベルでの悪意や暴力性を無効化していく方法を描いている点で、すぐれた平和主義小説たり得ているのである。

だが、「改心」よりも人間性の低い面に訴える「和解」には、説得者自身が低いレベルに譲歩してしまう危険も生じる。動物と人間の違いを強調するあまり人間至上主義に陥った『釣道楽』や、名目であったはずの「国家の御為」にヒロイン自身が縛られていく『女浪人』は、そうした「和解」のメカニズムが陥る危険を描いている。

可能であれば、敵の道徳心に訴える「改心」を。それが不可能であれば、譲歩してはいけない一線を守った上で、善悪よりも快不快の判断や気概に訴える「和解」を。それが明治の平和主義小説の歩みであった。

だが、時代は逆の方向に進んでいた。文学から「娯楽」「面白さ」の要素を排斥しようとする批評家たちが一九〇〇年の段階で存在したことは、序論および第四章で『浮城物語』や『小説家』を論じた際に述べたが、日露戦争後の自然主義文学はさらに、平和主義などの道徳的理想さえも、通俗的であるとして追放していったのである。

今や危機は文芸其物の頭上にも臨み来れるなり。彼の専門の文芸家は動もすれば則ち文芸の絶対的独立を絶叫す。然れ共文芸にして人生の全部たらざる限り、其の絶対的独立論は即ち尤も明白なる誤謬に非ずや。

木下尚江 「新国民の熱望を聴け」 『新紀元』第二号 一九〇五年一二月

「専門の文芸家」による、「文芸の絶対的独立」、後に「純文学」と呼ばれる概念はこの日露戦争後の時期に形成されていった。そしてそれは、専門ならざる新聞小説家による、平和のための小説の時代の終わりを意味した。そして太平洋戦争期には、文筆で戦争に抵抗する「純文学者」は一人も現れず、わずかに大衆小説家とされていた中里介山が非協力を表明したのみであった。

面白さや倫理を「通俗」と呼んで排除してきた純文学は、はたして「人生の全部」を描いていたか。文学の終焉が言われる今日、もしまだ文学の実作と研究にフロンティアがあるとすれば、それは明治期にはついに未完成に終わった平和主義小説ではあるまいか。

以上、本論が扱ってきた平和主義小説の真髄を一言で表すとすれば、以下の通りである。敵さえも感動させること、それが不可能ならば、せめて面白がらせること。

付 『明治の平和主義小説』 関連略年表

- 一八四一（天保一二） 福地桜痴（源一郎）、長崎に生まれる（～一九〇六）
- 一八五〇（嘉永三） 矢野龍溪（文雄）、佐伯藩（大分県）に生まれる（～一九三二）
- 一八六三（文久三） 村井弦斎（寛<sup>ゆたか</sup>）、吉田藩（愛知県）に生まれる（～一九二七）
- 一八六七（慶応二） 遅塚麗水（金太郎）、静岡に生まれる（～一九四二）
- 一八六八（明治元） 鳥羽伏見の戦い。福地桜痴、幕府に京都進撃を提案するが不採用
- 矢野龍溪、朝廷親兵として参戦
- 一八六九（明治二） 木下尚江（本名同じ）、松本藩（長野県）に生まれる（～一九三七）
- 一八八二（明治一五） 矢野龍溪、『郵便報知新聞』社長に就任。立憲改進黨に参加
- 一八八三（明治一六） 矢野龍溪『経国美談 前編』
- 一八八四（明治一七） 矢野龍溪『経国美談 後編』
- 一八八九（明治二二） 大日本帝国憲法発布
- 一八九〇（明治二三） 森鷗外『舞姫』『国民之友』
- 矢野龍溪『報知異聞 浮城物語』『郵便報知新聞』
- 福地桜痴『仙居の夢』『東京日日新聞』
- 村井弦斎『匿名投書』『郵便報知新聞』
- 遅塚麗水『電話機』『郵便報知新聞』
- 村井弦斎『小説家』『郵便報知新聞』
- 日清戦争（～九五）。『郵便報知新聞』、『報知新聞』に紙名を変更
- 一八九六（明治二九） 村井弦斎、『日の出島』『報知新聞』。～一九〇一）
- 一九〇〇（明治三三） 北清事変。
- 一九〇一（明治三四） 村井弦斎『釣道楽』『報知新聞』
- 一九〇二（明治三五） 福地桜痴『女浪人』『日出国新聞』<sup>やまと</sup>
- 矢野龍溪、『新社会』
- 一九〇三（明治三六） 村井弦斎『食道楽』『報知新聞』、代表作となる
- 幸徳秋水・木下尚江ら、平民社を結成し非戦論を展開
- 一九〇四（明治三七） 日露戦争（～〇五）
- 木下尚江『火の柱』『毎日新聞』
- 木下尚江『良人の自白』『毎日新聞』。～〇六）
- 一九〇五（明治三八） 村井弦斎『脚本食道楽』、歌舞伎座にて上演。福地桜痴が絶賛。
- 夏目漱石『吾輩は猫である』
- 一九〇七（明治四〇） 矢野龍溪、『不必要』『毎日電報』
- 田山花袋『蒲団』
- 一九〇八（明治四一） 木下尚江、『墓場』『東京毎日新聞』
- 一九一四（大正三） 第一次世界大戦（～一八）
- 一九一七（大正六） 村井弦斎、『小松嶋』『婦人世界』